霜島ケイ
KEI SHIMOJIMA
イラスト
ミギー

カラクリ荘の異人たち2

～お月さんいくつ、十三なつ～



GA文庫

カラクリ荘の異人たち2

～お月さんいくつ、十三ななつ～

霜島ケイ

GA文庫

「できたぞ」

「今日はオリジナル・レシピによる
究極で至高のチーズケーキだ」






「ここが和泉の言っていた
異世界だったらどうする？」


心臓のあたりが、きゅうっと痛かった――。

カラクリ荘の異人たち2
～お月さんいくつ、十三ななつ～

霜島ケイ

GA文庫

カバー・口絵　本文イラスト

ミギー

目次

一章　薄売り……5
二章　夢の交い路……125

一章　薄売り

1

「ねえねえ太一、太一ってば、ねえねえねえ……」
さっきから、机にむかっている太一の腕を小さな手が摑んでゆさぶっている。
「ねえってばねえってば、ねえ」
「んー、なに？」
「遊ぼっ」
空栗荘０１４４号室（ちなみにこれは、語呂合わせで『お人好し』と読む。大家いわく）の住人である阿川太一は、ちょっとため息をついて、目の前のノートから顔をあげた。
時計を見ると、夜の十一時過ぎだ。
「太一、遊ぼ。隠れんぼする？　あやとりする？　双六する？」
椅子の横で、太一の腕を引っ張ってねだっているのは、見た目は七、八歳くらいの女の子だ。

名前はアカネ。ふわふわとしたクリーム色のワンピースに、レースみたいな胸当てつきの白いエプロン——これは『不思議の国のアリス』の主人公を真似た、彼女のお気に入りの格好らしい。おかっぱ頭でなかなか可愛らしい顔立ちをしているが、実は人間ではない。

正体は市松人形に魂が宿った、付喪である。

もとは傀儡師であった太一の祖母が空栗荘に置いていったとかで、いつもは玄関のガラスケースの中にいるのだが、やたら太一になついてこうしてしょっちゅう、人間の姿になってやって来るのだ。

「あのさ、アカネ」

「うん」

「俺、明日も学校だから。この宿題を片付けて寝なきゃいけないんだけど」

「うんうん」

わかっているんだかいないんだか、アカネはうなずくと、ぽんと太一の膝の上に飛び乗った。腕を伸ばして彼の首にしがみつき、きゅうっと身体を抱きしめた。

「太一、だーい好き！」

「うぅ」

首が苦しい。それより何より、太一は他人に触れられるのが大の苦手だ。人の手の感触や温もりが気持ち悪い。誰かにいきなりどこかを摑まれたりしようものなら、背中がぞわぞわして

反射的に振り払うか飛び上がってしまう。
（……でもこれってもう、触られるとかいうレベルじゃないし）
きゅうきゅうと抱きしめられながら、太一はまたため息をついた。
アカネにくっつかれるのは、それほど嫌じゃない。少々、気恥ずかしくはあるけれども。この子が人間ではない、体温をもたないモノだからかもしれないし、毎日こんなふうに無邪気にベタベタされていい加減に耐性ができたせいかもしれなかった。
だがしかし、困ることにかわりはないのである。特に今みたいに勉強の邪魔をされたり、夜中に寝ているところを『遊ぼう』攻撃で奇襲されたりした時などは。
「今日は駄目。明日、遊んでやるよ」
かじりついているアカネをどうにか引きはがして、床におろした。
付喪の少女はぷっと頬をふくらませた。
「やだやだ。アカネは太一と今遊ぶの」
「うるさくしたらタカハシさんに怒られるだろ」
隣室の１７４（ヒトデナシと読むが、たんに人間ではないという意味だ）号室のタカハシさんは、騒々しいのが大嫌いだ。
「太一の意地悪っ」
「とにかく今日は遊ばないの」

「むぅっ」
ふくれっ面で上目遣いに太一を睨んだアカネだが、急に目を瞬かせると、窓のほうに目をやった。首を傾げている。
「どうしたの？」
「なんか来たよ、太一」
「え？」
ばんばん、とその時窓が鳴った。部屋の南側の窓だ。ガラスを誰かが手で叩いているような音だった。
太一は机を離れると、カーテンを引き開けた。
こんな時間であるから、外は真っ暗だ。窓の外には誰も、何もいない。ヘンだなと思ったけれども、考えてみれば誰かがそこにいるほうがヘンなのだ。太一の部屋は二階にあるのだから。
（でも確かに誰かが窓を叩いたみたいだったけど？）
窓を開けて、外をのぞこうと身を乗り出した、とたん。
「うわ」
ぎらぎらと金色に光る大きな目玉がふたつ、太一の目の前でぱちりと開いた。
どうやらそいつは、窓の下の壁にへばりついていたらしい。毛むくじゃらの手で窓枠を摑むと、太一を突き飛ばして部屋の中に飛び込んできた。

大きさもかたちも人間に似た、人間ではないモノだ。
（ええと……妖怪？）
床に尻餅をついた格好の太一の前を素通りして、そのなんだかよくわからない毛むくじゃらは、ドタバタと騒々しい足音をたてて、あっという間に部屋のドアから廊下へと姿を消した。
「また来たよ」
妖怪を見送り、もう一度窓のほうに目をやって、アカネが言う。
「う、うん」
次に窓からにゅっと顔を突き出したのは、警官である。顔といっても卵みたいにつるんとしていて、目も鼻も口もない。
のっぺらぼうだ。
（あれ、このお巡りさん……）
いつだったか、裏の賽河原町で出会った警官だった。多分。妖怪の町の警官が全員のっぺらぼうだったりしたら、人違いかもしれないが。
一応、土足はまずいと思ったのか、のっぺらぼうは窓枠を越えると丁寧に靴をぬいで、片手にぶらさげた。そうしてもう一方の手で警棒を振り回しながら、毛むくじゃらのあとを追って廊下へと飛び出していった。
（そっか。仕事中なんだ）

納得して太一が立ち上がった時、「うるさい！」という声が廊下に響いた。渋めの男性の声だ。つづいてバタン、ドカッというすごい音。

（あ、タカハシさんが怒った）

アカネと二人しておそるおそる廊下に顔をのぞかせると、ちょうど隣室のドアがバンッと音をたてて閉ざされたところだった。

タカハシさんの鉄拳制裁をくらったらしく、毛むくじゃらの妖怪は、見事に大の字に床にのびていた。警官のほうはそれを見下ろして、「どうしたものか」というように頭をかいている。

「あの」

太一が声をかけると、のっぺらぼうは卵みたいな面をこちらにむけた。

「こないだは、ありがとうございました」

どうやら太一のことは覚えていなかったらしく、のっぺらぼうは首を傾げた。

「……多分あなただと思うんですけど。俺、狢を探している時に道を訊きましたよね。そのあと熱中症で倒れて、お巡りさんに化け狸の家まで運んでもらって……」

それでやっと思い出したらしい。警官は靴を床に置くと、片手の拳でもう一方の掌をぽんと叩いた。「ああ、あの時の」とでもいうように、太一を指さして何度もうなずく。

「俺、まだお礼を言ってなかったから」

いやいや礼にはおよばない、と警官は手と首を振って見せた。

（すごい。のっぺらぼうと意思の疎通ができるなんて）

しかも、人間相手よりもラクだ。

言葉があって、それをしゃべる口があっても、太一はいまだに『家族』やクラスメートとうまくコミュニケーションがとれないでいる。相変わらず友達と呼べる人間はいない。

……いや、正確には一人、夏休みからよく会話をするようになった相手はいるが。

（そういえば和泉って、よく話しかけてくるよな）

太一と話がしたい一心で、和泉栄奈が会話のきっかけをつくるために日々奮闘していることを、彼は知らない。

毛むくじゃらがひっくり返ったままなので、警官は「よいしょ」とばかりにその身体を肩に担ぎあげた。けっこう力持ちだ。

その頃には、騒ぎに気づいて他の住人たちも部屋から出てきた。

タカハシさんの部屋のさらに隣、５９６３（ごくろうさん）号室のミヨシが、カップめんを片手にドアから首を突き出した。廊下の妖怪を見て、箸をくわえたまま「なんやねん」と呟く。

「どうしたの？　すごい音がしたけど」

階段を駆け上がってきたのは、一階の１１０７（いいオンナ）号室の井原古都子と、８７８３（花屋さん）号室の風田レン、２４００（自信満々）号室の十遠見順だ。そのあとに空栗荘の食事係兼世話係のお露さんがつづく。

姿を見せないのは、大家の時国柊二郎だけである。
毛むくじゃらを担いだ警官は、住人たちに敬礼しながらその前を通り過ぎ、何事もなかったように階段を下りて去っていった。
すぐに玄関の戸が閉まる音がして、住人一同のぽかんとした沈黙があとに残った。
「おやまあ。……なんてこったろうね、妖怪が許しもなく入り込むなんて」
本人も十分に妖怪婆じみているお露さんが、思い切り呆れた声で、その沈黙を破った。
「で、今のはなんや?」
ミヨシが、カップめんの汁をずずっと飲み干して訊く。
「山童だね」
「それがなんでお巡りに追っかけられとるんやろ」
「さあ。万引きでもしたんじゃないかね」
どうでもよさげな、お露さんの口調だ。
古都子は傍らに立つ十遠見を見た。
「……ところで十遠見さん、そのパジャマってホルスタイン柄?」
「それが何か?」
「いいの。聞いただけ」
視覚の暴力、とは誰も口に出せない。

一見クールなエリートサラリーマン風、いつもは銀縁メガネとスーツできめている十遠見が愛用するパジャマは、白黒まだらの派手な牛柄模様であった。ギャップの激しい男だ。

「そういうおまえも、もうちょっと色気のある寝間着を着たらどうや。おっさんやあるまいし、なんやねん、そのジャージと首のタオル」

「あら、悪いわね。まだ作業中だったの。師匠に言われた課題が終わらなくて、今夜は徹夜かも。……さすがに寝る時はこんなかっこはしてないわよ」

「なら、どんなかっこやねん」

「別のジャージ」

古都子は木彫り職人だ。人間の住む側ではなく、妖怪側の町にある工房に通っている。部屋番号の語呂合わせが「いいオンナ」というだけあって、和服が似合いそうな細身の美人なのに、本人はお洒落も色気にもあまり興味はないらしい。

「だけどやっぱりヘンですよね。あの妖怪、どうやって入ってきたんですか」

こちらもジャージ姿のレンが、控えめに口をはさんだ。

「あのねあのねっ、太一が窓を開けたら入ってきたんだよ。外からぴょん、て。それでお巡りさんが、あとを追っかけてきたの！」

太一の腕にぶらさがるようにしていたアカネが、嬉しそうに声を張り上げた。みんなの話に自分もまざりたくて仕方がなかったらしい。

けれどもそれがずいぶん大きな声だったので、全員が慌てて唇に人差し指をあてて「しーっ」と言った。

幸い、タカハシさんの部屋のドアは静まりかえったままである。

「窓を開けたら、だって？」

お露さんが手招きするので、太一はアカネをくっつけたまま、そばまで行って説明した。

「あの、窓を叩く音がしたので。それで開けたら、あの妖怪が飛び込んできて……それでタカハシさんがうるさいって怒ったんです」

「おまえな、そこでいきなり窓を開けるか？　ちょっとは妙やて思うやろ、ふつう？」

ミヨシが睨む。

すみません、と言ってから、太一は首を傾げた。

「でも、何が妙なんですか？」

実はさっきから、他の住人たちが何を不思議がっているのかさっぱりわからない太一である。人間なら二階の窓から飛び込んでくるのは奇妙だけど、妖怪ならそういうこともあるんじゃないかと思う。

「あんたの部屋の窓から普段見えているのは、人間の町の風景だろう？」

お露さんはじろりと太一を見て言った。

「はい」

「そういうことさ。いくらここが、あちらとこちらの境界にある建物といってもね、窓はあっち側とは繋がっていない。繋がっていなけりゃ、たとえあんたが窓を開けたところで、賽河原町の裏の住人が入ってくるわけがないんだ」

「そうなんですか」

「連中が入ってくるとしても、玄関からだ。それもこっち側の人間が招き入れてやらないと、妖怪は敷居を越えられない。そういう決まりなんだよ。あっちとこっちが交わらないためのね」

「はあ」

それで太一にもやっと理解できた。

あの毛むくじゃらとのっぺらぼうの警官が窓から入ってきたというのは、要するに空栗荘では起こるはずのない一大事というわけだ。

お露さんはあくびをひとつすると、やれやれと首を振った。

「まあ、ここでゴチャゴチャ言ってたって仕方がない。もう遅いし、今夜のところはみんな戸締まりに用心して寝ておくれ。入ってきたところで、たいして悪さをする連中じゃないけどね。……あんたも、いくらお人好しだからって、誰が来たって簡単に窓を開けるんじゃないよ。夜中に二度もこんな騒ぎはごめんだからね」

最後のほうは太一に言った言葉だ。

「あの、俺ってお人好しですか？」
「だから部屋番号が０１４４なんだろ？」
「……」
窓を開けたのは、ただのうっかりだと思う。お人好しといわれるほど、きっと自分は他人に優しくも親切でもないと、太一は思う。
（だいたい、お人好しっていうのは父さんのことだし）
大家の時国柊二郎に言わせれば、太一の父親の啓介はバカがつくほどのお人好しらしい。息子の目から見ても、啓介が気が弱くて不器用で優しい人間なのは本当だ。でも、だからといって、
――大丈夫。ここに住むようになれば、必ず君も『お人好し』に目覚めます。
そんなふうに言われるのは、ちょっと憂鬱だ。自分はそんなに、あの父親には似てない気がする。
（やっぱり、大家さんに言って部屋番号を変えてもらったほうがいいかも）
空栗荘に住み始めてからもう何度目か、かなり本気で太一はそんなことを思っていた。
とりあえずその場は解散ということで、住人たちは自分の部屋に帰っていった。
アカネは「太一と遊ぶ」とまだぐずっていたが、お露さんに怖い顔で「聞き分けが悪いとガ

ラスケースを御札で封印して外に出られないようにするよ」とおどかされて、プンプンふくれながら階段を駆け下りた。相手をしてやらなかったので少し可哀想だったけど、翌日になればまたケロリとした顔で、「遊ぼう」とやってくるにきまっている。

廊下の戸締まりを点検しているお露さんに「おやすみなさい」を言って、太一も部屋に戻った。後ろ手にドアを閉めたとたん、

「――お露さん」

ドア越しに廊下の声が聞こえた。

「ああ、タカハシさん。騒がせて悪かったね。アタシもこれで寝ることにするよ」

「境界守は？」

「寝てるんだろうよ。なんだろうね、まったく。あの男、今日は一度も起きてこなかったよ。よくもまあ、あそこまでグータラできるもんだ」

「結界が緩んでいる。妖怪が入ってきたのはそのせいだ」

タカハシさんは部屋からは絶対に出てこないので、ドア越しに会話をしているのだろう。ひそひそと声がつづいた。

「このままでは境界を越えてしまう者がいるかもしれない。人間の側からも、妖怪の側からも」

「やっかいだね。わかった。大家に伝えておくよ」

「もうじき月が満ちる。中秋の月は特に気をつけなければならない」
「やれやれ、もう彼岸の入りだっていうのに」
ため息まじりにお露さんが、太一にはさっぱり意味がわからない返事をし、それきり会話が途切れた。
（ええっと、結界っていうのは……）
確かミヨシが以前、「蚊を入れんために網戸を閉めるようなもん」と言っていた。人間と異形の世界の間を仕切る、目に見えない壁のようなものなのだろうと太一は思う。
月がどうの彼岸がどうのというのは全然わからなかったが、多分、太一が知らなくてもいいことだろう。この空栗荘では、いつもよくわからないことばかりが起こるのだから。
（あ、しまった。宿題をやらなきゃ）
時計を見れば、とっくに日付が変わっている。付喪と妖怪にすっかり邪魔されてしまった。
（こういうのって絶対、平凡な日常生活って言わない気がする）
太一はため息をついてドアから離れると、警官が入ってきたあと開けっ放しになっていた窓を閉めた。きっちりと鍵もかける。
そうして、あらためて外を眺めた。
ガラスのむこうには、底なしの闇が広がっていた。
いつもなら見えるはずの道路の街灯も、周辺の家々の明かりもない。真っ暗な空には月も星

もなかった。窓のすぐ外にある桜の木が、さわさわと枝を鳴らしているのだけが見える。
ひやりとした。部屋の外に、空っぽのひたすら黒い空間だけがあるような気がして。
――夜じゃない。本当に、ただの闇だ。
太一はカーテンを閉めた。
とたんに、庭の草の中に潜んでいた虫たちがリーリーといっせいに鳴きはじめた。秋の虫の澄んだ声が、いつもと変わらない夜を告げている。
それでちょっとホッとして、太一は机にむかった。

2

九月だ。
太一が空栗荘で暮らすことになったのはこの夏休み。今は新学期が始まって、ここから高校へ通うのにもようやく慣れた。
「ほら、早く食べないと遅刻するよ」
今朝は寝坊した。昨日の宿題がなかなか片付かなかったせいだ。食堂に慌てて駆け込んで、寝ぼけ顔で食事のトレイを受け取った太一を、お露さんがじろっと睨んだ。

今日の朝食はベーコンエッグにキュウリとわかめの酢の物、豆腐の味噌汁に納豆に漬け物。なんてことはないメニューだが、味噌汁の出汁の加減ひとつとっても、お露さんのつくる料理は絶品である。

「おはよう、太一君」

先に食べ終えた古都子が、食器をカウンターに戻しながら声をかけてきた。

「昨日は災難だったわね」

「あ、いえ」

古都子は今日もシンプルにTシャツとジーパンという格好だ。長い髪の頭部をバンダナで覆っている。

「課題、終わったんですか？」

「うん、なんとか。おかげで完徹しちゃったけどね。これから工房に行って、師匠に出来を見てもらわなくっちゃ」

食堂の入り口に置いてあった工具入りの布袋を肩にかけると、古都子は爽やかに笑って、「じゃね」と手を振りながら出て行った。さっきからアクビばかりしている太一とは、えらい違いだ。

食堂には他にミヨシがいた。十遠見とレンの姿はない。この二人は朝出てゆくのが早いので、休日以外は朝食の時間に太一と顔をあわせることはほとんどなかった。

「おい」
トレイを持って後ろを通り過ぎようとした太一を、ミヨシがいきなり呼び止めた。朝っぱらからよくそんなに……と思うくらいご飯を大盛りにした茶碗を下に置いて、手招きする。
「やる」
なんだろうと首を傾げて近寄った太一に、納豆の小鉢を押しつけた。
「嫌いなんですか、納豆？」
「食えんことはないけど、関西人の俺にはキツイ。この臭いとネバネバが、どうしてもアカンねん」
ミヨシは厨房のほうを渋い顔で見た。
「残すと好き嫌いするなて、しこたま文句言われるしな。……どうせおまえ、育ち盛りやから食えるやろ。ぎょうさん食って体力つけろ。高校生にしては身体、細すぎや」
「はあ」
育ち盛りでも納豆二人分はちょっと多いと太一は思ったが、結局断り切れずに、そのままテーブルについた。
食堂の窓の外で、セミが鳴いている。
今年は残暑が厳しいらしい。それでも日が暮れればしのぎやすく気温が下がり、昼間のセミと入れ替わりに夜の虫たちが鳴き出す。雲のかたちがかわって、空が少しずつ透き通って高く

なっていく。そんな季節だ。

茶碗にご飯をよそって食べはじめたとたん、食堂のドアが開いて、出かけたと思った古都子が入ってきた。

「もう。困ったな、どうしよう」

「何がどうしようや。つか、おまえ仕事に行ったんとちゃうんか」

「そうだけど、あっち側がまたおかしなことになっちゃってて」

食堂の入り口に立って、古都子は本当に困ったように、ふぅと息をついた。

「おかしなこと？」

「朝から夕焼けなの」

「ああ？」

ミヨシは箸と茶碗を持ったまま、肩をすくめた。

「……てことは、大家が」

「うん。原因は柊さんね」

夕焼け？　大家が原因？

なんだろうそれは、と太一は思ってから、

（そういえば、前にも同じようなことを聞いたっけ）

あれは、初めて空栗荘を訪れた日。

バスを降りるとそこは妖怪の町で、時刻は午後になったばかりというのに、空は夕焼けで真っ赤に燃えていた。いつまでも夕暮れの終わらない町で人間ではない者たちと出会って、太一は自分が異世界に迷い込んでしまったことを知ったのだ。

妖怪の世界でも、朝昼晩のサイクルは人間の世界の一日と同じである。でもその日はちょっと特別で、特別である理由は大家である時国柊二郎が知っているのだと、あとで空栗荘の住人たちが言っていた。

で、その理由というのを今に至るまで太一は聞いていない。

忘れていたせいもあるし、どういうわけか大家がめったに住人たちの前に顔を出さないせいもある。

「どうかしたのかい？」

「ああ、お露さん。あのね――」

厨房から手を拭きながら出てきたお露さんに、古都子が事の次第を説明する。

「やれやれ、またかい」

お露さんは首を振りながら、のそのそと食堂を出て行った。玄関へ行って自分の目で確かめたらしく、すぐに戻ってきた。

「朝っぱらからこれだよ。まったく、大家にも困ったもんだ」

「さっさと叩き起こせばええやろ」

フンと鼻を鳴らしてミヨシが言うと、お露さんは皺だらけの顔をしかめた。
「さっきも起こしに行ったんだけどね。高いびきで眠ってて、かけらも目を覚ましゃしない。あの様子じゃ、隕石が頭の上に落っこちてきたって起きやしないだろうよ」
「隕石が頭に落ちたら、起きる前にあの世行きやろ」
「夕焼けは別に害にならないけど、仕事ができないのが困りものなのよね」
と、古都子はまたため息をついた。
古都子の師匠だという人（もと・人間だ。今はほとんど妖怪化しているらしい）は、電気を嫌って明かりといえば蠟燭しか使わせてくれない。だから日が暮れれば、手元が暗くて木彫りの作業がはかどらないのだ。
「……もうちょっと待てば、もとに戻るとは思うんだけど」
「起きててもボンヤリだけど、寝ている時が一番役立たずだね、あの男は」
お露さんが容赦なく断言する。
「あの」
太一はもぐもぐと朝食を食べつづけながら、さっきから不思議に思っていたことを言ってみた。
「大家さんて、どうしていつも寝てるんですか？」
「そりゃ、性格がグータラだからだろうよ」

しごく簡単なお露さんの答だ。
「それじゃ大家さんが寝ているのと、あっちの町が夕焼けなのとは何か関係があるんですか？」
太一以外の三人は、顔を見合わせた。
「太一君、まだ知らなかったんだ」古都子が言えば、ミヨシが仏頂面で「おおありや」と呟く。
「説明してやってもいいけど、あんた、のんびりと聞いている時間があるのかい？　早くしないと本当に遅刻だよ」
お露さんは食堂の時計を指さした。
時間を見て、太一は「うわ」と声をあげた。
（やばっ）
このままではバスの時間に間に合わない。慌てて皿の上に残っていたものを全部口の中に押し込むと、太一は立ち上がった。トレイをカウンターに戻して、
「ごちそうさま、行ってきます！」
「あいよ」
お露さんはうなずく。
「夕焼けの理由は、あんたが学校から帰ってきたら教えてあげるよ。その頃には、大家もさすがに起きているだろう。昨日も一日寝ていたんだし」

太一は部屋に駆け戻るとカバンを摑んで、飛び出した。

玄関を出る一瞬、人間の町のほうも夕焼けだったらすごいと思ったが、むろんそんなことはなく、磨りガラスを嵌め込んだ戸を開けると、そのむこうにはまっさらな朝の光が射していた。人の世界は、いつも通りの平和な朝である。

盛りを過ぎたセミの合唱のむこうに、鰯雲が浮いた青い空が広がっていた。

空栗荘は賽河原町の表側つまり人間の世界と、裏側の妖怪の世界の両方に通じる、下宿屋兼旅館である。

この世には、そんなふうにあっちとこっちが繋がる場所が幾つもあるという。空栗荘の大家であるところの時国柊二郎は、両者がうっかり交わらないように境界を見張る管理人で、境界守と呼ばれているらしい。——ということを、太一は空栗荘に来てから、初めて知った。

太一が空栗荘に下宿する、そもそものきっかけは、柊二郎と太一の父親が幼い頃からの知り合いであったことだ。父の啓介は数年前に太一の母親と離婚し、この春に「鈴子さん」という女性と再婚した。

その父の勧めもあって、太一は家を出て一人暮らしをすることにしたのだ。

別に「鈴子さん」が彼を邪魔にしたわけではない。彼が「鈴子さん」を嫌ったわけでもない。でも『家族』と一緒にいると、息が詰まりそうだった。あの家には自分の居場所など、どこに

もない気がした。
だからそこから逃げて、逃げ込める場所なら、どこでもよかった。
まあ今にして思えば、「どこでもいい」にもほどがあった。おかげで、昨夜みたいに人間ではないモノたちとしょっちゅう顔をつきあわせる生活が、始まってしまったわけである。
「ね、ね、阿川君！」
昼休み、教室の窓から校庭をボンヤリと眺めていた太一に、和泉采奈が声をかけてきた。
「あのね、す、す、すじゅきゅうり……」
「は？　きゅうり？」
采奈は焦ったように首をぶんぶんと振った。
「か、かんでしまった……。なし、今のなし！」
「はあ」
ショートヘアに目がくりっと大きくて、笑ったりしかめっ面になったり今みたいに真っ赤になったり、本当にくるくるとよく表情が変わるなと、太一は采奈を見るたびに思う。
「あ、あのねっ、ススキウリって言いたかったのっ。うちは昨日来たから、阿川君のとこはどうだったかなって思ってっ」
「ススキウリ？」
言葉をかまなくたって、何だかちっともわからない。

「薄売り。薄を売りに来る人だよ。知らない？」
「知らない」
あれれ、と采奈は首を傾げた。
「よそじゃ見ないのかな。賽河原町では、毎年お月見が近くなると薄売りが来ることになってるの。あっちこっちの家を回って、一束百円くらいで薄を売ってるんだよ」
采奈も賽河原町に住んでいる。もちろん彼女は表側の住人で、異世界への出入り口が同じ町内にあるなんてことは、夢にも思っていないだろうが。
「薄なんて、わざわざ買わなくてもそのへんに生えてるんじゃないの？」
「うーん、それはそうだけど。薄売りから買うと、特別に縁起がいいんだって。うちのおばあちゃんが言ってた。昔からの習慣で、薄売りの薄はお月見に飾ったあとに軒下や玄関先に吊しておくと、厄払いができるんだって」
「ふぅん」
不思議な習慣だなと太一は思う。それとも、昔は当たり前のことだったのだろうか。昔は薄売りはどこにでもいて、家々を回って薄を売っていたのだろうか。
「そっか、知らないってことは阿川君とこはまだなんだ。初めて見たら、きっとビックリするよ。楽しみにしててね、薄売りの人ってすごく不思議な格好をしているから」
（……あまり興味ないけど）

でも栄奈がすごく楽しそうに言って笑うから、太一は黙っていた。かわりに、
「和泉の家ではいつも月見とかするの？」
「するよ。阿川君はしないの？」
「したことないけど……」
実家では月見なんて一度もしたことがなかった。でも空栗荘ではどうだろう。
（あそこの人たちって、そういう行事関係はいかにもやりそう）
「お月見って何をするんだろ」
太一は校庭に背をむけて、窓にもたれかかった。
「玄関とか縁側に台をつくってね、そこに薄とお月見の団子と、サツマイモと栗と果物を飾るの。特別な料理とかはないけど、簡単なつまみものやお菓子を用意して、大人だったらお酒を飲んだりもするかな。で、月を見るの。お客さんが来ることもあるよ。子供の頃は近所の友達が遊びにきて、月の光で影踏みしたり隠れんぼしたりしたなぁ」
「へえ」
「あ、知ってる？　お月見団子はよその家のを勝手にもらっちゃっていいんだよ。自分の家の団子が減ると、それだけいいことがあるんだって。団子っていろんなのがあるけど、私はアンコのやつが好き」
「ふうん」

「阿川君はアンコとお砂糖だけの団子と、どっちが好き？」
「俺、甘いのはあんまり……」
「そなの？　えっとえっとそれじゃね、……あ、そうだ。お月見の歌、知ってる？　お月さんいくつ、十三ななつ、まだ年ゃ若いねってやつ。うちのおばあちゃんが、月を見ながらいつも歌ってるんだ」
「へえ」
こういう時にニコニコ笑って、何か上手いことを言って会話が弾めば、他人から「つまらないヤツ」だとか「無愛想」とか「暗い」とか言われずにすむのだろう、きっと。
そうわかっていても、太一には栄奈の言葉に曖昧にうなずくことしかできない。見た目にもきっと、つまらなそうな顔をしているんだろうなと思う。そんなつもりはないのだけれども。
その時、クラスの女子が二人、教室に入ってきた。正確には入ってこようとして、太一と栄奈を見てなぜか「あっ」「ごめん」と言って、ぴょんと廊下に飛び出していった。
「……？」
何が「あっ」で「ごめん」なんだろう？
あの二人は確か、栄奈と仲がよかったはずだ。昼には一緒に弁当を食べているし、休み時間によくおしゃべりしているところを見かける。
「いいの？」

太一は訊いてみた。
「え、なに？」
「友達のところにいかなくて」
「いいのいいの。……二人とも知ってるから」
「知ってるって、何を？」
栄奈は太一を見た。それから「なんでもないっ」と目を回しそうな勢いで何度も、首を左右に振った。
「ふぅん」
二人の女子はまだ廊下にいる。声は聞こえないけど、なんだかクスクスと笑っているような空気が伝わってきた。
「和泉はさ」
「う、うん」
「よく俺に話しかけてくるけど……俺と話をしていて、おもしろい？」
「え……」
栄奈はきょとんとしてから、今度は「うんっ」と大きく首を縦にうなずかせた。
「おもしろいよっ。ていうか、楽しいっ。本当！　すっごく楽しい！」
「そ、そうなんだ」

たいていいつも采奈が一人でしゃべって、太一がなんとなく相づちを打っているだけだから、あまり会話にもなっていないと思うのだが、それでも楽しいらしい。

「采奈」

廊下にいた女子が、教室の入り口から顔をのぞかせて、采奈にうなずいた。「頑張れ」というように、二人そろってぐっと拳を固めてみせた。

采奈もうなずき返し、気合いでもいれるみたいに「えいっ」と両手を拳に握った。

太一にはなんだかちっともわからない。

(のっぺらぼうのジェスチャーのほうが、わかりやすいっつーか)

「阿川君！」

「うん」

「私、阿川君と一緒にいるのが楽しいの！　嘘じゃなくて本当に！」

「そ、そう」

大きな目で睨むみたいに、ものすごく真剣な顔で采奈に言われて、太一は少し面食らった。

「だって、あの、私っ」

「うん」

「私、あのっ……す」

「す？」

「す、す、す、すすすすすすすすすすすすすき」

「ススキ？」

……まあ、直前までの話題が話題であっただけに。

「ち、ちがっ」

采奈はとてつもない衝撃を受けたような顔をして、次の瞬間、トマトみたいに真っ赤になった。

「あうぅ、あのっ、あのっ」

「うん」

「……………………いい。なんでもないの。忘れて」

采奈はがっくりと肩を落としてうなだれると、よろよろと離れていった。

廊下で待ちかまえていた二人が、教室から出てきた彼女をつかまえる。

「どうだった？」

「ちょっと、どうしたのよ、采奈⁉」

気の毒なくらいどんよりと落ち込んだ采奈が無言で歩いてゆくのを追いかけて、声が遠ざかっていった。

（俺、また何か悪いことを言ったのかな）

取り残されて、太一は思った。

よくあることだった。誰かと会話をしていても、相手の感情の動きがわからなくて、話をあわせられなくて、不愉快にさせてしまう。太一が思ってもみないことで、他人はいつもしらけたり怒りだしたりするのだ。

そういうことを何度も繰り返して、どうせ他の人間とうまく話ができないなら、無理に言葉を交わさなくてもいいやと思うようになった。

(でも……和泉は何を怒ったんだろう)

怒ったというより、なんだかずいぶんガッカリした様子だった。

謝ったほうがいいのかなと思うけど、何を謝ればいいのかわからない。

太一はため息をついた。

(空栗荘の人たちとは、もう少しちゃんと話せるのに)

あそこの奇妙な住人たちと、妖怪と、人形のアカネとなら。

上手く会話をしているとは思わないけど、それでもあまり気まずい思いをせずに、もっと楽に自分の思ったことや言わなければならないことを、口にできるのに。

(……やっぱり謝ろう)

采奈と話をして、何がいけなかったのかを訊いて、本当に自分が悪かったのなら謝ろうと太一は思った。今までは他人と関わることが面倒で、どうでもよかったけれど、采奈に対してはなんだかそうしなければいけないような気がした。

だが、結局その日は采奈のほうから話しかけてくることはなく、仕方なく太一は帰り際の廊下で、思い切って彼女に声をかけた。

「あのさ、和泉……」

「きゃっ」

そのとたん、采奈は文字通り飛び上がって、太一の前から後じさった。なんだか小さな動物がビックリして目をまん丸にして、慌てふためいているみたいに見えた。

「うわあぁっと、あ、阿川君、じゃあね！　さよならっ！」

真っ赤になってカバンを抱えて、くるんと背中をむけると、采奈はダーッと走り出した。で、コケた。

廊下で一度派手にすっころんで、でもすぐむくっと起き上がると、カバンを摑んであっという間に逃げるように駆け去っていった。

太一は呆気にとられて、それを見送る。

やっぱりものすごく、気まずかった。

3

ただいま、と心の中で呟きながら玄関の戸を開ける。

外から帰ってきて、何の迷いも不安も怖れもなくその戸を開けることができる一瞬を、太一はいつもホッとして噛みしめる。

母親がまだいた頃や、「鈴子さん」が家に来てからは、「ただいま」というのはいつもひどく緊張する言葉だった。

「おや、おかえり」

お露さんの声が返った。ちょうど玄関にいたらしい。

それと、来客がもう一人。

戸を開けたとたん目の前に立っていたその人物の、不思議な格好に、太一は目を瞬かせた。白い着物。脛のあたりを絞った白い袴。足袋と草鞋。一番奇妙なのは、頭にかぶった笠だ。細く切った色とりどりの紙が縁からぐるりと幕のように垂れ下がっていて、それが胸元まであるものだから、顔がすっかり隠れてしまっている。

その男は、薄の入ったカゴを背負っていた。そのうちの一束をお露さんに手渡して、硬貨を



ちょうど受け取ったところだ。

——初めて見たら、きっとビックリするよ。

——薄売りの人ってすごく不思議な格好をしているから。

そっか、と太一は靴箱にスニーカーを押し込みながら思った。

（この人が、薄売りなんだ）

「はい、ご苦労さん」

お露さんの言葉に、頭をさげたのか笠が少し傾ぐ。薄売りは首からさげた布袋に硬貨を入れると、無言で玄関を出て行った。

「なんだい？」

太一がいつまでもぼうっとそこに突っ立っているので、小銭の入ったがま口を割烹着のポケットにしまいながら、お露さんが訊いた。

「この町の人たちって、みんな薄売りから薄を買うんですか？」

「まあ、そういう習わしだからね。飾る飾らないはべつにしても、薄売りが来た家は、必ず金を渡すことになっているのさ」

「厄払いができて縁起がいいから？」

「おや、誰かに聞いたのかい」

「クラスメート」

「賽河原町の人間かい？」
「はい」
「だろうね。よそにゃ、薄売りなんてもういやしないから」
お露さんはふんと鼻を鳴らした。
「金を払うのは門付けみたいなもんだよ。そうしておけば間違いないって程度の、おまじないみたいなもんさ。なにしろ厄払いならうちは手が足りてるからね」
それはまあ確かに、空栗荘には無節操暴走お祓い男のミヨシも、国家公認術者の十遠見もいる。
「薄売りの人たちって、みんなあんなふうに変わった格好をしているんですか？」
「そりゃね、あいつらは半分妖怪だから」
「……え」
ぽかんとした太一を見て、お露さんは「おや」と肩をすくめた。
「気づかなかったのかい？　あいつらは裏側の住人だよ。……もっとも、表側の人間たちはそんなことは知らずに薄を買っているわけだけれど」
「じゃあ、あの人たちは妖怪の町と人間の町を勝手に行き来できるってこと？」
あちら側とこちら側が境界を越えて交わるのはよくないことなのだと、それだけはここへ来てから理解したつもりでいたから、太一は首を傾げた。

「行き来できるのは一年のうちの数日、中秋の時期だけさ。それ以外は姿なぞ見せやしない。まあね、そういう連中がいるっていうのも昔からの習わしなんだよ」

「はあ」

そうか、今の人は人間じゃなかったのか、と太一は思った。

(だから顔を隠しているのかな)

「ああ、そうだ」

部屋に戻ろうとした太一を、お露さんは呼び止めた。

「カバンを置いたら食堂においで。十遠見がケーキを焼いているから」

「……」

階段に足をかけたまま、太一は食堂にむかってスタスタと歩いてゆくお露さんを見つめた。

(十遠見さんがケーキ?)

薄売りが人間でないことよりも、そっちのほうがはるかに驚きだった。

食堂には甘い匂いが立ちこめていた。

厨房には十遠見がいて、なぜかスーツの上に可愛らしいエプロンをつけて、本当にケーキを焼いていた。昨夜のパジャマに引きつづき、ちょっとした視覚の暴力だ。

「おかえりなさい、太一君」

もうひとつ驚いたのは、古都子が食堂にいたことだった。平日のこの時間、いつもなら彼女は工房に行っているはずである。

「古都子さん、仕事は……？」

「ああ、うん。……師匠に課題を見せに行って、さっき戻ってきたところ。今日はもうダメ。仕事ができないから、お休みにしてもらったわ」

古都子はテーブルに頬杖をついて、でっかいため息をついた。

「柊さん、本当にどうしちゃったんだろ」

太一は彼女の向かい側に座った。

古都子が、仕事ができないと言ってここにいる。……ということは。

「もしかしてあっち側は、まだ夕焼けのままだとか？」

まさか、朝からずっと？

「そうだよ」

答えたのは、お茶を運んできてくれたお露さんだ。湯呑みをテーブルに置きながら、

「いくらなんでも大家だって、この時間には起きていると思ったんだけどねえ。昨日は丸一日寝ていて、それで今日だ。グータラもここまでくれば、恐れ入ったもんだよ。……と、いっそ褒めてやりたいところだが」

お露さんは皺だらけの口元を曲げた。

「さすがに、妙じゃないかね」
「そういうわけで、十遠見さんにケーキを焼いてもらうことにしたの。もちろんお金を払ってだけど」
「材料費と人件費は大家のサイフから出しておいたよ」
十遠見は自称、拝金主義者である。タダ働きは絶対にしない。
それはともかく。
そういうわけって、どういうわけだろうと、太一は思った。相変わらずここの住人は、謎に満ちている。
「大家さん、全然起きないんですか？」
その通りと、お露さんはうなずく。
「じゃあ、大家さんが寝ていたら、どうして十遠見さんがケーキを焼くんですか？」
「そりゃあ、あの大家が甘いものが大好きだからさ。特に十遠見がつくるケーキやらクッキーやらには目がなくてね。いつもなら、寝ていても匂いを嗅いだだけで飛び起きてくるんだ」
なるほど。
要するに寝っぱなしの大家を、十遠見のケーキで釣って目を覚ませようという魂胆らしい。
眠っていてもそれで起きるというのはスゴイ。そこまでしなければ起きないというのも、スゴイが。

「できたぞ。――今日はオリジナル・レシピによる『究極で至高のチーズケーキ』だ」
エプロン姿の十遠見が、焼き上がったケーキを皿にのせて、厨房から出てきた。どこかのグルメ漫画にでも出てきそうな名前のチーズケーキである。
「さすが。十遠見さん、お見事」
濃厚な甘い香りが立ち上る。テーブルに置かれた黄金色（こがねいろ）のチーズケーキを見て、古都子が感嘆の声をあげた。
「ふん。こういうことをやらせりゃ玄人（くろうと）はだしだね、あんたは」
さっそく取り皿にケーキを切り分けながら、お露さんも言う。
それがお世辞でないことは、一口食べてわかった。
（……おいしい）
甘いものはそれほど好きではない太一だったが、本当に、それはビックリするほどおいしかった。
表面がカリっとしているのに、中はしっとりと柔らかい。舌の上でほろほろととろけるようだ。チーズの上品な塩味が、くどくなく甘みを抑えて口の中に広がる。確かにこれなら、本職顔負けである。
「ええと、これはクリームチーズと……パルミジャーノ？」
古都子がケーキを頬張りながら当てっこのように言うと、十遠見は指先でメガネの縁を押し

上げて、
「そうだ。パルミジャーノは塩分が強いので、配分がなかなか難しい」
「十遠見さんて、こういうの上手な人だったんだ……」
太一は思わず呟く。
とたんに、国家公認術者の目がクールな銀縁メガネの奥できらりと光った。
「当然だ。私の夢は将来、可愛い奥さんをもらって可愛いケーキ屋さんを開くことだからな」
一瞬、ケーキが喉につまりそうになった。
冗談かと思ったが、十遠見はニコリともしない。大真面目だ。
「……可愛くないとダメなんですか？」
「可愛くなければダメだ」
「そうですか」
あとは黙々と、太一は食べることに専念した。
「十遠見さん、おかわりもらっていい？」
訊いた時には、古都子はすでに自分の皿にもう一切れのせている。
「好きにしたまえ。他の連中の分は、今焼いているから」
十遠見はエプロンの紐をきゅっと結びなおすと、また厨房に入っていった。
「ありゃ、本気らしいよ」

お露さんはケーキをフォークでつつきながら、厨房を横目で見て、真面目くさって言った。
「ケーキ屋の話さ。そのためにせっせと貯金しているんだと」
あら、と呟いて、古都子はくすくすと笑った。十遠見の将来の夢は、彼女も初耳だったようだ。
「ただの守銭奴だと思ってた」
「ま、あんだけ金に執着するのは、半分は地だろうけどね。なに、カモにされないように気をつけてさえいれば、つきあえない男じゃない」
「カモられているのは、たいていミヨシだものね」
はいおかわり、と古都子は空いた太一の皿に、チーズケーキをのせた。
「すみません」
「あんたたち、調子にのって食べすぎるんじゃないよ。このあと夕食なんだから」
「甘いものは別腹。ね、太一君」
「あ、えっと、……はい」
おいしいケーキとほうじ茶の、まったりとした午後のひととき。
外の人間たちとうまく会話ができないことよりも、ここの住人たちとこんなふうに気詰まりでなく話ができることのほうが、太一にとってはやっぱり不思議だった。
それはこの空栗荘が、祖母の初緒が言っていた「あったかい場所」だからだろうか。
逃げ込んだ太一を受け容れてくれる場所だから、だろうか。

それともここにいる人たちが……異世界や妖怪のことを当たり前みたいに語る、他の人間たちとはいつも別のものを見ているような、一風変わった人たちだからなのか。

「たまにはこうやって、お休みをもらってのんびりするのもいいかもね。うちの工房は、へタしたら休日もあってないようなものだから」

古都子はフォークを置くと、うん、と両腕をあげて伸びをした。華奢なのに、そうやるとTシャツの下のふくらみが目立つ。けっこう胸があるんだ……と、なんとなく思ってから、太一は慌てて目を逸らせた。

「昨日は徹夜だったし、ご飯を食べたら早めに寝ようかな。お露さん、今日の夕食はなに？」

「久しぶりに天ぷらでもしようかね」

「最高！」

古都子ははしゃいだ声をあげる。

「あの」

「なんだい、天ぷらは嫌いかい？」

お露さんにじろりと視線をむけられて、太一は首を振った。

「いえ、そうじゃなくて、あの」

「なに、太一君」

「……それで、大家さんは？」

お露さんと古都子は顔を見合わせた。
「そういえば起きてこないわね、柊さん」
「十遠見のケーキでもダメか」
お露さんは、ずずーっと茶をすすった。
「こうなると処置なしだ。このまま大家が寝っぱなしだと、かなり面倒なことになるね」
古都子がふっとため息をつく。
「いつまでも夕焼けのままじゃ、妖怪たちだって困るでしょうし」
太一は彼女を見た。そういえば、まだ聞いていないことがあった。
「あっちの町が夕焼けなのって、……大家さんが寝ているのが原因なんですか？」
そうだよ、とお露さんはあっさりとうなずいた。
「正確に言えば、あの夕焼けは大家が今見ている夢だ」
「夢……!?」
意味がわからず、太一はぽかんとした。
「うまく説明できないけど、柊さんってそういう不思議なところがあるのよね」と、古都子。
「あの人が眠っている時の夢が現実の世界にも影響を与えるっていうか、夢の中からはみ出して外にこぼれてきちゃうっていうか、おまけにそれが実現しちゃうっていうか」
「大家さんが眠って夢を見ると、それが現実に起こってしまうってこと？」

「そう」
そんなことがあるんだろうか？
「じゃあ、俺が初めてここへ来た時に夕焼けだったのも？」
「忘れたのかい？　あの時も昼寝している大家を叩き起こすのは一苦労だったじゃないか」
――だからあれほど昼間から寝るなと言っているのに
思い出した。あの時、赤く燃える空を睨んでお露さんが口にした言葉。
――あの人の見る夢は、時々素っ頓狂でいけねぇや
そう言ったのは、狢だった。
（大家さんの見ている夢？　……でも）
いくら空栗荘でも、それは不思議すぎる。
太一はしばらく考え込んで、口を開いた。
「それってすごく不便じゃないですか？　もし大家さんがすごく悪い夢を見たら……」
「現実にも悪いことが起こるね。どういうわけか、先に影響を受けるのは裏の町のほうだけど、表側だっていつまでも無事ってわけにはいかないだろう」
お露さんが太一の言葉を受けて、肩をすくめる。
「なにも全部の夢が実現するわけじゃないよ。それに人間が寝ている時の夢なんて、実際には見たと思ったらすぐに消えちまう、あぶくみたいに儚いシロモノさ。何が起こっても、せい

ぜい五分か十分、保(も)てばいいようなものだ。――いつもならね」

だからね、と古都子もうなずいた。

「いきなり夕焼けになっちゃうことは、これまでも時々あったわけ。ただ、太一君が来た時のは特別だったわね。二、三時間もつづいたでしょ。実はあの時も、ちょっとヘンだなって思ったの」

太一はまた考え込んだ。

大家の時国柊二郎は昨日からずっと寝てて、彼が夕焼けの夢を見ていてそれが現実になってしまったから、妖怪の町のほうがずっと夕焼けのままなのだ。――とりあえず、そういうことだと納得した。

「だけどどうして大家さんは、夕焼けの夢なんて見るんですか？」

お露さんは太一を見つめ、何かちょっと迷うような顔をしてから、ふんと鼻を鳴らした。素っ気なく、呟(つぶや)くように言った。

「さあね。好きなんだろ、夕焼けが」

お月さんいくつ　十三ななつ　まだ年ゃ若いな　ねんねを生んで誰(だれ)に抱かしょ
お万に抱かしょ　お万はどこ行った……

4

夕食後、部屋で雑誌を広げている太一(たいち)の傍(かたわ)らで、アカネが画用紙にクレヨンで絵を描(か)きながら、上機嫌で歌をうたっていた。
画用紙とクレヨンは太一が買ってやったものだ。以前に何度か学校のノートに落書きをされて困ったので、その代わりにである。
「油買いに茶買いに　油屋の縁で氷が張って　油一升(いっしょう)こぼした」
「その歌、おばあちゃん……初緒さんに教わったの？」
太一が訊くと、せっせと手を動かしながら「うんっ」とアカネは答えた。画用紙には赤や黄色や緑のクレヨンで、丸っこいものがところ狭しと描いてある。よく見たら兎(うさぎ)だった。月夜に跳ねる兎だ。
「初緒はね、アカネにいっぱい歌を教えてくれたんだよ」

「そうなんだ」
「ねえねえ、太一。『お話』したげよっか」
「お話？」
雑誌のページをめくりながら、太一はぼんやりと返事をする。
「うん。あのね。……むかしむかし、あるところに」
「おじいさんとおばあさん？」
違う、とアカネはぷっと頬をふくらませた。
「山の中の村に住む男の人と、きれいな女の人がいました。男の人は女の人のことがとても好きでした。女の人も男の人のことが好きだったので、二人はけっこんしました。かわいい娘が生まれて二人は幸せでした。でも男の人は貧乏だったので、よその山に仕事をさがしに行かなければなりませんでした。それで男の人は、女の人と生まれたばかりの娘を残して出かけていきました。おしまい」
「それでおしまい？」
「つづきは、この次したげるね」
「ふぅん。……その話も初緒さんがしてくれたの？」
ううん、と付喪の少女はおかっぱ頭を揺らした。
「柊二郎がしてくれたの。えっとね、昨日の昨日」

「へえ」
まあ、一昨日なら大家もまだ起きていたわけだが。
と、アカネは突然、クレヨンを持つ手を止めて、窓のほうに顔をむけた。
（あ、イヤな予感）
「なんか来たよ、太一」
やっぱり。
予感的中で、カーテンを閉めた窓のむこうで、何かがコツンとぶつかるような音がした。
太一は動かなかった。昨日の夜、誰が来ても簡単に窓を開けるなとお露さんに注意されたばかりだ。
コツ、コツと焦れったげにまた窓ガラスが音をたてた。
（無視だ、無視）
雑誌を持つ手に力をこめたとたん、
「ちょいと！　ヒトがせっかく訪ねて来たってのに、知らんぷりってのはどういう了見なんだい!?　さっさとここをお開けよ！」
「……うわ」
けんけんと怒鳴る声におぼえがあった。
知り合いでは仕方がない。太一はため息をつくと、雑誌を置いて立ち上がった。

カーテンを開けると、そこに女の顔があった。日本髪を結った、色っぽい美人である。太一を見て、女はそれまで顰めていた眉をあげた。

「おや、にーさんの部屋だったのかい」

「こんにちは」

太一は窓を開けた。ガラス越しに見えていた夜の色が、そのとたんに赤く染まった。空が深紅に燃えるような、ものすごい夕焼けだ。

ああ、今この部屋と賽河原町の裏の町が繋がったんだな。太一は思う。

夜の八時過ぎに見る夕焼けは、奇妙で綺麗だった。

「久しぶりじゃないか。盆の祭りで会ったっきりだったねえ」

女は赤い唇を艶に引いてニッと笑った。顔は窓のところでふらふら揺れているが、身体は一階の地面に立っている。頭と胴体の間を、細くて長い首がにょろりと繋いでいた。

ろくろっ首なので、その点は驚くにはあたらない。

バサッと翼を打つ音がして、そちらに目をやるとそばの桜の木の枝にカラスが止まっていた。

「クロ爺だ！」

窓枠にしがみついて、太一と一緒に外をのぞいたアカネが叫ぶ。

「おお、元気そうじゃな、チビっこ」

「アカネはチビっこじゃないっ」

クロ爺は嘴を振って、カッカッカとしわがれた声で笑った。さっきのコツコツというのは、その嘴で窓ガラスをつついた音だったようだ。

「それにしても、境界が曖昧になっておるのう。普段ならわしらはここの窓には近づけん。空栗荘の玄関しか通り道はないんじゃが」

お露さんも同じようなことを言っていたっけ、と思ってから、太一は訊いた。

「わざわざ二階をのぞかなくても、一階の人たちと話すほうが、もしかすると楽じゃないかと思いますけど」

「そりゃあそうさ。いくらアタシだってね、いつまでも首を伸ばしっぱなしにしているのは疲れるんだよ。……ああ、首がだるいったら」

だるいだるいとろくろっ首は鼻にかかった声で文句を言ってから、

「でも生憎なことに、にーさんの部屋しか明かりがついていなかったものだからねえ」

ミヨシとレンはまだ帰って来ていないし、古都子は本当に夕食のあとにさっさと寝てしまったらしい。十遠見は、さっき見た時は団欒室にいたので、そのまま、まだ部屋に戻っていないのだろう。

（タカハシさんは……）

そういえば、いつ見てもタカハシさんの部屋の窓には明かりがついていたためしがなかった。

「で、柊のダンナは一体、どうしちまったんだい？」

ろくろっ首はかたちのいい細い眉を、また顰めた。
「大家さんですか？」
「いい加減にしてくれないと、アタシらだって調子が狂うんだよ。朝っぱらから空が真っ赤っか、昼も夜も真っ赤っかじゃね。だいたいこれじゃ、いつ寝りゃいいんだい？　夕方に出てくる物売りが、今日は一日往来を歩き回っているもんだから、うるさいったらありゃしなかったよ。時間がわからないと、不便なことこの上ないねぇ」
「時計は見ないんですか？」
「そんなもん、いちいち見てるわけがないだろ。いつもは必要ないからね。暦くらいは見るけどさ」
妖怪の生活に、何時何分何秒はあまり関係ないようだ。
「大家さんは今寝ていて、夕焼けの夢を見ているから、妖怪の町がずっと夕焼けなんだそうです」
太一が言うと、ろくろっ首はハァとため息をついた。なぜだか力が抜けたように、一瞬その顔が窓の下に沈む。すぐに目の前にずり上がってきて、彼を睨んだ。
「ボンクラだねぇ。知ってるさ、そんなことは。だからどうしちまったのかって訊いてるんじゃないか。ぜんたい、寝るにもほどがあるだろ？」
「すみません」

時国柊二郎の夢が実体化するというのは、妖怪たちの間ではずいぶん有名なことのようだ。

「待て待て。わしが問題だと思うのはな、いくら柊二郎でも同じ夢を何時間も見つづけているのは、いささか妙だということじゃ。たとえばおまえさん、一晩中同じ夢を見ることはあるかね？」

クロ爺が口をはさんだ。

どうだろう、と太一は首を傾げる。

「ない……と思います」

夢なんてあぶくみたいにすぐ消えてしまうものだと、これもお露さんが言っていたことだ。たとえば昨日の夜に夢を見たのかどうかすら、太一は覚えていない。

「そうそう、そんなことは無理じゃよ。とすれば、一日中夕焼けだなんて土台ありえんことじゃ。そのありえんことが起こっておる。……柊二郎は目を覚ます様子はないのかね？」

「はい」

ふぅむ、とカラスは唸った。

「空栗荘の面々は何と言っておる？」

「えっと、このままだと面倒なことになるとかなんとか」

「じゃろうな」

クロ爺は黒いビーズのような目を瞬かせた。

「境界守が寝っぱなしでは役目にならん。最悪この状況が長引けば、あちらとこちらがまぜこぜになって、いらんトラブルが生じることになる。……それでなくとも、もう彼岸に入っておるというのに」

「おまけに、よりにもよって今年は秋分が満月だからねぇ。間が悪いとはこのことさ」

ろくろっ首もふらふらと首を振った。

（大家さんて、普段もよく寝てるみたいだけど）

さすがに起きている時には、ちゃんと仕事をしているんだなと、太一は妙なことで感心する。時国柊二郎は、あだ名がぬらりひょんで、眉と目尻の下がった気の抜けた顔をしていて、一日のうち起きているより寝ている時間のほうが長いという噂で、あまり姿を見かけないから影が薄いけど、やはり大切な役目を果たしている人なのだ。

異界とこちらの世界の境界を管理するという仕事が、具体的に何をするものなのかは知らないけれども。

そんなことを考えてから、太一は訊ねた。

「彼岸で秋分で満月だと、どうかするんですか？」

自分には関係ないと思ったけど、何度も同じ言葉を耳にすると気になってしまう。昨夜のタカハシさんやお露さん、それにこの妖怪たちの口ぶりからして、なんだかまずいことのようだ。

クロ爺は肩をそびやかすように、黒い翼を広げて見せた。

「彼岸には祖先の墓参りをするじゃろ？　要するに彼岸の間は、生きた人間が死者を偲ぶから、盆とは別の意味でこの世があの世と近くなるんじゃ」

そうなのか、と太一はうなずく。人間が普通に何気なく暮らしている世界と、死者のいる場所や妖怪たちの棲む世界は、実は隣あわせのように近い。空栗荘に来てからというもの、何かにつけそれを思い知らされている太一だ。

「かてて加えて、その中日である秋分に月が満ちる。月の光というのは怖いものでの、特に満月の光はそれを浴びるものの心を狂わせるんじゃよ。――月に縁のある妖怪や魔性がいつもよりも力をもって、どんな悪さをしでかすかしれん。まあ、境界さえしっかりしていれば、たいしたことは起こらんはずじゃが」

「月に縁があるっていうと……、もしかして狼男とか!?」

「いやいや。中秋の満月に縁があるといえば、まずは兎じゃな」

それはあまり怖くないんじゃないかと、太一は思った。

「太一、オオカミオトコって何？」

アカネが彼を見上げる。

「満月になると狼に変身する男の人。というか、外国の妖怪」

「賽河原町にいる？」

おらんよ、とクロ爺が真面目くさって言った。

「まあこの時代じゃ、パスポートがあれば観光で来ることはあるかもしれんが」
だったらミイラ男や吸血鬼も、そのうち来るかもしれない。日本語は通じないだろうが。
「そんなことはどうでもいいさ」
しびれをきらしたように、ろくろっ首はずいっと顔を太一に近づけた。白粉の匂いがふわりと鼻をくすぐる。
「早いとこ、柊のダンナを叩き起こすかどうかしておくれな。まさか明日も明後日も、こんな調子じゃないだろうね⁉」
「えっと、それは俺、よくわかりません」
なんだか叱られているような気分になったので、太一は正直に答えた。多分この空栗荘にいる人間で、今一番事情が飲み込めていないのは自分だろうな、と思う。
（……でも、すごく綺麗だけど）
見上げると、赤い宝石のような色の空に、金と紫の雲が流れてゆくのが見える。妖怪の町の夕焼けの風景が、太一はとても好きだった。
とはいっても、朝昼晩がずっと夕暮れでは、やっぱり不便なこともたくさんあるに違いない。古都子も仕事にならないと言っていたし。
ぼうっと空を眺めていると、
ごつんっ。

「……いたた」
ろくろっ首に軽く頭突きをくらった。
「とにかく、アタシらが困っていることは伝えたよ。それにちょいとばかりダンナの身を案じてもいるんだ。眠ったきり目を覚まさないなんて、普通じゃないからね」
ふむ、とクロ爺が唸る。
「もしもこのまま柊二郎が目を覚まさんようなら」
思わせぶりにいったん言葉を切ってから、
「――呪いのセンも考えたほうがよいぞ」
「呪い？」
聞いたことはあるけど実感のない、おどろおどろしい言葉に、太一は目を丸くした。
人語をしゃべるカラスは、厳かにうなずいた。
「おまえさんはまだわからんだろうがな。境界守を恨んだり邪魔に思っている輩も、この世にはいるということじゃよ。そういう連中に柊二郎が呪われるということも、なきにしもあらず、じゃのう」
クロ爺とろくろっ首を見送って、太一は窓を閉めた。
そのとたん、部屋に射し込んでいた夕焼けの赤い光が消えて、ガラスの向こう側は真っ黒な

夜に戻った。昨夜のような空っぽの闇ではない。ぽつぽつと家々の明かりの灯る、人間の町の夜の風景だ。

カーテンも閉めようとしたが、アカネがまだ窓ガラスにはりついたまま、しげしげと外を眺めているものだから、しばらく放っておくことにした。

(クロ爺たちが来たことを、他の人にも言ったほうがいいのかな)

読みかけの雑誌を畳から拾い上げて、太一は首を傾げた。

ひょっとしたら、とても大事なことを聞いたのかもしれない。呪いがどうとか。

(それはつまり、誰かがわざわざ大家さんを眠らせて、目が覚めないようにしたってことなのかな)

小さい頃に本で読んだ、魔女の呪いで眠ってしまったお姫様の話みたいだと思う。

(あれって確か、王子がキスしたら目が覚めたんだっけ……)

相手が美しいお姫様でなく、大の大人で男の大家である場合はどうすればいいんだろうと思っていると、アカネがあっと声をあげた。

「ミヨシとレンが帰ってきた！」

ぴょんぴょんと身体を弾ませながら、太一を振り返る。

「あのね、それとね、知らない人もいるよ！」

「知らない人？」

「ここに住んでる人じゃない人。女の子。あのね、さっきからずっと門のところでうろうろしてたの」

なんで窓から離れないのかと思ったら、その人のことを見ていたらしい。

「女の子って……」

まさかまた妖怪や幽霊じゃないだろうなと思いながら、太一も窓の外をのぞく。

最初は暗くてよくわからなかったが、目をこらしているうちに、門のあたりにいる人影が見えた。

人影はみっつ。立ち話でもしているみたいだ。ふたつはよく知っている人たち。みっつめの人影は――。

「あれ？」

みっつめも、よく知っている相手だ。

（……和泉（いずみ）？）

空栗荘の門のところでミヨシたちと話をしているのは、和泉采奈（さいな）だった。

――その少し前。

「あー、ぞわぞわする。かなわんな」

すっかり暗くなった帰り道。あのクソ大家、と小声で毒づきながら歩いているミヨシは、ど

こからどう見ても「触るな危険」人物である。長身のうえに、胡散臭いほど目つきが鋭い。もともとそういう顔だとはいえ、今は不機嫌さも加わって、通りすがりの猫が脱兎のごとく逃げていったほど剣呑な空気を漂わせている。

その彼を、ほんわりとした声が後ろから呼んだ。

「ミヨシさん」

「なんや、レンか。今バイトの帰りか？」

「ええ」

足を止めて振り返ったミヨシに追いついたのは、風田レンだ。こちらは対照的に、小柄で優しげな印象の青年である。

「ずいぶん遅いな」

「新しい肥料に変えたら、鉢植えの花の幾つかにはあわなかったらしくて」

「枯れたんか？」

「いえ、すごい勢いで花にクレームをつけられました。それで植え替えるのに時間がかかってしまったんです」

ミヨシと並んで歩きながら、レンはおっとりと笑った。

「そら大変やな」

「幽霊にクレームをつけられるミヨシさんや十遠見さんほどじゃありません。ミヨシさんこそ、

こんな時間まで仕事ですか？」
「見回りや」
ミヨシは肩をそびやかせた。
「大家がまだ目ぇ覚まさんて知っとったか？　……おかげであっちは朝から夕焼けのままらしいわ。こっちはこっちで結界が緩みっぱなしやから、そこらじゅうで空気がぞわぞわしとる。俺には大家の真似はでけへんから、せめて悪いもんが入り込んでないかどうか、いちいちチェックして回らなあかん」
お露さんの言いつけでな、とつけ加えた。
「大家さん、また夕焼けの夢を見ているんですか？」
「らしいな」
「僕も見たことはあるけど、あの人の夢は綺麗ですね」
レンは表情を曇らせた。
「でも僕は、ちょっと苦手だな。……あの夕焼けは、なんだかキリキリと痛いくらい寂しいんです」
ミヨシは横目で彼を見た。少し黙ってから、ぶっきらぼうに言った。
「あたりまえや。夕焼けの時間帯は、一番腹の減る頃やし。空腹やと人間は寂しいなる」
レンは笑った。ミヨシの言葉に逆らわず、そうですねとうなずいた。

「ほら、急ぐで。はよせんと夕飯食いっぱぐれる。お露さんは、時間厳守やからな」
「はい」
しかし、空栗荘が見えてきたところで、二人は足を止めた。
門の前をうろうろしている人影があった。行ったり来たり、空栗荘に用事があるらしく時おり足を止めて門から中をのぞき込んだりするのだが、どうしても入る勇気がないといった様子である。
「誰だろう、あの子」とレン。
「女の子やな。何しとるんや」
首を傾げてから、ミヨシは「あ」と呟いた。
「あれ、もしかして――」
「知り合いですか？」
「前に一度会うた。太一の同級生」
言うなり、ミヨシは足を速めた。
相手は近づいて来た二人には気づいていない。門の前に佇んで、思いつめたような顔でぶつぶつと独り言を言っている。
「ばかばかばか、タケルのばかっ、どうしてどうして、よりによってこんな日にここに来なきゃいけないなんてっ、もう、ばかあ！」

「おい」
ミヨシが声をかけると、こちらを向いていた背中がびしっと硬直した。
「何やっとんねん」
「きゃあぁっ⁉」
おそるおそる振り返り、ミヨシを見て采奈は悲鳴をあげた。
「なんで毎回、俺の顔見て悲鳴をあげるんやろ」
「あ、す、すみませんっ、環境省の調査員さん！」
「環境省……？」
レンが不思議そうに呟く。
ミヨシは露骨に顔をしかめると、口の中でぼそっと、
「……しもた。人魂を捕まえる時の言い訳を、まだ信じとったんか」
「え？」
「あー、それはな、あの場のデマカ……やのうて、ええと、とにかく俺のことはミヨシでええから」
「は、はい。こんばんは、ミヨシさん。……と」
「こいつは風田レン。ここの下宿人や」
「どうも、和泉采奈といいます」

采奈はぺこりとお辞儀をして、
「それではさようなら」
「……って、ちょっと待てこら。あんた、ここに用事があるんやろ？」
いきなり回れ右して逃げるように立ち去ろうとした采奈を、ミヨシが引き留めた。
「もしかして、太一に会いに来たんとちゃうんか？」
そのとたん、采奈の顔が夜目にもかあっと赤くなった。わたわたと手を振り回して、
「ち、ち、違います！　私、阿川君に会いに来たとかじゃなくてっ、そうじゃなくて、あのっ……!!」
「なら何や」
「あ、あの、私、私はっ、……こう見えてただの通りすがりですっ」
「全然通りすがってへんやんかっ」
ねえ、とためらいがちにレンが割り込んだ。どこか痛むように、軽く顔をしかめている。
「何か心配なことがあるんでしょう？」
「え……」
質問というより、それがわかっていて、確認するような口調だ。采奈は驚いて彼を見た。
「不安で心細くて、すごく困っているんじゃない？　それで、ここへ来たんだよね？」
采奈はきょとんと目を丸くしていたが、やがてぎゅっと口元を結んだ。

うなずく。
「ええから、用件言うてみい」
素っ気なくミヨシが促した。
栄奈は泣きそうに目を瞬かせてから、またうなずいて、
「おばあちゃん……うちの祖母に言われて来たんです。空栗荘の時国さんて人にお願いがあって……その人なら、きっと助けてくれるはずだからって……」
「大家にかぁ？」
空栗荘の住人二人は、顔を見合わせた。

5

太一が部屋を出て階段を下りる途中で、玄関の戸が勢いよく開いた。
「お露さん、今帰ったー！　ちょっと来てくれやー！」
靴も脱がずに、ミヨシがわめく。彼につづいてレンと、そのあとから栄奈がしょんぼりした様子で入ってきた。
「……和泉？」

階段から声をかけた太一と目があったとたん、栄奈は「あうっ」と妙な声をあげた。
「阿川君……」
「どうしたの？」
「あああ、やっぱり来たくなかったっ、タケルのばかっ、ばかっ、ばかっ！」
「は？」
太一としてはもちろん、彼女がどうしてここにいるのかを訊ねるつもりだった。でも、なぜだか今にも背中をむけて走り出しそうな栄奈を見て、黙り込んでしまう。学校で、声をかけたら逃げられたのを思い出して、ため息が出た。
（まだやっぱり怒ってるのかな）
同級生のたった一人と話をする、それだけのことが、どうしてこんなにうまくいかないのだろう。
「うるさいね。何だい？」
ミヨシの声を聞いて、食堂からお露さんが出てきた。
「この子、太一の同級生や。大家に用があるんやて」
太一の視線から隠れるように後ろのほうでもぞもぞしている栄奈を、ミヨシは肩を摑んで前に押し出した。
「ふん？」

お露さんは彼女を見て、次に階段の途中で突っ立ったままの太一を見た。そうしてまた栄奈に視線を戻すと、
「大家に何の用かねえ」
「あ、あの」
玄関の三和土の上で、栄奈は意を決したようにお露さんを見上げた。
「お願いします！　タケルを……弟を助けてください！」
これにはさすがに面食らったようで、お露さんは目をむいた。
「弟？　あんたの弟がどうかしたのかい？」
「いなくなっちゃったんです。今日、学校から帰って遊びに行ったっきり、戻ってこなくて……近所の人も一緒に探してくれているんですけど、全然見つからないんです！」
「そりゃ大変だ。でもあんた、それならここへ来るより先に、警察へ行ったほうがいいんじゃないのかね」
「だけど、うちのおばあちゃんが、警察じゃダメだって。きっと信じてもらえないから。こういうことは、空栗荘の時国さんにお願いしないとダメだって言うんです」
「ふん。どういうことだい、そりゃあ」
お露さんは、ちょっと考え込むようにしてから訊いた。
「タケルは攫われたんです！」

「誰に」
「薄売りに！」
拳を握って叫んでから、「た、多分」と采奈は急に自信なげにつけ加えた。
しん、と何ともいえない沈黙が場に広がった。
（……薄売りに攫われた？）
太一は呆気にとられた。
（どうして薄売りが人を攫うんだろう？）
縁起のいい薄を売って回っている商売だとばかり、思っていたのに。
采奈の弟のことは、太一も一度見かけている。盆の祭りの時に、祖母だという年配の女性と一緒に采奈を迎えに来た。小学生くらいの男の子。タケルという名前は今日初めて知った。
「ふーむ、なるほどね。そういうことかい」
采奈をしげしげと見て、やがてお露さんはうなずいた。
「レン、悪いけど十遠見を呼んできておくれ。団欒室にいるはずだから。古都子は……ああ、もう寝ちまってるか」
「大丈夫。起きてる」
一階の廊下から、古都子がひょいと顔を出した。まるで、ずっとそこにいたとでもいうようなタイミングだ。

「ミヨシが大声を出すから、目が覚めちゃった。ついでに話も聞こえてたわよ」
「だったらあんたも来な。――それと太一、あんたもだ」
「俺も……？」
太一は階段の手すりを摑んで、思わず訊き返した。
「当然だろう。あんたの同級生のことなんだからさ」
「……はい」
お露さんはもう一度、采奈とむきあった。
「ここで立ち話もなんだ。中で、もうちょっと詳しいことを聞かせとくれ」
「わ、わかりました！」
「なあ、お露さん。――ええんか？」
靴を脱いでいる采奈に聞こえないよう、ミヨシがお露さんにボソっと耳打ちした。
「大家は無理やろ」
「じゃああんた、あの子にそう言って追い返せるかい？」
「う、殺生やな」
お露さんは彼をじろりと見た。
「これは確かに境界守の仕事さね。大家がいつにもまして役に立たない状態なんだから、ここはあんたたちで何とかしな。なに、子供を探しだせばいいだけのことだ。枯れ木も山の賑わい、

下手な鉄砲も数打ちゃ当たるの心意気で、頑張るこったね」

「……ビミョーな心意気やなぁ」

というわけで、空栗荘の住人たち——タカハシさん以外——は、食堂で栄奈の話を聞くことになった。

「あんたの弟は幾つだい？」

「九歳です。小学校の三年生」

お露さんがテーブルに湯呑みを置くと、栄奈はどうも、と小声で礼を言った。緊張して、小さくなっている。ほとんど初対面の顔ぶれに取り囲まれているのでは、無理もない。

「まあ、連れていくにはちょうどいい年齢かねえ」

「薄売りが子供を攫うて、ほんまにありなんか？」

ミヨシが訊ねると、「ありだよ」とお露さんはあっさり言った。

「昔は、薄売りが出てくる時期にはよく子供がいなくなったものさ」

え、と声をあげたのは栄奈だ。

「ウソ……じゃあ、あの話、本当だったんだ……」

「なんだね。あんた、信じてないのにここへ来たのかい」

「ご、ごめんなさいっ。だって、おばあちゃんが空栗荘の時国さんならきっとタケルを見つけ

てくれるって言うから……あの、全然信じてないわけじゃなくて、でもよく考えたらそんなこと現実にあるわけないよねって気も、するようなしないような……」

お露さんはふんと鼻を鳴らした。あたふたしている栄奈を見て、やれやれと呟く。

「仕方がないかね。今となっちゃほとんどの人間は、迷信としか思っていないだろうから」

「あの話って？」と古都子。

「ああ、この近辺じゃ昔から言われていることだ。薄売りを見かけても、あとをついて行っちゃいけないってね。特に子供は、絶対に薄売りに声をかけちゃいけない。そのままどこかに連れて行かれて、二度と家に戻れなくなるから。――賽河原町の人間は、小さい頃から大人たちにそう言い聞かされているはずだよ」

「そうなんだ？　そういえばこの町って、他のところじゃ聞かないような言い伝えがたくさんあるわよね」

古都子はテーブルに頬杖をついて、感心したように言った。

「言い伝えというのは、いわゆる先人たちの教訓だ。災厄から逃れるための知恵でもある。――昔の人間はここがどういう土地であるかをちゃんと知っていたんだろう。そのての言い伝えが多いのは、当然だともいえるな」

と言ったのは、十遠見である。食堂に来てすぐに厨房に引っ込んだと思ったら、出てきた時には例のお手製ケーキをのせた皿を持っていた。

「どうぞ」
気障な仕草で、栄奈の前に置く。
「あ、ありがとうございます……」
「ふふっ、私のつくった『究極で至高のチーズケーキ』だ。これを食べて、気を落ち着けるといい」
十遠見なりの気遣いなのか、それとも自慢したいだけなのか。
「うお、ケーキ！　俺にもくれ、十遠見！　俺、夕飯まだ食ってへんねん！」
「五百円」
十遠見が出した手を、ミヨシは勢いよくはたき落とした。
「アホ、どうせおまえのことや、とっくに元とっとるやろ！　おまけに五百円て、どんだけ高級品やねん、このケーキ！」
「私のケーキにはそれだけの価値がある」
「ああもう、うるさいね！」
静かにしな、子供じゃあるまいしと、お露さんの雷が落ちる。
「お露さん、俺の飯！」
「今はそれどころじゃないだろ。心配しなくても、オーダーストップの時間は延長してやるから、少しくらい我慢しな」

「げっ」
「十遠見さん、僕もそのケーキ、いただいていいですか？」
クスクス笑いながら、レンが言った。
「厨房にあるから勝手にしろ。男にサービスする気はない」
「はい。――ミヨシさんの分も持ってきますね」
「あ、レン。私にも！」
「おまえはもう食ったんやろ、古都子」
「だって、一眠りしたら小腹が空いたんだもの」
いきなり騒がしくなった場で、采奈はケーキを前に困ったようにもじもじしている。気がついて、太一は思い切って声をかけた。
「食べれば？」
「い、いいのかな、こんな時に」
「いいんじゃない。おいしいよ、それ」
「……うん」
采奈はうなずくと、フォークをとってチーズケーキを口に運んだ。ほんとだ、おいしい、と目を丸くする。
会話ができたので、太一はなんとなくホッとした。

「ところで、あんたの弟が薄売りに攫われたってことは、どうやってわかったんだい？」

お露さんが話を戻した。

「タケルが晩ご飯の時間になっても帰らないから、いつも一緒に遊んでいる子たちのところに母が電話をしたんです。うちの子を知らないかって。そしたら――」

その日、采奈の弟が友達と公園で遊んでいると、近くの家から薄売りが出てくるのが見えた。何人かが「あとをついて行ってみよう」と言いだしたが、タケルはイヤがったらしい。それでみんなに弱虫だとからかわれて、ケンカになった。あげくに、怒ったタケルは自分は弱虫じゃないと言い張って、一人で薄売りを追っかけて行ってしまったというのだ。

「遊んでいた子たちはしばらく公園で待っていたけど、タケルが全然戻らないから、怒って家に帰ったんだろうと思ったらしいです」

「で、そのあとは誰もあんたの弟の姿を見ていないんだね？」

采奈はうなずく。

「そりゃ確かに、警察に言っても仕方がないね。おばあさんがあんたをここによこしたのは、正解だよ」

「あの大家、賽河原町ではそんなに有名なんか？　つまり……あっち方面に関わっとるて意味で」

レンから受け取ったケーキをぺろりと丸呑みする勢いで口に放り込みながら、ミヨシが訊い

た。曖昧な言い方をするのは、采奈の前で「境界守」という言葉を出すのをためらったからだろう。

「そういうわけじゃないよ。そんなこと、有名だったら困るだろ。――ただ、不思議なことがあったら空栗荘の主人に相談しろっていう決まりごとみたいなものは、昔からいつの間にかあったみたいだねえ」

「じゃあ、薄売りが犯人ていうことで、きまり？」

古都子がフォークの先を踊らせるようにして言う。

「違うなら、それこそ警察か他の人間たちにまかせるしかないさ。……さて、と。事情もわかったことだし、急いだほうがよさそうだ」

腰をあげようとしたお露さんに、あの、と采奈が慌てたように言った。

「それで、……時国さんは？」

肝心の時国柊二郎がここにいないのでは、当然の質問である。

お露さんは肩をすくめた。

「ちょっと事情があってね、大家は今、役に立たないんだ」

「え、いないんですか⁉」

いや、いることはいるんだけどね、と全員がその時、胸の中でもにょもにょと呟いた。まさか高いびきで寝ています、とは言えない。

「なに、大家ぬきでも何とかなるさ。ここにいる連中だって、それなりに役に立つだろうよ。――あんたの連絡先を教えとくれ。家の電話でも携帯電話でも何でもいいから。それで、あんたはもうお帰り。そっちはそっちで、たいへんだろう」

「でも……」

「もう遅いからね。太一、家まで送っておやり」

「……え」

「え」

太一と栄奈は、思わず顔を見合わせた。

「さあ、あんたたち」

お露さんは、他の空栗荘の面々をテーブルから離れたところに呼び寄せると、てきぱきと指示を出した。

「十遠見とミヨシは、表側を探しな。妖気を追いかけるのはあんたらの十八番だろう。古都子、あんたは裏側だ。一番、あっちに慣れているからね」

「了解」と、古都子。

「レン、あんたは長老のところへ行って、子供を連れた薄売りがどこかにいなかったかどうか、訊いておくれ」

長老というのは、近くの神社にあるこの町で一番古い巨木のことだ。

わかりました、とレンはうなずいた。
「結局、メシぬきかい」
ミヨシがぼやく。
「うるさいね。握り飯をこさえてやるから、途中で食べな。戻ったら食事を出してやるよ」
お露さんは、いいかい、と住人たちを見回した。
「時間が経つと子供を取り返すのは難しくなる。薄売りは危険な連中じゃないが、攫われた子供は自分が生きていた世界のことをすっかり忘れちまうって話だ。家族のことも家のことも、何もかも一切合切ね。そうなったらもう、こっちに戻っては来られない」
記憶をなくした子供は、家に帰ることを忘れて、そのままあちらの世界の住人になってしまう。だから、そうなる前に連れ戻すんだよ。
采奈に聞こえないよう、小声で念を押すように、お露さんは言った。

6

何かしゃべらなきゃ、と思った。
空栗荘を出て、采奈と肩を並べて歩きながら、太一はずっと言葉を探して黙り込んでいる。

栄奈も黙ったままだ。いつもはあんなにおしゃべりなのに。

彼女を家まで送って行けと言われれば、こんな時間に女の子を一人で帰すのは危ないから、当然のことだと太一も思う。あのまま空栗荘に残っていても、ミヨシたちと違って彼にできることは何もないのだし。

でも、ものすごく気まずい。学校での栄奈との一件から、この気まずさはずっとつづいている。

見上げると、暗い空に月が浮かんでいた。ほとんど満月に近い、象牙色の月だ。あたりはしんとして人通りもなく、虫の声がリンリンとどこからかかすかに聞こえてくる。

（お月さんいくつ、十三ななつ）

さっきアカネが口ずさんでいた歌が、頭の中でぐるぐるとエンドレスに回っている。十三ななつって、どういう意味だろう。

「小説……」

ようやく話題を思いついて、太一は口を開いた。

「え？」

「書いてるって言ったろ。……書けた？」

「あ、あれね。一応書いたんだけど、全然ダメだった。新人賞に送ったけど、一次も通らなくて」

「そっか。……残念だったな」
「うーん、仕方ないよ。自分でも書いてて、途中からぐちゃぐちゃだったから。でも、次は頑張る。今、ネタを探してるところ」
「そう」
で、話が終わってしまった。
采奈は今、弟のことが心配でたまらないはずだから、何か元気づけるようなことを言って励ましてやるべきだと思う。シンプルに「元気だせよ」とか、「大丈夫」とか「きっとすぐに見つかるよ」とか、そんな類のことを。何でもないことのように、軽く。
それなのに、言葉は鉛のように重くて、口に出そうとしても喉にひっかかって出てこない。
太一は思わず、はあっとため息をついた。同時に采奈も、はあっと息を吐いた。
「……あの、さ。昼間のことだけど」
こうなったら思い切って、気になっていることを訊いてみることにした。今なら、采奈も逃げ出したりしないだろうから。
案の定、采奈は逃げはしなかったが、ぎくっとしたように肩を強張らせた。
「え、な、なな何？」
「俺、何か悪いこと言った？　なんか怒らせたみたいだけど」
「ええ!?　ち、違うよ。全然、怒ってるとかじゃなくて、阿川君は悪くなくて、悪いっていっ

たらむしろ私のほうで……」
采奈はいっぺんにうろたえた顔になった。
「玉砕覚悟(ぎょくさいかくご)だったのに、それ以前の問題だったから……ちょっと、自分のマヌケさにへこんだっていうか……」
「……」
(玉砕覚悟って)
何がだろう?
「私のほうこそ、ヘンなことを言ってごめんなさい」
何がヘンなことなのかもわからないから、どう反応していいのか、太一は困った。
そうして、二人してまた黙って歩きつづける。
気まずさは、そのままだった。

ひた、ひた、ひた。
その小さな音に気がついたのは、どっちが先だったか。
「ねえ、阿川君……」
采奈が何度か振り返ったあとに、心細げな声を出した。
「なんかさっきから、後ろに誰かいるような気がするんだけど……」

「うん」
太一は背後をちらちらと見た。町中の、何の変哲もない路。両脇に家の塀。月明かりがアスファルトを照らしている。
そこに人影はない。
（こういう場合、相手が人間と人間じゃないのと、どっちがヤバいんだろう？）
どちらもヤバいかもしれない。
「和泉、急ごう」
「う、うん」
采奈に前を歩かせるために、太一は二、三歩さがった。
背中がぴりぴりする。
突然、背後からの物音がぱたぱたぱた、と近づいてきた。軽い足音だ。
ぎょっとして太一は振り返った。――とたん。
「わーい、太一！」
ぼすっとアカネの小さな身体が、全身でぶつかってきた。両腕で、ぎゅうっと太一の胴を抱きしめる。
「ア、アカネ⁉」
「どこ行くの？　アカネも行く！」

物音の正体がわかって、背中に張りつめていたものがいっぺんに緩んだ。はあ、と今度は力の抜けたため息が、太一の口から漏れた。

「ついてきたの？」

「うんっ」

そういえば栄奈が来た時、アカネを部屋においてきたままだった。機嫌よく絵を描いて遊んでいるから、放っておいてもそのうち一人でガラスケースに帰るだろうと思ったのだ。

この付喪の少女は、姿をあらわすのも消えるのも、いつだっていきなりだ。これまでも太一が部屋をちょっと出て戻ったら、遊んでいたはずのアカネがもういなかったということが、何度かあった。

（だけどまさか、こんなところまでついて来るなんて）

「お露さんにちゃんと言ってきたか？」

ううん、とアカネはおかっぱの頭を振った。

「行っちゃダメだって言うもん」

やっぱり、こっそりと抜け出してきたらしい。

（どうしよう）

困った、と太一は思う。アカネをこのまま一緒に連れて行こうか、どうしようか。——でも一人で帰れと言ってもきかないだろうし、アカネを連れて空栗荘に引き返すくらいなら先に栄

奈の家に行ったほうが早い気もする。
「阿川君、えっとぉ、……その子は？」
振り返ると、采奈が目を丸くしてアカネを見ていた。
「アカネ。……空栗荘に住んでいる子で……」
玄関のガラスケースの中にいる市松人形、とは言えない。
「そっかあ、アカネちゃんていうんだ。可愛い。何歳？」
采奈はアカネの前に立つと、子供の目線にあわせるように、ちょっと膝を屈めた。アカネは目をぱちくりさせて彼女を見たが、すぐにふるふると首を振った。
自分の年が幾つか、きっとアカネは考えたこともないだろう。もとは太一の祖母の人形なのだから、ヘタしたら高校生の太一よりも何十年も年上だ。
「おねえさん、誰？」
「私は、和泉采奈っていうんだ。阿川君と同じ学校に行っているの」
「さいな？　さいなも遊ぶ？」
「ダメだよ。和泉は家に帰るんだから」
太一は慌てて言った。
「家に帰るの、どうして？」
「どうしても。だからおとなしくしていないと、連れて行かないよ」

栄奈がクスっと笑った。
「阿川君、なんかおにーちゃんぽい」
「え、そうかな」
あれ、と太一は思った。
アカネがいるせいだろうか。栄奈と普通にしゃべれるようになった。
「さいな、遊ぼ！」
今言われたばかりだというのに、アカネは栄奈の手を摑んでぐいぐいと引っ張っていった。
新しい遊び相手が見つかったのが嬉しくてたまらないらしい。
「影踏みしよう！」
「こら、ダメだって言っただろ」
「太一はおとなしくしろって言ったけど、さいなは言ってないもん！」
子供の理屈ってよくわからない。
「いいよ、影踏みしよ。――そら、影踏んだ！」
きゃあと笑い声をあげて、アカネが逃げ出す。栄奈があとを追いかけた。
（まあ、いいか）
影を踏んだり踏まれたりしながら前を走っていく二人を眺めて、太一は思った。
家へ帰るまでの間、短い時間でもこうしていれば、栄奈の心配も不安も少し紛れるだろうか



ら。

しらしらと月明かりが地上に降って、太一の足下にもくっきりと黒い影が落ちていた。

（月の光でも、影ってできるんだな）

知らなかった。月がそんなに明るいものだなんて。

ふうっと夜の空気に水の匂いが混じった。気がつくと川まで来ている。夏にミヨシと一緒に蛍に化けた人魂を捕った、采奈と一緒に悪霊流しの灯火を見た、川だ。

その上にかかった橋を渡りながら、何気なく河原を見下ろして、太一はあっと声をあげた。

街灯の明かりの届かない水面は、墨のように真っ黒だ。なのにその両側の川辺は仄かに淡く、銀色に光っている。

丈の高い薄が波打つように揺れていた。月の光を浴びて、穂先が銀の色に輝いている。夏がいまだ去りきらないこの時期、他の場所に生えている薄は熟しきらずにまだ青い葉をつけているというのに、この川のほとりに群れている薄の穂はもうふわふわと膨らんでいた。

その雲のような銀の中に動く、人影があった。

えい、と采奈の影を踏んづけてから、アカネはあたりを見回した。

「あれえ、太一がいない」

「ほんとだ、おいてきちゃったのかな」

影踏みに夢中になって、二人だけで先に来てしまったようだ。慌てて来た道を引き返すと、
「あ、いた！」
アカネが指さした先に、橋の欄干から乗り出すように河原を見下ろしている太一の姿があった。
「阿川君、何してるんだろ？」
采奈は首を傾げる。
「ねえねえ、さいな」
傍らで、アカネが彼女を見上げた。
「さいなは太一のこと、好き？」
「ええっ⁉」
橋にむかって歩き出していた采奈は、思わずコケそうになって足を止めた。
「な、なに、ちょっと、何をいきなり……っ」
「さいなは、太一のことすごく好き？」
おかっぱの頭を傾けて、大きな目でアカネはじっと采奈を見つめている。真剣な顔だ。
采奈は顔を赤くすると、あわあわとうろたえて手を振った。
「あ、あのそれはっ、そのっ、なんていうかっ」
「ねえ、さいなってば。太一のこと、すごくすごく好き？」

う、と采奈は口ごもる。
それから大きく息を吸って、吐いて。うなずいた。
「……す、好き」
「そっかぁ」
アカネは嬉しそうに笑った。そうしていきなり、ぴょんと跳ねるように駆けだした。
「太一！　あのねー！　さいなが太一のこと、好きだって――!!」
「きゃあぁぁ！」
采奈は悲鳴をあげた。
「太一、太一！　さいなはね、太一のこと、好きだって！」
「ちょっとダメ！　言っちゃダメ――っ」
「……え？」
太一は橋の欄干から身体を離すと、騒がしく走ってくる二人を見た。
「あのね、太一……ふぐぐっ」
転がるように彼の前に駆け寄ったアカネを、追いかけてきた采奈が、後ろから抱きかかえて口をふさいだ。
「だめーっ、なしなし、今のなし――！」
「和泉？」

「なんでもない、なーんでもないから！　そ、それより阿川君、こんなとこで何をぼーっとしてたの⁉」
「あ、うん。ほら、あそこに……」
太一は戸惑いながらも、河原を指さした。
「あっ」
そのとたん、采奈の腕の中でじたばたしていたアカネが、叫んだ。するりと采奈の手から抜け出すと、背伸びして橋の欄干にかじりついた。
「薄売りだぁ」
河原の薄の中に、白い装束の男がいた。鎌を片手に、黙々と銀色の薄を刈っている。色紙を細く切って垂らした笠。背中に背負ったカゴ。それは確かに、太一が昼間に空栗荘で鉢合わせした、薄売りの姿に間違いない。
だが。
「ええ……？」
「アカネ、知ってるの⁉」
太一と采奈は驚いて、アカネを見た。
うん、とアカネは得意げにうなずいた。
「初緒が教えてくれたよ。薄売りのこと、いっぱい」

「じゃ、薄売りが子供を攫うことも知ってる？」
「うん」
「あのさ、だったら――」
太一は思わず、身を乗り出した。
「連れて行かれた子供がどこにいるか、知ってるか？　初緒さんから聞いてない？」
「んーとね。初緒は言ってなかった。でもアカネは知ってるの」
「え、どこ⁉」
アカネは欄干から手を放して振り返ると、胸を張って言った。
「それはね、薄売りに訊けばいいと思う」
「……あ、そう」
太一はがっくりと肩を落とした。
（そりゃ、本人なら知ってるだろうけど）
そんなこと、訊いて教えてくれるものだろうか。
「よぉし！」
太一の傍らで、采奈がいきなり、気合いを入れるように拳を握った。
「私、あの人に訊いてくる。弟がどこにいるのか」
「ええ、和泉、本気？」

「もちろん本気！」
アカネはきょとんとして彼女を見た。
「おとうと？」
「うん。タケルっていうの。薄売りに攫われちゃったの。だから私が連れ戻さなきゃ！」
目を瞬かせると、アカネは今度は太一を見上げた。
「さいなのおとうと、いなくなったの？　薄売りが連れて行っちゃったの？」
「うん」
太一がうなずくと、アカネは「そっか」と言って、ぴょんと跳ねた。ワンピースの裾がひらりと揺れる。
「あのね、アカネ、いいこと思いついたよ。ちょっと待っててね」
「あ、おい、アカネ？」
止める暇もなく、付喪の少女はタタタ、と駆けだした。橋の横手に回って、土手に設置された鉄柵をすり抜けた。——すり抜けたとしか、言いようがない。大人の腰の高さほどの柵に手をかけたと思ったら、瞬きひとつのうちに、アカネの姿はもう河原にあったのだ。
太一と栄奈が橋の上から呆気にとられて見ていると、アカネはためらいもせずに薄売りにむかって走っていった。
鎌をふるっていた薄売りの手が、止まった。屈めていた身体を起こし、駆け寄ってきた少女

と向きあった。

「……な、何してるのかな」

采奈が首をひねる。うん、と太一もおぼつかなくうなずいた。

「いいことって言ってたけど……まさか自分で訊きにいったとか……？」

どうやらアカネは、身振り手振りもまじえて薄売りに何か話しかけているらしい。

薄売りのほうは、しばらく身じろぎもせずにそこに立っていたが、やがて鎌を持っていないほうの手をゆるゆるとアカネにむかって差し伸ばした。

アカネがその手を摑む。そうして手を繋いだまま、薄売りとアカネは歩き出した。川の上流にむかって。

「阿川君、……あのう、あれって」

「うわあ。当たり前みたいに攫われてるし」

銀色の河原を薄売りと一緒に歩きながら、アカネは首をねじってこちらを振り返った。ニッと笑うと、繋いでないほうの手で「おいでおいで」をした。

ついて来い、ということらしい。

（あ、そうか）

太一は理解した。

「行こう、和泉。——アカネを追いかけていけば、薄売りが子供をどこに連れて行くかわか

るはずだ」
「う、うん」
太一は急いで橋を渡ると、鉄柵を乗り越えて河原に飛び降りた。
とたんに水の匂いが強くなる。さらさらと薄の穂先が揺れて、太一の視界に銀色の光をふりまいた。
橋の上から見た時よりずっと、川のほとりは明るい。逆に、遊歩道をはさんで家々の並ぶ土手の上の風景は、奇妙にぼやけて闇に沈み込んだ。
振り返ると、後からきていた采奈が、ちょうど柵を乗り越えて河原に降りようとしているところだった。
「和泉、大丈夫？」
「うん、だいじょ……きゃあ⁉」
着地した瞬間、采奈は足をすべらせて、ぺしゃっと転んだ。
「いったぁ」
「……和泉って、どうしていつもコケてるの？」
「そんなの知らないー」
しらしらと月の光に輝く川辺を、薄売りに手をひかれてアカネが歩いてゆくのが見える。その姿は背の高い薄の穂に見え隠れして、うっかりすると見失いそうだ。

「和泉、早く」
薄売りを追いかけて歩き出すと、立ち上がってぱたぱたとスカートの裾や足をはたいていた栄奈も、慌ててついてきた。
「ねえ、阿川君」
「ん？」
「……いいのかな、これって」
「何が？」
ほんの半歩ほど遅れてついてくる栄奈を見ると、困ったような「どうしよう」といった顔をしていた。
「アカネちゃん、大丈夫かな。……だって、相手は人攫いだよ？　もしかしてこれって、すっごく危ないことじゃない？　いくらタケルのためだって、アカネちゃんみたいに小さな子をこんな囮（おとり）みたいにして、もし何かあったら……」
「うーん。大丈夫だと思うよ」
「どして？」
アカネは人間じゃないし。空栗荘の大家いわく、何かあってキレるとものすごく強い——というより、暴走してまわりが危ない——らしいし。
とは栄奈には言えないので、適当に口にした。

「本当に危険な相手だったら、アカネはあんなふうに近づいたりしないよ。それに、もしヤバそうだったら、俺(おれ)たちで助けに行けばいい」

「そ、そっか」

采奈はうなずくと、今度は足を速めて太一より少し前に出た。何かあったら本当に、一目散(いちもくさん)にアカネのところへ走っていくつもりなのだろう。

しらしら、しらしらと。

音もなく、満ちるに少し足りない月の光が降ってくる。河原の薄はいっそう銀の色を強めて、あたりは昼間とは違う不思議な明るさだ。

ああ、そういえば——太一は思う。

この川は時おり、異界と繋がる通り道になるのだと、ミヨシが言っていたことを思い出した。

7

薄売りは川の上流にむかって、どこまでも歩いていく。アカネが時々振り返っては、こちらに手を振るのが見えた。

「ここ、どのへんなのかな……？」

栄奈が土手の上に目をこらす。川の両側にはずっと同じような風景がつづいていて、家々の灯りなどもぽつぽつ見えるのに、それ以外はまるで影に呑まれたようにぼんやりと輪郭が曖昧だった。

結局よくわからなかったようで、栄奈は諦めたように、また視線を戻した。

太一は時計を見た。

「ねえ、もしかしてすごく遠くまで来てるのかな」

「そんなことないと思う」

「えー、なんで？」

「歩き出して、まだ二十分しか経ってないから」

ええっ、と栄奈は目を丸くした。

「私、何時間も歩いてるみたいな気がしてたけどっ？」

「うん。俺も」

「……なんか不思議」

栄奈ははあっと大きく息を吐いた。

「お盆の時もそうだったけど、阿川君といると、なんだか不思議なことが起こるね」

（それは違うと思うけど）

どちらかと言えば、「不思議」なことに巻き込まれているのは自分のほうだと太一は思う。

賽河原町にやって来てから。あの、空栗荘で暮らすようになってから。

でも、あまりイヤではなかった。

空栗荘にいると驚かされることも多いけれど、それまで自分が知らなかった——この世にあるとも思っていなかった、綺麗なものに出会うことができるから。

風景だとか想いだとか、他にも言葉で言い表せないいろいろなものに。

「——あのね、全然関係ないことを訊いてもいい？」

しばらく黙り込んでから、采奈が急にものすごく真剣な声で言った。

「なに？」

「ずっと気になってたの。……学校で私が阿川君に話しかけるの、もしかしたら迷惑かな？うるさいって思ってない？」

「どうして、そんなこと」

「だって、阿川君いつも一人でいるじゃない。一人が好きなのかなって思ってたの。他人と話すのも集団で動くのも面倒くさいって顔、いつもしてるから。……だから私が話しかけたりしたら、本当はイヤなんじゃないかなって。イヤだと思っていて、でも言わないのかな、なんて……」

太一はちょっと驚いて、彼女を見た。

（どうして、そんなふうに思うんだろう）

「俺……べつに」

采奈が話しかけてくれるようになったおかげで、この頃は学校でも手持ち無沙汰な気分をもてあますことがなくなっていた。

彼女のおしゃべりは嫌いじゃない。イヤだなんて思ったことはない。

「和泉のこと迷惑だって思ったこと、一度もないから」

「ほんと？　イヤじゃないの⁉」

「うん」

采奈の顔がパッと輝いた。

「よかったあっ」

そっかよかった、と繰り返して、采奈は笑う。で、足下がおろそかになったのか、またコケそうになった。

そんな彼女を見ていて、太一は不思議な気持ちになる。空栗荘で出会う「不思議」とは全然別物で、こっちのほうがもっと理解不能だ。

なんだか胸の中がふわっとした。

「和泉、さっき……」

「え？」

「俺のこと好きだって言ったよね」

とたんに、ぴしっと音でもたてたみたいに、采奈の笑顔がそのまま固まった。
「う……あ……そ、それは」
「本当に？」
采奈は胸元できゅっと拳を握ると、顔を赤くしながら大きくうなずいた。
「うんっ。私、阿川君のことが好きなの！」
そっか、と太一はうなずく。
胸の中がまた、ふわりとした。
「俺、誰かに好きって言ってもらったの、二人目だ」
「ええっ、他にも阿川君のことを好きな女がっ!?」
「うん。俺のばあちゃん」
「ば……」
「もう亡くなっているけど、俺のこと好きだって言ってくれた」
采奈はしんと黙り込んでから、それ違う、なんか意味違うと呟いた。
「……ちょっと、また、玉砕以前ていうか……？」
意味不明の独り言は聞き流して、太一は言った。
「クラスのやつにそんなこと言ってもらえるなんて、思わなかった。……ありがとう」
采奈はぽかんとして、それからふと、何か考え込むように首を傾げた。

「うーん」
歩きながら腕を組んで、ますます考え込んでいる。
「どうしたの？」
「ううーん。今ちょっと、難しいことを考えちゃった」
「え……」
「阿川君てさ」
太一をのぞきこむように、采奈はいきなりにゅっと顔を近づけた。
「どうしてか知らないけど、もしかして自分のことを好きな人間は誰もいないって思ってる？　だからいつも一人でいるの？」
太一は驚いて言葉につまった。
（そんなこと……）
思っていない。というより、考えたことがなかった。
一人でいるのだって、自分でそうしようと思ってしているわけじゃない。
でも。
――触らないで。あっちへ行って。
――あんた誰？　あんたなんか知らない。
今でも時々、その声が聞こえる。

あの時の母親の言葉が、あの時の彼にとっての世界の全部だった。

「いい？　あのね、そんなこと絶対にないんだよ！」

並んで歩きながら、采奈は大きな目で真っ直ぐ、睨むように太一を見ていた。

「だって地球には今、六十六億人も人間がいるんだよ。そんだけ人口がいて、その人のことを好きになる人間が一人もいないなんて、ぜったいにない！　確率的にありえない！　日本だけでも、一億二千万人も人がいるんだからね！」

いきなりスケールのデカい話である。

「えっと」

困惑する太一に、采奈はきっぱりと言った。

「アカネちゃんだって阿川君のこと、好きなんでしょ？　ということは、今この一〇〇メートル四方に私とアカネちゃんと、阿川君のことが好きな人が少なくとも二人はいるってことだからね。地球の面積をその割合で計算したら、ものすごい数になるじゃない。乗車率二〇〇パーセントの超満員電車なみだよ。わかったっ？」

その計算は、果たして正しいのだろうか。

しかし鼻息荒くまくしたてられて、太一は思わずうなずいた。

「……うん」

「わかったのなら、よし」

重々しく言って、采奈はまた笑顔になった。
彼らのまわりで緩やかに薄(すすき)が揺れている。ふわふわと。優しい、銀の光を散らして。
太一は少し黙ってから、
「ばあちゃんが言ってたけど——好きっていうのは、その人が気持ちのいいあったかい場所にいつもいて、笑っていてくれればいいと思うことだって」
そんなふうに思うなんて難しいと言った太一に、世界で一番簡単なことだと初緒は答えた。
いつか、おまえにもわかるのだと。
「和泉も、そう?」
「えっとぉ、そだね、私のは……私の好きは、その人といたら楽しくていつも一緒にいたくて、そばにいなかったら寂しくて会いたくなるってことかな」
「ふぅん」
好きという想いにもいろいろあるんだな、と太一は思う。
だったら、自分の「好き」はどんなだろう、とも思った。
「阿川君はそういう人、いないの?」
「どうだろ。……よくわからない、かも」
「そなんだ」
采奈はホッとしたような、残念そうな、複雑な表情をした。とりあえずライバルはいないっ

てことだよね、とため息まじりに呟く。
その時だった。
いきなり、視界がひらけた。

一面の、薄野原。
淡く黄みをおびた大きな月が、ぽかりと空に浮かんでいる。その下にどこまでも広がって波打つ、薄の穂。
けぶる銀の雲のような野原を、いつの間にか太一は栄奈と一緒に歩いていた。
前方に、アカネを連れた薄売りの姿が小さな黒い影になって見える。
「ここ……どこ？」
栄奈は呆気にとられて、まわりを見回した。
「河原じゃないよね？　ていうか川はどこいっちゃったの？　あれぇ、町の中にこんなとこ、あったっけ？」
「ここが和泉の言っていた異世界だったら、どうする？」
薄をかきわけて歩きながら、太一は言った。
間違いなく、ここは現実ではない、人間の世界ではない場所だ。完全にあちら側かどうかはわからない。もしかしたら、人と異形の世界の隙間にでもある場所かもしれない。

あちら側とこちら側のあわいにある、幻のような空間なのかもしれなかった。
「ええーっ、うそ、異世界なんてそんなわけ……だ、だってしゃべる動物もいないし、魔法も王国もないし……ただの薄の原っぱだし、ここ」
栄奈はこわごわといった顔で、もう一度あたりを見た。薄しかないけど、それが果てなくつづいている光景はやっぱりどこか奇妙で、眩しいくらい大きな月は綺麗すぎて現実味がない。そのことに気づいたのか、ぶるっと肩をすくませた。
「もし仮に、万が一ここが異世界だとして、阿川君は平気？」
「させまって危ないことはない、と思うけど」
「う、うん。……そうだよね」
栄奈は気を落ち着けるように何度も深呼吸した。それから急に思いついたように、肩にかけていた小さなポシェットを摑むと、中からメモ帳とボールペンを取りだした。歩きながらすごい勢いで、何か書き込みはじめる。
「何してるわけ？」
「ネタ！　小説のネタ！　この驚きの体験を書き残しておこうと思って！」
「……」
しかしすぐに、栄奈は書くのをやめて、ひどくガッカリしたような情けない顔をした。
「うーん、ダメかも。川に沿って歩いていたら薄の野原に出ましたなんて、ぜんっぜん劇的な

展開じゃないもん」
「ダメなの？」
「読み手をひきつける、ドキドキとわくわくがないの」
そこまで面倒みきれない。
「たいちー！」
と、突然目の前の薄の茂みが割れて、アカネが飛び出してきた。そのまま、子犬がじゃれつくみたいに太一にしがみついて、きゃあと笑った。
「アカネ⁉　どうかしたの？」
「うん。もういいやって思って、戻ってきた。あのねあのね、知ってる？　初緒が言ってたの、薄売りに連れて行かれても、手を放しちゃえば帰れるんだよ。でもね、ほとんどの子供は薄売りに手を繋がれたら、手を放すの忘れちゃうの。だから帰ってこられないんだって。知ってた？」
「え、そうなんだ……？」
「それでさよならってしたら、薄売りはいなくなっちゃったんだよ。それでね、アカネは見つけたの！」
得意そうに胸を反らせて、付喪（つくも）の少女は「あっち」と指さした。
アカネを連れていた薄売りの姿は、いつの間にか本当に消えていた。アカネが示したのは、

彼らが進んでいたのとは全然別の方角だ。
太一だって言われるまで気づかなかったのに、自分の頭よりも高い薄の中で、どうやってアカネはそれを見つけたのか。
「あっ」
目をこらすと、小さな影が、ずいぶん離れたところをゆっくりと歩いてゆくのが見えた。薄の穂が銀色に輝いて揺れるたび、うっかりするとその光の中に見失いそうになる。
アカネは声をはりあげた。
「さいなの弟を連れて行った薄売り、見つけたよ！」
そのとたん、遠い人影にむかって栄奈が駆けだした。

「和泉……！」
アカネの手を引いて、太一は慌てて栄奈のあとを追いかけた。
空いた手で泳ぐように薄をかきわける。何度か、根っこに足をとられて転びそうになった。前方の栄奈も幾度もつんのめったのが見えたが、どうにかコケずにすんだようだ。
真正面に、月。まるでその月の中に吸い込まれていくみたいだと、太一は思う。
果てのない野原をどれくらいそうやって走ったか、息が切れて自分の心臓の音が激しく耳の中で鳴り出した頃、ようやく薄売りの姿が近づいてきた。

一緒に子供がいる。小学生くらいの男の子。タケルだ。
（よかった）
見つけた。
「待って！」
采奈が叫んだ。
「お願い、待って！」
その声はもちろん聞こえたのだろう。驚いたことに、薄売りの足が止まった。
采奈は薄売りに追いつくと、その目の前に立ちふさがるようにして、でも呼吸がつづかなくてしばらくはぜいぜいと大きく肩で息をしていた。
それからようやく、相手を睨んで、息とともに切れ切れに言葉を吐き出した。
「……弟……返して。……連れて行かないで」
薄売りはまったく反応しない。手を繋がれた彼女の弟も、まるでボンヤリとして、自分がどこにいるのかも何をしているのかも、わかっていないみたいだった。半分眠ったような顔で、ぼうっとどこかを見ている。
「和泉！」
アカネとともにそこに追いついた太一が、やっぱり息を切らせながら叫んだ。
「……手を放せばいいんだ。アカネみたいに！」

「あ、うんっ」

采奈はハッとしたようにうなずくと、タケルに飛びついた。薄売りから引き離そうとして、力いっぱいその身体を引っ張った。

「タケル、手を放すの。放しなさいってばぁ！」

だがなぜか、弟の腕が抜けそうなくらい力を込めても、手は離れない。

太一は一瞬だけ迷ってから、思い切って——触れられるのは嫌でも、自分から触れるのは案外平気だとわかったから——タケルの手首を摑んだ。采奈と一緒になって、彼女の弟を取り返そうと奮闘した。

それでも、繋いだ手はびくともしなかった。薄売りがことさら力を入れているようにも見えないのに、まるきりひっついてしまったかのように、指一本はがすことができない。

「アカネ、これ、どういうことかわかる？」

へとへとになって、太一は近くで見ていたアカネに訊いた。

こっくり、付喪の少女はうなずく。

「アカネはわかるよ。あのね、他の人じゃダメなの。薄売りか子供か、どっちかが自分で手を放さないとダメなんだって」

「……そんなぁ」

采奈は泣きそうな声を出した。

（どうしたらいいんだろう）

太一は唇を噛んだ。アカネが言うように、薄売りと手を繋いだ子供は、その手を放すことを忘れてしまうのだ。もしかしたら、他のことも全部忘れてしまったのかもしれない。このままあちら側に連れ去られたら、タケルを取り返すことはきっともう無理だ。

采奈は泣きそうな顔のまま、もう一度薄売りの前に立った。

「お願い。タケルを返してください。お願いします！」

薄売りは無言だ。采奈や太一がタケルを力ずくで引き離そうとしている間も、身じろぎもせずそこに石のように立っていたのだ。

笠の縁からぐるりと垂れ下がった色紙のせいで、その奥にある顔は見えない。どんな表情をしているのか、まったくわからなかった。

「タケルを連れて行かないでください。お母さんもおばあちゃんもみんな、この子がいなくなって今、すごく心配してます。私も……この子、言うことをきかないし生意気だし、しょっちゅうケンカばっかりしてるけど、でも大切な弟なんです。だから返してください。――お願いします！」

（あれ……？）

太一は目を瞬かせた。

頭をさげた采奈の前で、初めて薄売りが動いた。

タケルと手を繋いでいないほうの腕を、ゆっくりと持ち上げる。驚いて顔をあげた采奈を指さした。

正確には、彼女が肩からかけていたポシェットを。

「え……これ？」

采奈が慌ててポシェットを摑んで差し出すと、薄売りはゆるりと首を振った。

「えっとえっと、中のもの、かな……？」

ハンカチ、メモ帳、携帯電話、財布――といちいち口に出しながら采奈はポシェットの中身を引っ張り出して、最後に、

「あ、飴玉（あめだま）……？」

きれいな包装紙で包まれた飴を取り出した。

薄売りは、彼女を指さしていた手を、掌（てのひら）を上にして返した。

「これでいいの？」

おっかなびっくり、采奈は飴をその掌にのせる。

次の瞬間、太一と采奈は同時に「あっ」と声をあげた。

飴を握り込んだ手をおろすと、入れ替わりのように薄売りは、摑んでいたタケルの手を放した。

「……おねえちゃん？」



とたんにタケルはきょとんと目を丸くして、采奈を見て不思議そうに言った。まるでたった今、夢からさめたような顔をしている。

「タケル！」

采奈は弟の手を摑んで、自分のほうに引き寄せた。そうしてから、瞬きをするのも忘れたように、まじまじと薄売りを見つめた。

「本当に？　……いいの？　返してくれるの？」

薄売りは答えなかったが、手を放したということは、そういうことなのだろう。

（わ……？）

そのとたん、太一はぎょっとした。

ぽろっと唐突に、采奈の大きな目から涙がこぼれた。ぽろぽろぽろ。それは張りつめていたものが、いきなりぷっつりと切れたみたいな泣き方だった。

「あ……ありがとう……」

薄売りはふたたび腕を持ち上げると、月を背中にした方角を指さした。そして踵を返してゆるゆると歩き出したが、そのまま数歩行ったところで。

姿が消えた。かき消すように。

あとにはただ、一面の薄が揺れているばかり。

「……もしかして、いい人、だったのかな」

采奈はぐすぐすと鼻を鳴らしながら、言った。
「うん。――でも和泉、よく飴なんて持ってたな」
「え、外に出る時って普通、飴玉をいっこカバンやポケットの中に入れていくもんじゃないの？」
「……そんなの、初めて聞いた」
「ええ!?　うち、おばあちゃんがいつも言ってるよ？」
「だって、何のために？」
「それは、ええっとぉ」
采奈も理由はよくわかっていなかったらしく、太一が訊ねると「あれ？」と首を傾げて考え込んだ。
「急にお腹が空いた時や、咳が出た時や、あと……もしかして、今みたいな時のため……だったりするの、かな？」
ああそうか、と太一は思った。
きっとそうなのだろう。薄売りについて行ってはいけないとか、お祭りの時には提灯を持って出ろとか、そんな類の――これも、もう迷信としか思われていないような古い言い伝えのひとつなのだろう。
うっかりと人ではないモノに出会ってしまった時は、飴を渡すのも災いを回避するための

方法だったのかもしれない。

太一は薄売りが指し示した方角に目をやった。

「帰ろう。……和泉の弟が見つかったこと、早くみんなに知らせなきゃ」

「そだね」

采奈は手の甲で顔をこすった。それから、まだきょとんとしているタケルを怒った顔で睨みつけると、

「あんたがいなくなって、大変だったんだからね！　みんなに迷惑かけて！　バカ！」

いきなりお姉さんの口調で、ゲンコツで弟の頭をゴツンとぶった。

8

異界の月に背中をむけて、薄野原をしばらく歩いてゆくと、ふいに虫の声が四方からわき上がった。

「あ……」

太一は目を瞠る。

その時には彼らはもう、もとの河原にいた。月は相変わらずしらしらと光っていたが、川辺

に満ちていた不思議な銀色の輝きは沈んで、暗い河原には寂しげに薄の穂が揺れている。虫の音ばかりが賑やかだ。

時計を見て、さらに驚いた。薄売りを追いかけはじめてから今まで、一時間ほどしか経っていない。

携帯電話を取り出した采奈が、「あ、電話通じる」と呟いた。

「今までダメだったの？」

「うん。河原に下りてからずっと圏外だったよ」

タケルが見つかったことを知らせるために采奈が家に電話をしていると、「おーい」という声が頭上から聞こえた。

ミヨシだ。土手の上の柵から身を乗り出すようにして、こちらに手を振っている。その後ろには十遠見もいた。

「レンが長老から聞いたんや。おまえらが、このあたりにおるてな。おかげでこっちは出番なしやった」

この辺に生えている植木か街路樹が、太一たちが采奈の弟を見つけたことを神社の「長老」に伝えたらしい。

「古都子とレンは先に空栗荘に戻っとる。おまえらも、はよ上がってこい」

真っ先に土手に駆け上がったのはアカネで、「こら、なんでおまえがおるんや」とミヨシが

文句を言うと、「アカネは太一のお手伝いをしたんだもん」と付喪の少女は口を尖らせた。

立ったますでにうつらうつらと船をこいでいたタケルを、采奈と太一の二人で土手の上に引っ張り上げる。本人の記憶になくてもずっと歩きっぱなしだったわけだし、小学生にとってはもう遅い時刻なので、くたびれたのだろう。

「ここからなら、空栗荘のほうが近い。そちらで休ませて、親御さんに迎えに来てもらったほうがいい」

十遠見が、ミヨシに顎をしゃくった。

「おまえがおんぶしろ」

「なんで俺やねん」

「理由その一、私はタダでそのテの労働はしない。理由その二、おまえのほうが体力が有り余っている」

「理由その一がえらいムカつくわ」

ミヨシは仏頂面で、それでも「そんな、いいです」と恐縮する采奈にかまわず、眠りかけているタケルをさっさと背中におぶって歩き出した。

空栗荘のほうが近いと聞いて、太一はあたりを見回した。土手の脇の道はどこも景色が似たようなので気づかなかったが、よく見ればそこは最初に薄売りを見つけた橋から、たいして離れていない場所だった。

時間の感覚どころか距離感までも曖昧で、ではどこをどうしてあんなに歩いていたのだろうと思う。

（……まあ、いいか）

アカネが駆け寄ってきて、太一の手をきゅっと摑む。彼を見上げて、「帰ろ」と言って笑った。人間ではないモノの、小さくて白くて、冷たい手。

不思議なことなんて、考えはじめたらきりがない。

付喪の少女に手を引かれるまま、太一は皆のあとを追って歩き出した。

空栗荘に着いて、ミヨシはようやく遅い夕食にありつき（レンは一足先にすませていた）、結果はどうあれ黙って外に行ったことでお露さんに小言をくらったアカネは、ふくれっ面でガラスケースに戻り（むろん栄奈に気づかれないようにだ）、事の一部始終を太一が他の面々に説明し、そうしているうちに栄奈の家族がタケルを迎えに来た。

祖母や母親と一緒に何度も何度も礼を言って、弟を連れて帰ろうとした栄奈が、何を思ったのかもういっぺん振り返って、見送る太一の前に立った。

「阿川君。また明日！」

「あ……うん」

「今日はありがとう。おやすみ！」

笑顔で手を振り、栄奈は家族のあとを追って、玄関を飛び出して行った。
また明日。その言葉で、太一の胸がふわっとまた軽くなる。
「いい子だね。あんたの友達なんだろ？」
同じように見送っていたお露さんが言った。
「べつに、友達になろうって約束したわけじゃ」
「バカだね。友達ってのは約束してなるもんじゃないだろ」
お露さんは肩をすくめると、割烹着の裾で手を拭いながら、「ああ、まったく騒動だったよ」と呟いた。
「――あの。俺、いっこわかんないんですけど」
「なんだい」
「薄売りは、子供を攫ってどうするんですか？」
まさか食べるためとかそういう話じゃないよな、と思っていると、
「自分らの仲間にするんだよ」
「え、じゃあ……薄売りにするってこと？」
ああ、とお露さんはあっさりうなずいた。
「あいつらも半分は人間だからねえ。どこの世界も、後継者問題は深刻なんだ」
そうだったのか。

「だったら今日会った薄売りも、もとは攫われた子供だったのかな……」
お露さんはふんと鼻を鳴らした。
「言っておくが、同情なんてするんじゃないよ。半分は人間でも、半分はもう妖怪なんだからね」
「俺……べつに」
ただ、なんとなく少し、切ないのだ。
「いい人みたいだったから……」
「あいつらは悪い連中じゃあないさ。だが記憶を失った時点で、人間の世界に帰りたいとか家族に会いたいとかいった感情も、きれいさっぱりなくしちまっている。本人たちは自分が不幸だとは思っちゃいないだろう」
それにね、とお露さんは真顔で太一を見た。
「妖怪の中には、哀れんだり気を許したとたんに、つけこんでくる輩もいるんだ。卑怯なんじゃなくて、人の道理や理不尽が通用する相手じゃないからなんだよ。それは、絶対に忘れちゃいけない」
もちろん、その逆もあるけどね。そう言ってお露さんは、やれやれと顔をしかめた。
「それにしたって、問題は大家だ。いっこうに目を覚ましゃしない。困ったもんだよ、明後日はもう秋分だってのに」

そろそろ雲行きが怪しくくなってきたよ、などとぶつぶつ呟きながら、お露さんは食堂に姿を消した。

そしてその秋分になっても、時国柊二郎（ときくにしゅうじろう）はやっぱり寝ていた。

二章　夢の交い路

1

「太一、『お話』のつづきー！」

胸のあたりが重苦しくて目を覚ますと、アカネが布団の上から馬乗りになって、顔をのぞきこんでいた。

時計を見ると、朝の五時半。

昨夜は珍しく部屋に遊びにこなかったと思ったら、これだ。太一は寝ぼけながら、ため息をついた。

「『お話』のつづき、聞きたい？」

「……ごめん。俺、あと二時間寝るから」

掛け布団の端を両手で摑んで、勢いよく頭の上に引っ張り上げたら、アカネはころんと畳に転がり落ちた。

しかしめげることなく、というかむしろ意気揚々と、付喪の少女は太一の枕元に陣取ると

「お話のつづき」をはじめた。

「よその山で仕事を見つけた男の人は、いっしょうけんめいに働きました。それで、お金が貯まったので、自分の生まれた村に帰ることにしました。女の人と娘におみやげを買って、男の人はふるさとを目指しました。よその山はとても遠かったので、最初に汽車に乗りました。それから――」

耳をくすぐるようなアカネの声を聞きながら、太一はもう一度、うとうとと眠りに落ちていった。

そのせいだろう。

こんな、奇妙な夢を見た。

雨が降っていた。

ざあざあと大地を打ち、大気を震わせる激しい雨だった。

紅葉した深山の樹々がずっぽりと、陰鬱な薄ねず色にそぼ濡れている。

その雨の中、男は険しい山道をたどり、故郷の村をめざしていた。

男が生まれたのは、山峡にある小さな村だ。昨年は実りが悪く、男は暮らしのために外に働きに出ねばならなかった。最初は冬の間だけの出稼ぎのはずだったのが、いつの間にか春がゆき、夏が過ぎて、ようやく帰るめどがたったのは、村を出てから一年も経てからのことだった。

——会いたい。

妻は娘はどうしているだろう。生まれたばかりであった娘は、もうずいぶんと育ったことだろう。

本来なら麓に宿でもとって、雨がやむのを待つべきだったかもしれない。だが、男は一刻も早く妻子に会いたかった。その一心で家路を急いでいた。険しいとはいえ、勝手知ったる道だという安心感もあった。

ざあざあという雨音以外、何も聞こえない。頭にかぶった笠から水が幾つもの筋となって流れ落ちる。雨と飛沫を浴びて、男の着物も荷物もしとどに濡れている。ただ、妻と娘のために買った土産だけは、濡れないように布に包んで、懐にしっかりと抱いていた。

——会いたい。早く会いたい。

男はさらに足を速める。空気までがたっぷりと水を含んで、息を吸うたびむせかえりそうだ。片側はそそりたつ山肌、反対側ははるか下に渓谷を見下ろす断崖——という難所まで来た時だった。

ふと、男は異様な音を聞いた。雨の音ではない。腹に響くような、山そのものが発する低い振動。

男の頭上で、土が流れはじめた。雨で緩んだ山肌が、地滑りを起こしたのだ。

目の前の樹木がゆっくりと傾いで、大量の土砂とともに崖の下へと落ちてゆく。逃げ出す間

もなく足下の地面が崩れて、男の身体も崖から投げ出された。
その一瞬に、男は幼い娘のことを想っていた。
——会いたい。

朝、目を覚ますとアカネはもういなかった。
太一は布団の上に起き上がると、ぼんやりと部屋を見回した。カーテンの隙間から、眩しい光が射し込んでいる。
（あれ、雨が降ってたんじゃなかったっけ……？）
そう思ってから、それが夢だったことに気づいた。
ずいぶん生々しい夢だった。本当に土砂ごと崖から落ちたかと思った。顔にあたる雨の冷たさや、足下が崩れた瞬間の身体が浮き上がるような感覚まで思い出せる。
けれども寝起きの頭がはっきりしてくるにつれて、夢の記憶はあっという間にぼやけてしまい、結局は、
（ヘンな夢を見たな）
の一言で片付けて、太一は服を着替えはじめた。
今日は秋分。休日である。といっても朝ご飯の時間はいつもと変わらないので、寝過ごすと食いっぱぐれる。育ち盛りの高校生にとっては、夢の内容よりそちらのほうがよほど、深刻な

問題だ。

流しで顔を洗って部屋を出たとたん、

「今度は一体、何だってんだい⁉」

うんざりしたようなお露さんの声が、階下から聞こえた。

どうしたんだろうと思っていると、隣室のドアがコツンと音をたてた。

「……境界を越えたヤツがいるな」

「え？」

太一は隣室の『１７４』のプレートを見つめたが、タカハシさんはそれきり、黙ってしまった。

首を傾げながら階段を下りていくと、玄関の磨りガラスの戸が開いていた。お露さんと古都子がこちらに背中をむけ、それぞれガラス戸の縁に手をかけて外をのぞいている。

「おはようございます。――何かあったんですか？」

「あ、太一君。おはよう」

古都子は振り返ると、肩をすくめた。

「ほら、これ見て。昨日までは何ともなかったわよね？」

言われて戸口の外に目をやり、太一は「うわ」と声をあげた。

（――赤い）

地面が真っ赤だ。

正確には、玄関前の庭を一面、埋め尽くすように深紅の花が咲き乱れている。

「これって……彼岸花、でしたっけ？」

「そうだ。他には曼珠沙華、死人花、幽霊花、天蓋花、火炎花とも言う。ちなみに有毒植物だ」

玄関のすぐ外で腕を組んで立っていた十遠見が言った。

「毒なんですか？」

「食べなきゃ平気だよ」

お露さんは顔をしかめると、割烹着の腰に手をあてた。

「そりゃ、彼岸花は芽を出す時はいっせいだけどねえ。いくらなんでも一晩で茎を伸ばして花をつけるなんてこと、あるもんかね」

太一はもう一度、赤い色彩に埋もれた前庭を見た。

（こっちって、人間の世界の側だよな）

生け垣も門もそのむこうのアスファルトの道路も見える。何より、空はよく晴れて青い。妖怪の世界のほうは、多分今日もまだ夕焼けのままだろうと思われる。

「あの、大家さんは……？」

ためしに訊いてみたら、お露さんは「ふんっ」と盛大に鼻を鳴らした。やっぱり大家はまだ

寝ているようだ。
「そういえばさっき、タカハシさんが言ってました。――境界を越えたヤツがいるって」
「あらら、ヤバいわね」と古都子。「そうするとこの彼岸花も、そのことに何か関係があるのかな」
「さあ。彼岸花の話はしてませんでしたけど」
「まあ遅かれ早かれ、何か起こるとは思っていたけどね」
お露さんはふうっと息をついた。それから声を低めて、
「古都子、例の場所には行ったんだろう？」
ちらりとお露さんを見て、古都子はええとうなずいた。
「でも柊さんはあそこにはいなかったわ」
「ふうむ」
何のことだろうと太一は思った。
（例の場所……？）
でもそれは、ぼそぼそと二人で密談でもしているような会話だったので、なんとなく口をはさむのは気が引けた。
と、そこへ、
「妖気らしいもんはないな。普通の花や」

外で彼岸花を調べていたミヨシが、玄関まで戻ってきて言った。
「あとな、前庭だけやのうて建物の周り全部、彼岸花がぎっちり咲いとる。そっちはレンが見に行っとるけど」
「ご苦労」
「おいこら十遠見、何様や自分。おまえも調べんかい」
突っ立ったままの十遠見を、ミヨシが睨みつける。国家公認術者は指でメガネの縁を押し上げると、ニヒルに笑った。
「この花に妖気がないことくらい、私には見ただけでわかる」
「うわ、ろくに仕事もしてへんくせに税金の無駄遣いばっかしとる、どっかの省庁みたいにムカつくやっちゃ」
「ふむ。金の無駄遣いは私も大嫌いだ。珍しく意見があったな」
などと言っているところに、レンも戻ってきた。なぜだか少し、困ったような顔をしている。
「あんたはどうなんだい？　花たちは何かしゃべったかねえ？」
お露さんが訊ねると、答に少しだけ間があって、
「……いえ、何も」
レンは首を振った。
「すみませんけど、僕はこれからバイトに行かなければならないので……」

お露さんは怪訝に眉を顰めたが、すぐに「ああ、そうだったね」とうなずいた。
「すぐに朝食にするよ。――ほら、あんたらも先にご飯を食べちまいな」
「レン、今日は休みだって言っていなかった？」
食堂に戻っていくお露さんを見送って、古都子が軽く首を傾げる。
「……その予定だったんですけど……他のバイトの人が急に来られなくなったから代わりに出てくれって、昨日になって店長に言われて」
「そうなんだ。大変ね」
「平気です。このバイトも長いし」
呟くように言うと、レンはそそくさとお露さんのあとを追っていった。
「ふーん？　……まあ、いいか」
なぜだか古都子はそんなことを言って、今度は太一を振り返った。
「太一君も、今日は協力してくれる？」
「何をですか？」
「もちろん、柊さんを起こすのよ。タイムリミットは、月の出までね」
古都子はニッコリと笑った。
「今夜はお月見だもの」

2

朝食は珍しく洋風だった。ツナとハムとレタスのサンドイッチに、カリカリに焼いたベーコンと炒り卵のつけあわせ。根菜のスープ。コーヒーと紅茶は好きなほう。どれもとても美味しかったが、住人たちはそれぞれに考え事をしているようで、珍しくほぼ全員が顔をそろえているというのに、食卓は会話もなく静かだった。

こういう沈黙を破るのは、勇気のいることだ。

「あの」

だけど、どうしても気になることがあるから、太一は小さい声で切り出した。

「大家さんて、目が覚めなくなってからこれで四日目ですよね。……お腹が空くと思うんですけど」

「そら当然、空くやろな」

サンドイッチを噛りながら、ミヨシが仏頂面で言う。

「それどころか、衰弱死ということもありえる。このままオーナーが目を覚まさなければ」

十遠見は紅茶のカップにたっぷりとミルクと砂糖を入れて、口に運んだ。

太一はおそるおそる、

「だったら、このままじゃマズいんじゃないですか？」
「せやからどうにかして、大家を起こす算段をしとるんやないか」
昨日、太一が学校に行っている間も、ミヨシたちは柊二郎のためにいろいろとやっていたらしい。成果はなかったようだが。
「そういう意味じゃなくて……大家さんを病院に連れていくとか、医者にみせるとかしなくていいんですか？」
太一にしてみれば、なぜ誰も救急車を呼ぶとか医者を呼ぶとか言い出さないのかが、腑に落ちなかった。
「今はね、そういうわけにはいかないのよ」
古都子はベーコンをフォークでつつきながら言った。
「いくら眠ったままでも——やっぱり、柊さんがこの場所にいるのといないのとでは、全然違うわけだから」
「違うって」
「おまえが前に言うたみたいに、風呂の栓を完全に取っ払ってまうようなもんや。大家がここを空けたら、湯がだだ漏れになるわ。ただでさえ、結界が緩んどるのに」
ミヨシは鼻を鳴らした。
それに、と十遠見も言う。

「病院で原因がわかるとも思えないしな」
「でも、今日中に目を覚まさなかったら、医者にみせることも考えないとね。――大丈夫、みんな、柊さんのことを心配していないわけじゃないから」
それでちょっとホッとした。本当のことをいうと、他の住人たちがいかにも呑気な感じなので、もしかすると空栗荘の大家は絶食が平気な特異体質かと、太一は思っていたのだ。冬ごもり中の熊みたいに。
（よかった。そのへんは普通の人だったんだ……）
「ごちそうさま。僕はもう出ないと。……すみません、皆さんのお手伝いができなくて」
レンが空いた食器を持って立ち上がった。
「気にすんな。夕方には戻るんやろ」
「ええ、多分」
「お月見やし」
「……はい」
レンが出ていったあとに、十遠見が「さて」と紅茶のカップを置いた。
「まずはオーナーがあの状態になった原因の究明だな。可能性としては、呪詛か憑依のどちらかだ」
（ジュソ？　ヒョウイ？）

早くも太一には意味がわからない。
「おまえ、大家が呪いをうけたかもしれへんと言うとったやろ」
ミヨシが太一に顎をしゃくった。
「えっと、クロ爺がそう言っていたので」
一昨日にクロ爺とろくろっ首が訪ねてきたことは、一応、お露さんに伝えてある。
「誰かが大家を呪って術をかけて眠らせたとしたら、それが呪詛や」
「……あの」
「なんや」
「クロ爺は、大家さんのことを恨んだり邪魔に思っている者もいるって言っていたけど、どうしてですか？」
「そらおまえ、境界守がおらんかったら、もっと簡単にあっちとこっちを行き来できるやろ。そうしたいて望んどるヤツもおるやろし、そういうヤツは大家のことを邪魔やて思うんやないか？」
あっさりとミヨシは応じた。
「え、そんなことで？」
「んー、私たちの言う『そんなこと』って、案外あっち側の住人には通用しないことが多いのよね」

古都子がコーヒーを飲みながら、笑顔で言う。
「もちろん人間の側にも、境界守がいなければいいって考える者が絶対にいないとは言い切れないけど」
「はあ」
——人の道理や理不尽が通用する相手じゃない。それは、絶対に忘れちゃいけない。
その言葉を、空栗荘に来てから何度も聞いた。
(でも……危険なヤツもいるけど、のっぺらぼうやクロ爺や、他にも親切な妖怪はいると思うけど)
「けどまあ、昨日調べたところでは、呪詛やないな」
ミヨシが言うと、十遠見もうなずいた。
「外から念を送ってきているのなら、こちらにもすぐにわかる」
「ということは、憑依?」と古都子。
そや、とミヨシはきっぱりと言った。
「目を覚まさへんのは、何かが大家に取り憑いとるせいや」
朝食のあと、片付けに忙しいお露さんを残して全員で柊二郎の部屋に行った。
古都子に「協力して」と言われたものの、何をすればいいのかさっぱりわからないまま、太

一は他の三人にくっついて、大家の部屋に入った。
そういえば大家さんの部屋を見るのって初めてだ、と思う。
時国柊二郎の部屋は、北側の庭に面した二間つづきの和室である。
手前の八畳に古ぼけた箪笥やちゃぶ台や本棚といった家具が雑然と置かれてあって、奥の六畳が床の間と押し入れのある寝室だ。
部屋の障子は閉まっていたが、雪見窓が開いているので十分明るい。すうすうと、布団に横になったままの柊二郎が規則正しい寝息をたてている。
こうして見ると、普通に寝ているだけにしか見えなかった。
（取り憑く……取り憑くっていうのは、えっと……？）
とりあえず思い出したのは、映画の「エクソシスト」で女の子に悪魔が取り憑いたシーンだ。女の子が急に男の声でしゃべったり、空中に浮いたり、首がぐるっと背中のほうを向いたり、なんだかいろいろ大変な話だった。
（どう見ても、悪魔が取り憑いたんじゃなさそう）
すうすう、むにゃむにゃといたって平穏な大家の寝顔を見て、太一は思った。
「まずは何が取り憑いとるか、やな。正体がわからへんと、手の打ちようがないし」
「では、やるぞ。――ミヨシ、オーナーの両手を彼の胸の上に置け」
なんで命令やねんと一応文句を言いながら、ミヨシは大家の手を摑んで、掛け布団の上の胸

のあたりに重ねるように置いた。
「君たちもオーナーの反応をよく見ていてくれ。眠ったままため息をつけば生き霊、アクビをすれば死霊、笑い出したら取り憑いているのは動物霊だ」
「動物霊？」
首を傾げた太一に、
「狐とか狸とか犬とか、馬とか猫とか蛇とか。ポピュラーな連中はもともと妖力が強いからやっかいだけど、他の動物も低級霊になって人間に取り憑くことがあるわね」
古都子が囁いた。
「ライオンとかキリンとかコアラもですか？」
「そのあたりは恨みを買うほうが難しいと思う」
とりあえず十遠見が言うとおり、太一は寝ている大家に目をこらした。
「諸余怨敵皆悉摧滅！」
国家公認術者は大家の足下に立つと、口の中で何か唱えながら、空中に指で文字のようなものを描いた。その動作を幾度か繰り返してから、最後に左手の人差し指と中指をそろえて大家にむかってぐっと突きつけた。
「応！」
全員が息をつめて柊二郎の反応を見守った、瞬間。

ぐおお、と高いびきが響いた。
「……」
「……」
「……いびきて、何やったっけ？」
「憑き物の反応ではないことは、確かだな」
仏頂面でミヨシが一応訊ね、負けず劣らず苦々しく十遠見は応じた。
ぐおー、ががが、とひとしきりいびきをかいて、柊二郎はまたすうすうと寝息をたてる。実に気持ちよく寝ているようだ。
「しかし、これでわかった」
メガネの縁に指をそえて、十遠見は断言した。
「何がや」
「憑依しているのは、生き霊でも死霊でも動物霊でもないということだ」
あまり解決になっていない気がする。
果たして、ミヨシはますます仏頂面で、
「したら何やねん」
「消去法でいったら妖怪でしょ？」
あっさり、古都子が言った。

ミヨシは彼女を横目で睨んでから、がっくりと肩を落とす。
「あああ、一番面倒なパターンやないか」
「妖怪も取り憑くんですか？」
太一が訊ねると、古都子はもちろんとうなずいた。
「取り憑くわよ。太一君、前にヒダルガミに取り憑かれてひっくり返ったことがあったじゃない」
そういえばそうだった。取り憑かれたというより、半透明のゼリーみたいな妖怪に背中に乗っかられて、重くて動けなかったというほうが正しい気がするが。
「クロ爺から聞いたの。米粒を食べさせて太一君を助けたって。――だからね、妖怪の場合はそれぞれ対処法が違うから、一度人間に取り憑くと引きはがすのがちょっと面倒なわけ」
「そうなんですか」
「しかし妙だな。オーナーは我々よりも妖怪については詳しく知っているはずだ。簡単に取り憑かせるとは思えないのだが」
思案顔の十遠見に、ミヨシは肩をすくめて見せた。
「それこそこの時期やし。月に妖力をもらう連中はあなどれんで」
その時、縁側のガラスを誰かが外からコツコツと叩いた。
（あれ……？）

太一が障子の窓越しに目をやると、庭に狢が立っている。ろくろっ首同様、こちらも顔を見るのは盆の祭り以来だ。

あら、と呟いて、古都子は障子と縁側のガラス戸を開けた。

そのとたん異界とこちらが繋がって、夕暮れの赤い光が空を染める。まだ午前中だが、妖怪たちの町は相も変わらずの夕焼けだ。

「こいつァ、皆さんおそろいで」

狢はいつもと同じように若い人間の男の姿で、派手な格子柄の着物を着ていた。片手に煙管、もう一方の手に人の魂を入れた虫籠を提げているのも毎度のことだが、今日はそれに加えて彼岸花を一輪、襟足に挿している。おかげで頭から赤い花でも咲いているような案配だ。

「頼まれものを持ってきたぜ」

狢は縁側に腰を下ろし、虫籠を横に置くと、懐から何か書きつけた紙を古都子に手渡した。

「助かるわ。どうもありがとう」

「おい、古都子。それ何や？」

ミヨシが縁側に顔を突き出した。

「賽河原町に住む妖怪のうちで、月に縁のあるモノたちの住所録よ。役に立つんじゃないかと思って、昨日のうちに頼んでおいたの」

狢は縁側に座ったまま、火のついていない煙管を吸いつけた。

「しこたま苦労したぜ。役所ってところは文字通りのお役所仕事で、しかも今日は休日で窓口が開いてないときたもんだ。にっちもさっちもいかねぇから、町長にじかに頼んでようやくそいつを手に入れたってわけよ」
「妖怪にも休日ってあるんですか？」
思わず、太一は訊いてしまった。その前に役所があるのも驚きだが。
「そりゃァ、オイラたちにだって年中行事くらいはあるさ。成人の日だの憲法記念日だのって人間の決まり事の休みはねえけどよ。ああ、あとクリスマスと燃えないゴミの日もねえな」
「燃えるゴミの日はあるってこと!?」
真顔の太一を呆れたように眺めてから、「ほんっと、冗談のわからねえヤツだ」と狢はからから笑った。
「手間をかけさせちゃったわね。お礼に今度、何か奢るわ」
「なァに、いいってことよ。あんたの師匠にゃ世話になってるからな。こいつも作ってもらったし」
狢は傍らの虫籠をひょいと持ち上げた。
「ところで今の町長て、誰やったっけか」
ミヨシが首をひねった。
「鮒大尽さ。見かけたことくらいあるんじゃねえのか？　ほらあの、シルクハットをかぶっ

た……」

「あいつかい」

え、と太一は思った。

（まさか……あの、お魚紳士⁉）

英国紳士ばりにシルクハットとステッキがトレードマークの、物腰は上品だがかなり空気が読めていないあの鮒の妖怪が賽河原町の町長だったとは。すごく意外だ。

その時、お露さんが湯呑みを盆にのせて部屋に入ってきた。

「誰が来てるのかと思ったらあんたかい、狢。ふん、久しぶりじゃないか」

「おう、お露ばあさん。三途の川の渡し守を半殺しにしたせいで、いまだにお迎えが来ないってのは、本当みてぇだな」

「バカ言ってるんじゃないよ。人聞きの悪い。渡し賃がどうこうとみみっちいことで文句を言うから、首ねっこをひっ摑んで川の中にぶん投げてやっただけさ」

お露さんは狢の横に湯呑みを置いて、呆れたように妖怪を見た。

「なんだいあんた、その格好は。おつむがお気楽すぎて、ついに頭のてっぺんから花が咲いたのかと思ったよ」

「ああ、こいつか」

狢は襟首から彼岸花を抜き取ると、縁の上に放り出した。

「今日になっていきなり、こいつがあちこちに咲きだしたもんだからよ。おまけにちょいと妙な咲き方なもんで、柊のダンナに何か関係があるんじゃねえかと思ってね」
「何が妙なんだ？」
メガネを夕日にきらりと光らせて、十遠見が口をはさんだ。
それを一瞥して狢は、
「なんでぇ、そこにいたのか十遠見。おめぇに答える義理はねぇよ」
そっくり返って腕を組むと、横柄な口調で言う。
いたのは最初からわかっているだろうに、どうやらこの妖怪は十遠見のことをそれほど好いてはいないらしい。
ぴくっと十遠見のこめかみに青筋が立った。
「妖怪風情にデカい口を叩かれる筋合いもないな」
「けっ、言ってらァ。キザ野郎め」
太一はそっと古都子のそばに寄って、
「あの二人って仲が悪いんですか？」
「お上の命令で動いている術者と妖怪が仲良しこよしって、あまりないんじゃないかしら」
こそこそと古都子が囁き返す。
「まあ、あの二人の場合は相性の問題もあるけどね」

「じゃあミヨシさんも？」
「ミヨシは半人前扱いだから、妖怪たちも大目に見ているみたい」
「え、そうだったんですか」
「かわいそーだから、本人には絶対にっ、言わないであげてね。あれで、けっこう傷つくみたいだから」
アホ、さっきから全部聞こえとるわっ、と縁側でミヨシがわめいた。
「――いいからさっさとお言いよ、狢。咲き方が妙ってのは何なんだい？」
お露さんは狢が手折ってきた花を摑みあげると、顔の前で玩具のように揺らした。
本当は言いたくてたまらなかったらしく、狢は出された茶をもったいぶって飲み干してからニヤリとする。
「彼岸花ってのは普通はひとっ連なりに行列みてぇに群れて咲くもんだ。けどオイラが今日見たやつは、なんていうかね、数本ずつひとかたまりになって、ぽつぽつぽつと同じ間を開けて咲いているのさ。そいつがずうっとつづいていて、坂道をのぼってこの空栗荘の前で終わっている。それがまるで、誰かの足跡みたいな案配で」
「足跡？」
へえ、とお露さんは呟いて、彼岸花を下に置いた。
「何なんだろうねえ、それは」

「さァてね。……とにかく伝えるだけは伝えたぜ」
狢は虫籠を持って立ち上がった。
「用事もすんだことだし、オイラはこれで暇ごいだ」
「ああ。ご苦労だったね」
あばよ、と芝居じみた仕草で煙管を振って、狢はぶらりぶらりと去っていった。
それを見送って、
「じゃあ私は、これからこのリストにある妖怪たちをあたってみるわ。もしかしたら役に立ちそうな情報でもあるかもしれないし」
古都子が立ち上がった。
「俺も一緒に行くわ。手分けしたほうが早いやろ。ここは十遠見だけで、どうにでもなるやろし」
ミヨシが、部屋を出て行く古都子のあとを追う。
「では私は着替えてくるとしよう。本腰をいれて、オーナーに取り憑いたモノの正体を調べねば」
と、十遠見も行ってしまったので、部屋には太一とお露さんと寝ている大家が残された。
「あんたはどうすんだい？」
「え、ええと」

お露さんにじろりと見られて、太一は困った。

どうするかと言われても、どうすればいいのかわからない。古都子たちにくっついて行っても、妖怪のことをよく知らない彼では邪魔なだけだろうし、ここで十遠見の手伝いができるとも思えなかった。

お露さんはふふんと鼻を鳴らした。

「やることがないんだったら、買い物に行ってきておくれ」

そう言って、割烹着のポケットから取り出したがま口を、太一の手に押しつけた。

「買い物？」

「ひとっ走り行って米粉を買ってきてほしいんだ。そのへんのスーパーに売っているから。それくらいはできるだろ」

「はあ」

「月見の団子をつくらなきゃならないのに、今見たらきらしちまっててね。——ああそれと、薄と一緒に飾る七草もいるんだったねえ。レンに頼めばよかったのに、うっかりしていたよ。あんた、レンの店はわかるかい？」

「知りません」

「じゃ、これが店の場所だ」

お露さんは住所を書きつけた紙をまたもポケットからさっと取り出すと、太一に渡した。

「町内だから遠くない。七草はいつも店で買っているから、レンに言えばわかるはずさ」
そうだ、と思いついたようにつけ加える。
「先に七草を買いに行っとくれ。それで、買えたかどうか店を出たらすぐに電話しな。もしも売り切れだったりしたら、急いで自分で摘んでこなきゃならないからねえ」
「わかりました」
がま口と店の場所を書いた紙をポケットにしまった太一に、お露さんは念を押すように言った。
「いいね。七草があってもなくても、必ず電話をよこすんだよ」

玄関を出ると、目が痛いほどの赤い色。前庭一面に群れなす彼岸花が、まだ夏の名残を残した日射しの下で、炎のように鮮やかにうねっている。
わずかに花の咲いていない飛び石の上をたどって、太一は空栗荘の門を出た。
（えっと、七草と米粉……）
がま口でふくらんだジーパンのポケットを気にして歩きながら、太一は小さく息をついた。
小学生のお使いみたいだ。こんな時、自分は空栗荘の他の住人たちとは違うんだなと思う。
ちょっと落ち込んだ。みんなが行動しているのに自分だけできることが何もなくて、それは太一があそこの奇妙な人たちとは違うから当たり前のことで、それが情けないわけじゃないけ

ど、なんだかじわじわと気分がめいってしまう。

ひょっとしてこれは、寂しいという気持ちではないだろうか。

（寂しいなんて……）

学校や自分の家で一人だった時にも、感じたことはなかったのに。

ミヨシや十遠見のように人には見えないものが見えたり、レンのように植物と話ができたり、古都子みたいに異世界のものたちと親しくつきあえたら、きっとこんな気分にはならないのだろう。

彼らのように他の人間とは違う力があったら——きっと、他人とうまくつきあえないことなんか、どうでもよくなる。こちらの世界の人間との繋がりなんか、本当に関係なくなって、何が起こっても空栗荘に逃げ込んで安心して暮らしていけるのに、と思う。

（人間より妖怪のほうが、考えてることがわかりやすいっていうか、気楽だし……）

もう一度ため息をついて、太一はポケットから紙を取り出した。店の住所を確認する。この町に来てからいい加減あちこち歩き回っているので、迷わずにすみそうだ。

「秋の七草って何だっけ。……菊とかじゃないよな？」

それにしてもこの状況で、団子をつくって月見をする気満々のお露さんもすごい。

そんなことを考えながら歩いていて、ふと、太一は目を瞬かせた。

路上に彼岸花が咲いている。

ぼうっと考え事をしていたから気に留めていなかったけれども、その赤い色は空栗荘を出てからずっと、太一の視界の隅に途切れることなくあった。

高校との往復の時にもこの道を通るけれども、昨日は彼岸花なんて咲いていなかったはずだ。

（だったらこれも、今朝になって急に出てきたのかな）

何気なく花に触れようとして、有毒だというのを思い出して指をひっこめた。実際、その強烈な赤い色は艶(あで)やかだけど毒々しい。

（空栗荘に咲いたのが、外まで広がってる……とか？）

――なんていうかね、数本ずつひとかたまりになって、ぽつぽつぽつと同じ間をあけて咲いているのさ。

――それがまるで、誰かの足跡みたいな案配で。

確かに、ちょうど太一の歩幅くらいの規則正しい間隔で、彼岸花は咲いていた。アスファルトを突き破って、道の真ん中で赤い冠(かんむり)みたいな花を揺らしているものまであって、よく車に轢(ひ)き潰(つぶ)されないものだと思う。

（どこまでつづいているんだろう）

だが、大通りにむかう角を曲がったとたん、彼岸花はぱったりと姿を消した。

まるで、こちらは道が違うとでもいうように。

なんだか誰かとそこでいきなり別れたような妙な気分で、太一は振り返ると、別方向へと伸

びてゆく赤い色彩を見つめた。

レンが働いている花屋は、バス通り沿いにあった。

店の中をのぞいても、レンの姿は見あたらない。仕方なく、店先で鉢植えの手入れをしていた女性の店員に話しかけた。

「あの、風田(かぜた)レンさんはいますか？」

「風田さん？　今日はお休みですよ」

（……え？）

返ってきた答に、一瞬ぽかんとした。

「お休み、なんですか？」

「ええ」

太一の表情を見て、にこやかに笑い皺(じわ)をたたえていた年配の女性は、首を傾げた。

「風田さんが何か？」

「いえ……、なんでもないです」

「あなた、空栗荘の方？」

いきなり言われて、太一は思わずうなずいた。

「はい」

「ああ、やっぱり。空栗荘の時国さんとうちの店とは、先代の頃からのおつきあいなんですよ。風田さんのことも、それで今のご主人から紹介いただいて」
「はあ」
「うちはこのとおり、夫婦でやっているような小さな店ですから、風田さんのおかげで力仕事なんかは本当に助かっているの。最近お会いしていないけど、時国さんによろしく伝えてくださいね。――レン君は大丈夫ですよって」
レン君、という呼び方に親しみがあった。だけど大丈夫というのは、どういう意味なのだろう。
太一はちょっと黙り込んでから、訊いた。
「この店のバイトって、レンさんだけなんですか？」
「ええそうよ。どうして？」
「……あ、なんでもないです。俺、多分間違えちゃって。レンさんが今日は店にいるって思ったもので」
「用件があるんだったら、聞いておきましょうか？　もしかしたらあとで本当にレン君が顔を見せるかもしれないし」
「いえ、いいです。それよりあの、……七草、ありますか？」
七草は店の前の銀色のバケツに、束にしておいてあった。一束三百円。

「萩、尾花、くず、撫子、オミナエシ、藤袴、桔梗。はいどうぞ」
ピンクや黄色や紫の花をつけた野草を一束受け取って、太一は店を出た。
「えっと、あとは米粉……」
その前に、七草があったかどうか電話しろとお露さんに言われていたから、バス停の横にあった電話ボックスに入った。
すぐに電話口にお露さんが出た。
「七草、ありました」
『そうかい。そりゃよかったよ。——で、レンはいたかい？』
「え……」
レンが嘘をついていたことを言っていいのかどうか、太一は迷った。口ごもっていると、
『いなかったんだね』
ため息まじりの声が聞こえたので、太一も仕方なく答えた。
「あの……今日はレンさんは休みだって……」
ふぅむ、と考え込むような短い間が、受話器のむこうにあった。
『太一。あんた、もうひとつ頼まれておくれ』
「え、はい」
『空栗荘の外に彼岸花が咲いていただろう。それがどこまでつづいているのか、見てきてくれ

ないかい』
「彼岸花が、どこまで……？」
太一は思わず手にした受話器を見つめた。
『もしも町の外まで咲いているようなら、どっちの方角にむかっているかだけ確認して、戻ってくるんだ。わかったね』
何だかさっぱりわからない。
『それでもし、レンを途中で見つけたら連れ戻しとくれ』
「……レンさんを？」
『多分ね、狢の言ったことは本当だ。彼岸花は足跡なんだよ。境界を越えていった何者かのね。レンはそれに気づいて一人で追っていったのじゃないかね』
（本当に足跡だったんだ……）
だけどどうして歩いたあとに花が咲くのかな、と太一は首をひねった。
（もしかしたら、よくあることなのかな。……相手が人間じゃない場合）
いつものように、空栗荘の住人にとってはきっとたいした「不思議」じゃないんだろうと太一は思う。
だから、今気にしなければいけないのは、そっちじゃなくて。
「でも、どうしてレンさんが」

一人で？　バイトに行くと言って、みんなに嘘をついてまで？

もう一度、深いため息が受話器のむこうから聞こえた。

『さっき狢が持ってきた彼岸花がね、言っていたんだよ。アタシは植物と話ができるわけじゃないけど、それでも一言だけ聞こえたんだ。――会いたいって』

太一はドキリとした。

彼岸花。誰かの足跡。

明け方に見た夢。

――会いたい。

『レンはもちろん最初から、その声を聞いていたはずなんだ。なんでアタシらに黙っていたのかは、わからないけどね』

受話器を置いても、まだドキドキしていた。

（何だろう）

あの夢。どうしてあんな夢を見たのだったか。

（確か、アカネの『お話』を聞いて……）

太一は足早に電話ボックスを出た。

3

「ああ、困る困るぅ。ほんに困っておりまするぅ」
そう言ってはらはらと涙をこぼしているのは、絹や綾の絢爛たる衣を身に纏った美女である。髪を高く結い上げて、まるで大昔の女官のような格好だ。
美女は薄絹の袂を目に押しあてながら、
「このままでは月の船は出ず、船が出なければ妾は宮には帰れませぬ。ああ、困るぅ」
「いや、困っとるのはようわかったから」
泣いている美女を前にして、ミヨシはげっそりとため息をついた。
「俺が訊いとるのは、空栗荘の大家に恨みやら不満やらもっとるヤツを知らんかてことなんやけど」
「あああ、困るぅ。今宵、月の宮に出仕しなければ、妾は叱られてしまいまするぅ」
「せやからな」
「困る困るぅ。ほんに困っておりまするぅ」
さっきからこの繰り返しである。

彼女の名は玉兎。月に仕える妖かしだ。髪は白銀、肌は塩のように白く、瞳のない目はルビーのように赤い。

リストにあった住所を訪ねてみれば、そこは時代劇に出てくるような長屋の一部屋で、戸を開けたらこの妖かしが「夕暮れのままでは月に帰れない」と言ってしくしく泣いていた。

「大家が目ぇ覚ませば夜になって、月もちゃんと昇るから、な？」

慰めてみても、耳を貸そうともせずに「困る困る」と言うばかり。

「ええ加減にせい！　泣いとっても仕方ないやろ！」

ついにミヨシはキレた。

玉兎はびくっと身体を強張らせると、次の瞬間、畳の上にわっと泣き伏した。

「こわい～」

「何がや」

「顔があ～」

「うー」

長屋の戸が開いて、古都子が顔をのぞかせた。

「ちょっとミヨシ。妖かしを泣かせてどうするのよ」

「俺か？　俺のせいなんか？」

「どう見ても、あんたが泣かせたようにしか見えないでしょ」

ここで情報を得ることは無理そうなので、二人は泣くことを楽しんでいる玉兎を残し、長屋をあとにした。

「そっちはどうやった？」

赤い夕焼け空の下、シャッターや雨戸がぴたりと閉ざされた商店街を歩きながら、ミヨシは早くもうんざりしたように肩をすくめた。

今日は休日なので、八百屋も乾物屋も肉屋もタバコ屋も自転車屋も、とにかく店という店はすべて休みである。そのへん、妖怪たちは稼ぎに執着していない。

舗装されていない、土と砂利を踏み固めただけの道はしんとして、動いているのはそこを歩く二人の人間の影だけだ。

「シオマネキにあたってみたけど、心当たりはないそうよ」

「そらま、カニが人間に取り憑くとも思えへんしなぁ」

シオマネキはカニが数百年も年経て、妖怪になったものだ。見た目はカニそのまま、ただし大きさは『かに道楽』の看板ほどもある。年寄りなだけあって、物知りだが偏屈だ。

「怨恨がらみならいっそ、平家ガニにでも聞いたらええんとちゃうか」

「んー、悪いけど壇ノ浦の恨みつらみまで聞かされたくないわね」

古都子はリストに目をやった。

「この近所にまだ誰かおるか？」

「うん。兎角がいるわ。この先の駄菓子屋」
兎に角が生えているから兎角。『ありえない』ものの喩えでもある妖怪だ。
とその時、古都子の携帯電話が鳴った。
「あ、お露さん。……うん。……うん、そう……なるほどね。……わかった。ミヨシに伝えるわ」
「何やて？」
携帯を切った古都子に、ミヨシが訊ねる。
「レンは今日、お店に行ってないんですって」
「へぇ」
「やっぱり、気がついていた？」
ミヨシは不機嫌な顔で、自分の足下の影に目をやった。
「あいつがもうちょっと上手な嘘をつけるヤツやったら、心配はせえへんやろ」
そうね、と古都子はため息をつく。
「太一君があとを追っているらしいわよ。それで、ミヨシに一度空栗荘に戻ってほしいって、お露さんが」
「今すぐか？　おまえはどうするねん」
「私は大丈夫よ。こっちには顔なじみも多いし。それより、もし何かあったら太一君一人じゃ

対処できないでしょ」
　ミヨシは渋々うなずいた。
「あの彼岸花なぁ、とりあえず妖気は感じられへんかったから後回しでええかと思うたけど、そうもいかんかったみたいやな」
「結界が緩んでいるから、誰が境界を越えて行ったとしても不思議はないけど」
　古都子は肩をすくめる。
「ミヨシも見たでしょ。狢が言っていたとおり、本当に誰かが坂道をのぼってきたみたいに、空栗荘までずっと花が咲いていたわ。――多分、その誰かが通り過ぎたあとに念が残ってしまったせいだと思う」
「境界越えをしたヤツを、先に封じるか祓うかせなあかんわけか」
「凶悪な相手ではないと思うけどね。もし危険なら、レンだって私たちに言ったはずだもの」
　それがよけい問題なんや、とミヨシは呟いた。
「ほな、あとはまかせるわ」
「ええ」
　ミヨシは踵を返すと、空栗荘にむかって一散に駆けだした。

（確か、大通りとは逆の方角に咲いていたから……）

空栗荘の近くまで戻って、もう一度彼岸花を見つけた。太一は、その赤い色を目で追いながら、足を速めた。

花はまるで迷っているみたいにジグザグに角を曲がったり、大きく回り道をしたり、別の道を来た方角に戻っていったりした。車道を横切って車のタイヤに潰されてしまっていることもあれば、時に四つ角で方角が交差していることもあって、追いかけていくのはけっこう大変だった。

見失うたびに探し回って、ずいぶん歩いた気がする。

そうしていい加減、くたびれた頃——。

角を曲がったとたん、目の前に、波のようにうねる赤い色が広がった。

「すごい」

思わず、声が出た。

そこは公共のグラウンドのようだ。緑色の金網に囲われた土だけの敷地に、これでもかというほど彼岸花が咲き誇っている。

九月の、正午近くの日射しの下にあふれた、息を呑むほど鮮烈な紅。

(ここ、どこだろう)

近くの電柱にかかれた番地を確認すると、もう町の端まできていた。

どうしようかと太一は思う。

もし町の外まで咲いているようなら、どっちの方角にむかっているかだけ確認して戻るようにとお露さんに言われている。

しかしこんなに咲いていると、この先は花がどこに向かってつづいているのか、見ただけではよくわからない。

「……あ」

その時、彼岸花の中で何かが動いた。

金網の内側、グラウンドのベンチにレンが腰を下ろしている。

「レンさん」

入り口を探して中に入ると、彼岸花を踏み分けて、太一はベンチに近寄った。

レンは身体を二つに折って、膝の上に突っ伏すようにしている。寝ているのかと一瞬思ったけれども、よく見ると背中が大きく上下して、荒い息づかいが聞こえた。

「具合、悪いんですか？」

隣に座って、太一は彼をのぞきこんだ。

レンは少しだけ頭をもちあげた。いつも優しげに笑っている顔が、苦しそうだった。額に汗を浮かべて、顔色もひどく悪い。

太一を見て、何か呟いた。

「え？」

「……どうして、ここにいるの？」

それは、と太一は口ごもる。

「店に行ったら、レンさんがいなくて……あの、これを買いに行ったんですけど。そしたら、お露さんが彼岸花がどこまでつづいているか見て来いって……」

それまでずっと握りしめていたせいで少々ぐったりしてしまった七草の束を見せると、レンはまた自分の腕に額を押しつけた。

「そう。……やっぱり、バレてるんだ」

「どうしてバイトに行くなんて、嘘をついたんですか？」

そうじゃない。そんなことは、今はどうでもいい。

「だ、大丈夫ですか？」

マヌケだ。大丈夫じゃないから、こうなっているのに。

（何を言えば……っていうか、こういう時はどうすれば）

救急車を呼ぶ？　それとも空栗荘に連絡したほうがいいんだろうか。太一はあたりを見回したが、グラウンドの近くに公衆電話はなかった。

「……痛い。すごく、痛いんだ」

「どこが⁉」

いっそう身体を縮めるようにして、レンは胸のあたりを摑んでいる。

「ここまで来たのに……先に行けない。道がわからない。だから、すごく……悲しんでいる。ずっと、探していたのに……会いたいのに」

太一はまた、ドキリとした。

――会いたい。早く会いたい。

「彼岸花がそう言ってるんですか？」

「……うん」

小さく立った風に、赤い花が揺れている。波がこちらに打ち寄せるように、花弁を幾重にもうねらせている。

（ここから離れないと）

なぜか、そう思った。

「レンさん、あの――」

太一はレンに手を伸ばそうとして。

途中で、凍りついたように動きを止めた。

――触らないで。

――あんた誰？　あんたなんか知らない。

目の前の丸められた背中が、あの日の母親のそれと重なった。

（怖い）

空栗荘に来てから、他人に手を差し伸べることを覚えた。自分からなら、人に触れることができるのだとわかった。でも。

（……怖い）

触れることが怖い。触れられることが怖い。

何年も前の、冷たい手で胃袋をぎりぎりと握り潰されるようなあの恐怖を、太一は今になって思い出してしまった。

なぜだろう。目の前のこの人と、彼の母親は全然違うはずなのに。その背中がどちらも頑なに、何かを寄せつけまいとしているようで。

もしまた、突き飛ばされたら。伸ばした手を振り払われたら。

拒絶されたら、どうしよう。

宙に浮かしたままの手を、太一は握り込む。

「う……」

レンの背中が震えた。

それが本当に苦しそうで、太一は息をつめた。

そのとたん。突然——まったく唐突に、思った。

拒絶されたってかまわないじゃないか。だって、この人は今、こんなに辛そうなんだから。

あの時みたいに突き飛ばされたって振り払われたって、もう一度手を伸ばせばいいだけのこ

とだ。
何度だって、手を伸ばせば。
「あの」
太一は突っ伏したままのレンの肩に、手を置いた。
「……ありがとう」
くぐもった声が聞こえた。レンが漏らした言葉に、太一は首を傾げた。
「そばにいてくれて、ありがとう」
「え……？」
「頭がヘンだとか気味が悪いとか、嘘つきだとか言わないでくれて、ありがとう」
太一は戸惑う。
「そんなこと……」
これまで誰かが、そんなことを言ったのだろうか？
（頭がおかしいヤツとか思わないの？）
以前にレンと交わした会話を思い出した。自分は樹と話ができると打ち明けたあとに、レンがつづけた言葉。
花屋さんには役に立つ特技だと太一が答えると、レンはちょっと不思議そうな顔をしてから、笑っていた。

きっと言われていたのだろう。植物と話なんかできるわけがない。頭がおかしい、気味が悪いと。誰かに。……大勢に。

きゅっと胸の中で、何かが音をたてたような気がした。

太一は歯を食いしばった。

「ここを出ますよ。立てますか?」

レンの腕を摑んで、そのまま自分の肩に回した。大丈夫かどうか確かめながら、そっと力をこめる。レンは片手で胸を摑んだまま、太一の動きにひきずられるように立ち上がった。

小柄なのはわかっていたが、びっくりするほど軽い身体だった。熱があるのかもしれない。密着した肌が熱(ほて)っていた。

絡(から)みつくような彼岸花を膝でかきわけながら、太一はレンを支えてゆっくりと歩いた。

(どこか、日陰の涼しいところ。それで、できるだけここから離れなきゃ。……それから)

だが、どうにかグラウンドから引っ張り出したものの、レンはすぐに道ばたの塀にもたれて座り込んでしまった。

「ごめん。……ここでいいよ」

太一はもう一度、周囲を見回した。あたりは奇妙なくらい静かで、道行く人影もない。

一瞬迷ってから太一は、なけなしの勇気を振り絞ることにした。

すぐそばの、知らない家の玄関先に走って、深呼吸してからチャイムを押した。心臓がすご

い音をたてている。
どちらさま、とインターホンから聞こえた女性の声に、
「あの、すみませんっ」
ほとんど叫ぶように、言った。
「お願いします！　電話を貸してください！」

空栗荘に電話をして場所を伝えると、すぐにミヨシが車で駆けつけてきた。
運転席から降りて、道ばたに座り込んでいるレンを一目見るなり、
「何しとるんや、アホ！」
怒った声で言って、ミヨシは彼を抱え上げると後ろの座席に押し込んだ。
「これ、ミヨシさんの車ですか？」
太一もレンの隣に乗り込む。
「大家のや」
「……あの人、免許持ってたんだ……」
「運転しとるとこは、見たことないけどな」
ミヨシは乱暴にドアを閉めると、車を発進させた。
すみません、とレンが小さな声で運転席に言った。

「僕は……面倒ばかりかけて」
「ほんまにな」
いっそう不機嫌なミヨシの声である。
あれ、と太一は首を傾げた。
「でもミヨシさんは、古都子さんと一緒に妖怪たちの町のほうに行ってたんじゃ……？」
「うるさい。たまたま昼飯を食いに空栗荘に戻ったら、おまえから電話があったんや！」
「はあ」
怒鳴ることないのに。太一は思う。
花を追っていた時にはずいぶん遠く感じられた空栗荘までの距離が、車ならあっという間だった。
前庭の一面に群れ咲く彼岸花にはおかまいなしに、ミヨシは門の中に車を乗り入れると、玄関脇に止めた。
「太一、先に行ってお露さんに知らせてこい」
「はい」
だが太一が玄関に駆け込むと、お露さんはもう上がり口に立っていて、「お帰り」と素っ気なく言った。
「部屋に布団を敷いてあるから、そのまま寝かせてやりな」

と、これはすぐにあとからレンを両手で抱えて入ってきたミヨシへの科白だ。
「氷とタオルも頼むわ。熱があるさかい」
「あいよ」
慌ただしくレンを部屋に運ぶミヨシを見送って、
「ご苦労さん」
お露さんは太一に言った。
「あの、これ」
太一は頼まれていた七草と、預かっていたがま口をお露さんに渡した。七草はもうすっかり萎れてしまっていたが、お露さんは何も言わずに受け取った。
「すみません。米粉を買うのを忘れてしまって」
「ああ、それはいいさ。さっき見たら、棚の奥に買い置きが見つかったんでね」
「……はあ」
太一はちょっと首を息を詰めてから、
「レンさんは大丈夫なんですか？」
「なに、少し休めばよくなるだろうよ。ちょっと無理をしただけだ」
「無理って？」
ぼーん、とその時、階段の脇の振り子時計が、午後の一時を告げた。

「おや、もうこんな時間だ。お昼にしないとね。少し遅くなっちまったから、おむすびにしようか。——あんた、握り飯はつくれるかい？」

「あ、はい」

太一の質問をあっさり無視して、お露さんは「おいで」と顎をしゃくると、食堂にむかった。

洗面器いっぱいの氷とタオルと、冷たい飲み物をレンの部屋に届けたあと、お露さんは厨房で昼食の支度にかかった。

炊きたてのご飯はお櫃に移して少し冷ます。お握りの中身は梅干しと青じその実の佃煮と鮭だ。

「ツナマヨはないんですか？」

「イヤだよ、アタシはそういう今様のもんは嫌いでね。——それより、そこのエプロンをして、手はきれいに洗うんだよ」

太一が言われたとおりにしている間に、お露さんは掌に適当に塩をつけて、きゅきゅっと握り飯をこさえはじめた。さすがに手際よく、つやつやの三角形のお握りがあっという間にできあがる。

鈴子が家に来るまでは父親と二人暮らしだったので、握り飯くらい太一もつくったことがある。だが、

「デカいのはいいとして、なんでそんなにまん丸なんだい？」
太一が皿に置いたボールみたいな握り飯を見て、お露さんはちょっと呆れたふうだ。
「すみません、俺、三角とか俵型とかできなくて……」
「やれやれ。おむすびってのは、基本は三角って決まってるんだけどね。まあ、心をこめて握るなら、何でもいいさ。……あんた、おむすびって言葉の意味を知ってるかい？」
「意味なんてあるんですか？」
「あるとも。結ぶっていう言霊からきているんだ」
「コトダマ？」
「言葉の持つ力さ。相手と縁を結ぶ、絆を結ぶ、手を結ぶ……。手でそうやって握ることで心がこもる。一種の呪いみたいなもんかねえ。相手のことを想って握るから、美味しくなるんだよ。わかったかい？」
「……」
太一は手の中で丸めていた握り飯を見た。おむすびにそんな意味があるなんて、考えたこともなかった。
「わかったら、握り飯はあんたにまかせたよ。アタシは何かおかずをつくるから。ふん、だし巻き卵とジャガイモの冷たいスープをつければ上出来だろ。——ああそうだ、レンのことだけれどもね」

お露さんは鍋を取り出しながら、どうでもいいついでのことのように言った。
「あの子は樹や花と話をする。植物にだって意識も意思もあるからね。レンはある種の感応力が鋭いというか、普通の人間にはわからないものまで感じとる力があるんだろう。よほど耳のいい人間が、他人のちょっとした独り言まで聞こえてしまうようなものさ。で、それが裏目に出ちまって」
「裏目って」
「他人の心の痛みまで感じとっちまうんだよ」
「……心の痛み……？」
先にスープで煮てあったジャガイモとタマネギを、牛乳と一緒にミキサーにかけながら、お露さんは小さく鼻を鳴らした。
「辛いとか悲しいとか苦しいとか、そういう想いさ。よく、他人の痛みがわかるっていうだろう？　でもそれは、そういう想像ができるっていう話だ。レンの場合は、近くにいる人間のそういう感情が、そのまま本当に自分の痛みになっちまうんだよ。そこにいるのが見ず知らずの人間だろうとね」
太一は手を動かしながら、お露さんを見つめた。
「どんな人間でも、心にかけらも痛みのない者なんていやしない。だからレンは、人の多い場所にはいられない。今日みたいなことになっちまうからね。――それでもまあ、ここへ来て

からは、幾分マシになったはずだけども」
「……そうなんですか？」
「大家が暗示か何かをかけたんじゃなかったかね。術って言い方もできるけれど。とりあえず、賽河原町にいて普段生活しているぶんには、あまり痛みを感じずにすむらしい」
賽河原町にいる間は。
（ああ、そういうことなんだ）
――レン君は大丈夫ですよ。
花屋の奥さんが言っていたのは、きっとその意味だ。
「ここへ来る前は、レンさんはどうしていたんですか？」
「さあ」
と素っ気なく答えて、お露さんは鍋に戻して調味料を加えたスープを、味見をしてから冷蔵庫にいれた。
「ずいぶん難儀していたんじゃないかね」
（……痛い。すごく、痛いんだ）
グラウンドで、レンは自分の胸を摑んで苦しんでいた。彼岸花に囲まれて。たとえば誰かの悲しい気持ちは、あんなふうにレンにとっては本当に「痛い」ものになってしまうのだろうか。
「俺、レンさんにありがとうって……」

「ふぅん？」
「そばにいてくれてありがとうって、言われました」
お露さんはちょっと黙ってから、そうかいと呟いた。
「あの子が。珍しいね」
心臓のあたりが、きゅうっと痛かった。
（こういう痛みなのかな）
きっと。これよりも何倍も痛い。
でも、どうしてだろう。太一は戸惑う。べつに彼自身が悲しいわけでも、辛いわけでもないのに。
（……よかった）
やはり自分ではよくわからないまま、そんなことを思う。
あの時レンに手を伸ばして触れることができて、よかった。
拒絶されることを怖れるのではなく、拒絶されてもいいのだと、そう思えてよかった。
そして、太一は初めて思った。
――お母さん？
――触らないで。
母親のその言葉を聞いた時。

もう一度、手を伸ばしていれば、何かが違っていたのだろうか。
九歳のあの頃の自分ではなく、今なら。
もしかしたら……。
きゅうっとふたたび、胸が痛くなる。
「ちょっとあんた、そんなに力をいれて握ったら、おむすびじゃなくて団子に――」
だし巻き卵を焼きながら、お露さんは太一の手元に目をやって顔をしかめたが、途中で言葉を切った。
それから、ぽつりと口調を変えて言った。
「何もあんたが泣くことじゃないだろう」
言われて初めて、太一は自分の頬を落ちていくものに気がついた。
母親が家にいた頃からすでに、泣くことなんて忘れていたのに。
おむすびを握りながら、Tシャツの肩口で何度顔をこすっても、涙があふれて止まらなかった。

4

駄菓子屋は、すぐに見つかった。古ぼけた看板には、『一銭玩具屋』とはげかけたペンキで

描かれている。

鍵のかかったガラス戸に、本日休業の札がかかっていた。

古都子は指でコンコンとガラスを叩いた。

すぐに中で物音がして、内側のカーテンが開いた。ずんぐりと太った浴衣姿の兎が、顔をのぞかせる。毛皮は茶色、目の色は黒。背丈は人間の大人ほどあるが、一番変わっているのは長い両耳の間に角が一本生えていることだった。

「今日は休み。明日来るがよろし」

古都子を見て、兎角は言った。

「休んでいるところをごめんなさい。ちょっと訊きたいことがあるの。……空栗荘の主に関係することで、急いでいるものだから」

兎角は鼻先をもごもごと動かしていたが、表情のよくわからない顔で鍵を外すとガラス戸を引き開けた。

「入るがよろし」

「ありがとう」

薄暗く小さな店内には、色とりどりの玩具や駄菓子がところせましと並べられていた。天井からは大小の凧や縄跳びの紐や、布と割り箸でつくった模型飛行機がぶらさがっている。土間のガラスケースの中にはラムネ菓子や砂糖菓子、棒つきの飴などが詰めこまれ、大きなガラス

瓶の中に入っているのは七色のビー玉と煎餅とゼリービーンズだ。
兎角は一個だけぶらさがっている裸電球を灯すと、一度奥に引っ込んだ。すぐに姿を見せて、上がり口に腰を下ろした古都子に飲み物をすすめた。
「フルーツ牛乳、飲むか」
「ええ。いただきます」
「訊きたいことを訊くがよろし」
針金で器用に牛乳瓶の紙のフタをとって古都子に渡すと、兎角は玩具や菓子の中に埋もれるように座った。
「空栗荘の主がずっと眠ったままだということは、もう知っていると思うけど」
古都子はガラス戸のむこうの夕焼けに、ちらと目をやって言った。
妖怪はうなずく。
「どうも何かに憑かれているせいらしいの。それで、心当たりがないかと思って。相手に取り憑いて眠らせてしまう妖怪っているかしら?」
兎角はまた、鼻先をもごもごさせた。
「どうして心当たりがあると思う」
「気を悪くしないでね。空栗荘の主に取り憑くなんてこと、妖怪でもめったにできることじゃないわ。でもこの時期に、月と縁のあるモノは妖力が増しているから、もしかしたらと思っ

たの」
「月に縁があればなおのこと、月が出ないでは困る」
「それはそうね」
「秋分は、昼と夜とが半分ずつ。なのにいつまでもどっちつかずの夕暮れでは困る」
「うん」
「賽河原町にいる妖怪は、空栗荘の主に悪さはしない。人間が妖怪に悪さをしないよう、あの人がいないでは困る」
古都子は相手を束の間見つめて、ニッコリした。
「……うん。そうね」
「見せるがよろし」
兎角は手というか、前肢を出して古都子からリストを受け取り、眺めた。
「しかし、賽河原町の住人でなければ、悪さはするかもしれない」
「よそから来た妖怪ってこと？　そうすると住民登録はしていないから、このリストには載っていないってことになるわね」
リストを古都子に返して、妖怪はうなずいた。
「旅人とか浮浪者とか、そういう妖怪を見たことある？」
「ない」



そっか、と古都子はため息をついた。

「せっかく狢に骨を折ってもらったのに、振り出しに戻っちゃった。もう一度町に出て、情報を集めないと」

兎角は玩具の中から紙の箱を取り上げて、古都子の前に突き出した。箱には『点数おみくじ』と書いてある。

「ひくがよろし」

「う、うん」

言われたとおりに古都子が箱からおみくじをつまみあげ、細長い紙を広げると、そこには緑色の字で『沼地へ行って笑え。3点』とあった。

「うわぁ、3点てすごく微妙」

「景品を受け取るがよろし」

兎角は薄荷飴をみっつ、ガラスケースから取り出すと、わら半紙で作った袋に入れて彼女に渡した。

「どうも。——そうだ、あと菓子パンはあるかしら。お昼ご飯を食べている暇がなかったから、お腹がぺこぺこなの。それと、甘くない飲み物。ウーロン茶か何かあれば嬉しいんだけど」

妖怪はうなずいてまた店の奥に姿を消すと、袋に入ったあんパンとメロンパン、それに缶入りのウーロン茶を持って来た。

「せっかくだから、そこの兎のかたちをした型抜きラムネと、キャラメルももらうわね。いくら？」

古都子はお金を払い、品物を持って立ち上がった。

「それじゃあ。お休みなのに、邪魔しちゃってごめんなさい。いろいろ、本当にありがとう」

兎角は長い耳をぴるぴるっと震わせると、古都子を見送って言った。

「また来るがよろし」

店を出ると、古都子は携帯電話を取り出した。けれどもすぐに、

「こういう時にかぎって圏外なのよね」

肩をすくめて呟くと、それをベルトからさげたケースにつっこんだ。

こちらの世界にいて、いつも空栗荘と電話が繋がるとはかぎらない。気まぐれに通じたり通じなかったり、確率は半々といったところだ。

商店街をあとにしてしばらく歩いて行くと、坂道に刻まれた石段があった。

「リストが役に立たないとなると、どうしようかな」

休憩をとることにして石段に腰を下ろし、兎角から買ったパンを食べながら、古都子は考え込む。

ウーロン茶のプルトップを引き開けた時、すぐ近くでバサっと羽を打つ音がした。

「あら、クロ爺」
傍らの塀の上にカラスが舞い降りた。古都子を見下ろし、気むずかしく首を傾げるような仕草を見せて、
「少しは進展はあったかの」
「それが残念ながら」
今朝からの経緯をクロ爺に話すと、古都子は食べ終えたパンの袋を丸めて、小さな手提げに突っ込んだ。そうしてため息まじりに、膝の上に頬杖をついた。
「ミヨシはすっ飛んで行ったままだし、こうなったら工房の仲間たちに頼んで人海戦術、じゃなくて妖海戦術で情報収集するしかないかもね。——クロ爺はこの町にいるよそ者の噂なんて、聞いたことない？」
まったく期待せずにした質問だったが、
「ふむ。よそ者ならば一人、知っておるよ」
クロ爺がすまして答えたので、古都子は思わず頬杖から顔をあげた。
「どこにいるの？」
「町外れに沼があって、そのほとりの掘っ立て小屋に住んでおる。昨年から見かけるようになったのぅ。どこから来たかは知らんが」
「——」

古都子はちょっと黙り込んでから、先ほど兎角の店でひいた点数おみくじをジーパンのポケットから引っ張り出した。呆れたようにため息をつく。
「沼地へ行って笑え、か。……なるほどね」
「なんじゃい」
「ううん、なんでもない。それより、そのよそ者ってどんな妖怪？」
「それが、わしにもよくわからん。ずいぶんと気の薄いヤツでな。人間の姿をしておったが、ぼんやりとまるで薄っぺらい影のようじゃった。あれでは妖力など、ほとんどなかろう」
「同じ妖怪でも、相手の正体が全然わからないことってあるの？」
「当然じゃよ」
カラスはやれやれとばかりに、首を振った。
「人間だとて同じじゃろ。それなりに気心が知れなければ、見た目ばかりで相手の本性がわかるものかの？」
「ごめん。……言われてみればそうね」
古都子はうなずいた。
「だったらなおさら確かめてみなくちゃ。クロ爺、悪いけどその沼まで案内してもらえる？」
「それはかまわんが」
クロ爺はふいっと頭を傾げた。

「あやつに、柊二郎に取り憑くような大それた真似ができるとは思えんがの。あのように力が弱ければ土台無理、それどころか空栗荘に近づくことさえできんだろう。柊二郎はむろんのこと、十遠見やミヨシ坊のように強い気を持つ人間のそばに寄るだけで消えてしまいかねん。行くだけ無駄じゃあないかね」

「かまわないわ」

古都子は石段から立ち上がると、クロ爺を見上げて言った。

「違うなら違うってことをハッキリさせないと。どっちにしても、今手に入った情報はこれだけなんだから、無駄ってことはないわよ」

「まったく、柊二郎にも困ったものよ」

クロ爺は人間が肩をすくめるのとそっくりな仕草をすると、ばさっと翼を広げた。

「これほど面倒の多い境界守は初めてじゃ。――ほれ、急ぐぞ。町外れまではけっこう遠いでな」

赤く染まった空に吸い込まれるように飛び上がったカラスを追って、古都子は足下に夕暮れの長い影を引きながら、走り出した。

一方、こちらは空栗荘である。

太一がお露さんを手伝ってテーブルに握り飯やだし巻き卵を盛った大皿を運んでいると、十

遠見が食堂に入ってきた。
白い道場着のような服に白い袴をつけている。太一が初めて目にする格好だ。当然ではあるが、ホルスタイン柄のパジャマや、スーツにエプロン姿よりは、はるかにサマになっている。
「何かあったのか？　さっきミヨシが騒ぐ声が聞こえたが」
「レンが倒れたんだよ」
スープの入った鍋をどんっとテーブルの上に置いて、お露さんは答えた。
十遠見はちょっと間をおいて「なるほど」と呟く。
「そっちはどうだい。何かわかったのかねえ？」
「呪符や呪言を使っていろいろ試しているが、今のところ成果はない。人と植物と道具類の系列でないことだけはわかったが、妖怪というのは本来、カテゴリーで括れるモノのほうが少ないからな」
要するに大家に取り憑いた妖怪の正体は、まださっぱりわからない、ということだ。
疲れているのだろう。ちょっとうんざりしたような顔で、十遠見はテーブルについた。
皿の上に山積みになっている握り飯をひとつ手にとり、今度はそれが珍妙なものであるかのように、まじまじと見た。
「お露さんにしては珍しいものを。バクダンか？」
「いえ、あの、お握りです……」

先にお握りを頬張っていた太一は、もぐもぐと口ごもって言った。
「この子がこさえたんだよ」
お露さんはマグカップにジャガイモのスープをつぐと、パセリのみじん切りを彩りに散らして太一と十遠見の前に置いた。
「お握りなのは見てわかる。こんなふうにデカくて丸くて海苔で真っ黒に包んである握り飯をバクダンと言うんだ。覚えておきたまえ」
(爆弾……?)
それは知らなかった。
十遠見にはさりげなく、いろいろ教わっている気がする。エビフライの尻尾は食べられるので残してはいけないとか。
と、食堂の戸を乱暴に開けて、ミヨシが入ってきた。
「うあぁ、腹へった!」
どすんと腰を下ろすなり、握り飯を摑んで大口で噛りつく。
「レンの具合はどうなんだい?」
お露さんが最初の声をかけた時には、ミヨシはすでにふたつめを手にしていた。
「今は寝とる。けど熱もさがったし、もう心配はいらんやろ」
「何か言っていたかね?」

「心配かけたことを、謝っとったで。特に太一、おまえにすまんかったて」
「いえ、……べつに」
こういう時、自分でも素っ気ないと思う言葉でしか、太一は反応できない。
お露さんは小さく鼻を鳴らした。
「どうでもいいけどあんた、もうちょっと落ち着いて食べられないのかい？　餓鬼じゃあるまいし」
というのも、ミヨシが握り飯を口に押し込んだあと、スープを一気飲みしながらだし巻き卵を箸でつまみ上げたからだ。
その食べっぷりに見惚れるの半分、呆れるの半分で太一が眺めていると、十遠見が「ごちそうさま」とカップをテーブルに置いた。
「なんだね、十遠見。あんたはあんたで、ほとんど食べてないじゃないか。握り飯いっこで足りるのかい？」
「いや、これでもう十分だ。時間がもったいないので、失礼してオーナーのところに戻ることにする」
腰を浮かした彼に対して、
「度量も小さいけど、胃袋も小さいやっちゃな、十遠見」
みっつめの握り飯を頬張りながら、ミヨシが憎まれ口を叩く。

「……おまえのがっつきを見ていたら、食欲が失せたんだ」
十遠見はじろりとメガネの奥からミヨシを睨んだ。
「まったく燃費の悪い男だな。CO2の排出量が他人より多いんじゃないか？」
「なんやねん。俺が地球温暖化を促進しとるんかい」
「地球に優しくないことは事実だ」
（この人たちって、ケンカする理由は何でもいいんだな……）
だし巻き卵を食べながら、どうしてこの二人は仲がよくないんだろうなと太一は思う。どっちも二十代のいい年をした大人なのに、しょっちゅう子供みたいなケンカをしている。
で、わけのわからない言い合いのあと、十遠見は食堂を出ていった。時間がもったいないというのは本音らしく、大家に取り憑いたモノの正体がなかなかわからないので、彼にしては焦っているようだ。
ミヨシのほうも、
「ごちそうさん」
すごい勢いで食べ物を胃におさめて、テーブルの上のポットから湯呑みに麦茶をそそいで飲み干すと、ぱんっと手を合わせた。
「まったくせわしない男だよ」
「俺かて急いどるんや。あの彼岸花のヤツを、早いとこどうにかせなあかんからな。死霊か妖

怪か他の魔性かは知らへんけど、このまま放っておくわけにはいかんし。幸い居場所の見当がついたところで、とっとと片付けるにこしたことはないやろ」
「どうしてレンはそいつを追ってたんだい？」
お露さんは自分の湯呑みにも麦茶をついで、一口飲んだ。
「同情や。レンの悪いクセやな」
さっき部屋でレンに付き添っている間に、聞き出したらしい。ミヨシはちっと舌打ちした。
「なるほど。あの子が同情するような相手なわけだ。――そりゃやっかいだねえ」
「アホくさ。境界を越えたもんを一匹片付けるくらい、どこがやっかいやねん」
「そりゃ、封じるだけなら簡単だろうよ」
ずずっとまた、茶をすする音が響く。
「問題はあんたの欠点が、どうしようもなくお節介焼きな人間だってことさ」
ミヨシはなんとも渋い顔でお露さんを睨んだが、すぐに不機嫌に声を漏らした。
「……そいつは、誰かを探しとるらしい。その誰かのために、境界を越えたんや」
「そうみたいだね。けどなんだってまた、レンは最初に本当のことを言わなかったんだろうねえ。アタシらに黙って、一人でそいつを追いかけようなんてさ」
「優先順位から言えば大家の目を覚まさせるのが先決やから、俺らの手をわずらわせるわけにはいかんて思うたのが、ひとつ。――もうひとつの理由は、俺や十遠見に言うたら、そいつ

が相手を探し出して会う前に、祓われてまうかもしれへんと思うたからやな」
「そりゃあ、あんたはうっかりで相手を祓っちまうことがあるからね」
ミヨシが力のコントロールができないことを揶揄して、お露さんがいささか意地の悪い笑みを見せる。
「そらほんまに、うっかりしただけなんやっ」
「ふん。ま、あんたにしろ十遠見にしろ、異形だってだけで問答無用で祓うなり殺すなりするほど、バカな人間じゃないってことはわかっているよ」
お露さんは真顔に戻ると、ちょっと考え込んだ。
「つまりレンにしてみれば、せめてそいつが願いを叶えるまでは待ってやってほしいというわけだ」
「せやから同情やて言うたやろ」
ミヨシはいっそう不機嫌に言った。
「けど俺らに嘘をついて知らん顔はでけへんし、せめて正体だけでも確かめられるものなら確かめようと思うて、一人で行ったんやな。そのあげくに、そいつの念やら想いみたいなやつが強烈すぎて、ああしてぶっ倒れとるんやから世話ないわ」
「で、どうする気だい？」
「何が」

「だから言ったろ。あんたはお節介な人間だ。おまけにレンの気持ちもわかっちまっている。――大方、そいつの望みを叶えさせてやるつもりなんだろう？」

ニヤリと笑ったお露さんを見て、ミヨシは歯ぎしりするような顔をしていたが、やがてそっぽをむいて呟いた。

「……クソ婆」

「あ？　なんだって？」

「なんでもないわ。ほな、行ってくる」

ミヨシが立ち上がったので、太一も慌てて腰をあげた。

「あの、俺も行っていいですか」

お露さんとミヨシが、そろって彼を見た。

「おまえもか？　うーん」

危険なことはないやろうけど、とミヨシは首をひねった。

「でも、なんでや」

「えっと……」

彼岸花の足跡を残していった相手のことがもちろん気になるからだし、途中まで関わってしまったような気がするし、レンのさっきの様子を見てしまったらもっと何かしなきゃいけないようにも思う。何もできないかもしれないけれども。

何より、ここで彼だけが関係ないと思われてしまうのが、イヤだった。
そういったことを伝えようとして、太一は言葉につまって、思わず、
「俺、他にすることなくて……」
全然伝わらないことを言ってしまった。
ミヨシはがしがしと頭をかくと、肩をすくめた。
「まあ、ええやろ。来い」
「はい！」
しかし。さっさと踵を返したミヨシを、追いかけようとしたとたん、
「うわ⁉」
ぐいっと足を掴まれて、太一は畳の上にうつ伏せにすっ転んだ。
「いたた」
「たーいち！」
なんと、アカネが両手で彼の片足にしっかりとしがみついていた。毎度のことながら神出鬼没だ。
「アカネも行く！」
振り向いたミヨシが、「こら」とアカネを睨んだ。
「ほんまにもう、ちょこまかと。おまえは留守番や」

「やだもん！　ミヨシの意地悪！」
あっかんべーと付喪の少女は、小憎らしく舌を出す。
「ダメだよ、アカネ。外には連れて行けないって――」
どうにか身体を起こした太一が、困ってそう言いかけたところに、
「連れてお行き」
お露さんが割り込んだ。
「え、でも」
「今日だけ特別だ。危険はなさそうな相手でも、正体がまだわからないんじゃ、万が一何が起こらないともかぎらないからね」
お露さんは茶を一口飲んでから、
「太一。あんたはまだ、こういうことの怖さがよくわかっていない。アカネがそばにいたほうが安心だ」
ただし、とアカネを見てつけ加えた。
「一緒に行きたけりゃ、人形に戻りな。遊びじゃないんだから」
「はーい」
お許しが出たのがよほど嬉しかったのか、アカネは素直にうなずく。
次の瞬間には、ことんと音をたてて、畳の上で市松人形に戻っていた。

「はよせい。ぐずぐずしとったら、おいてくで」
ミヨシは苦虫を噛み潰したような顔で、すたすたと食堂を出て行く。太一は人形のアカネを抱き上げると、お露さんに「行ってきます」と言って、急いでミヨシのあとにつづいた。

「車で行かないんですか？」
ミヨシが空栗荘の門を出てそのまま歩いて行くので、太一は不思議に思って訊ねた。目的地はきっとさっきのグラウンドだ。彼岸花の足跡は、あそこで止まっていたのだから。
（場所がわかっているんだから、車のほうが早いのに）
首を傾げながら、太一は背中のリュックサックをよいしょと背負いなおす。リュックの中には人形のアカネが入っている。まさか人形を腕に抱いていくわけにもいかないので——高校生の男子がそんなことをしていたら、いくらなんでもヤバいだろう——アカネを外に連れ出すにはこうするしかない。
「歩いて行かな、追いつくことはでけへん」
彼岸花をたどって、太一の前を歩きながら、ミヨシはよくわからないことを言った。
「よう見てみ。真っ直ぐ行けばええところを、右に曲がったり左に曲がったり、同じ辻にまた出てきてみたり、ぐるぐるとよけいなところを回っとるみたいやろ」
「辻？」

「十字路。四つ角のことや」
「でもこれって、道に迷っているんじゃないんですか？」
「ちゃう。あのグラウンドで道を見失ったみたいやけど、それまでは正しい方向に進んどる。これがちゃんとした道筋なんや。――霊道に入るためのな」
「レイドウ？」
「霊が通る道。要するに、人間には見えへん、人間以外のモノが使う道や。どこに繋がっとるかは、実際に足を踏み入れてみんことにはわからへん。それで、その霊道に入るためには、こうして何度も決められた回数、角を折れて辻を横切らなあかんていうしきたりみたいなもんがあるんや」
（しきたり……）
ミヨシの歩くスピードが速いので、太一も遅れまいと足を速めながら考え込んだ。
「えっと、それは、ダイヤル式の鍵みたいなもの？」
「ああ？」
「ダイヤルを右に何回とか左に何回とか、決まった目盛りに合わせないと開かないやつ」
ミヨシはちょっと黙ってから、肩越しに太一を一瞥した。あまり認めたくなさそうな顔で、まあそうかも知れへんな、と呟く。
「おそらくこの相手は、霊道に入る手前で迷ってしもたんやろ。どこへ行くつもりかは知らん

けど、このまま放っておいたら迷うたままタチの悪いモノに変わってしまう可能性もある」

「悪いものになるんですか？」

「『想い』だけは強いみたいやしな。妄執やら未練やら、ヘタしたらそういう念自体が人や土地に影響を及ぼすこともあるんや」

それで脳裏をよぎったのは、盆の祭りの時に見た、『不浄』とか『穢れ』と呼ばれるモノたちのことだった。

今思い出しても、ぞっとする。――襲いかかってきた、真っ黒な闇。凄まじい悪意、ただそれだけの存在。

（あんなふうになってしまうのかな）

「そういうわけで俺らも、同じ道順を通ってからでないと、霊道にはたどりつけへん。たどりつくことがでけへんかったら、相手に道を教えることもでけへんちゅうわけや」

ほんま面倒くさい話やで、とミヨシはうんざりしたように言った。

でも、口ではどんなふうに言っていても、やっぱり相手の望みを叶えてやるつもりなんだな、と太一は思う。

「ねえねえ、太一」

背中のリュックサックから、突然、もごもごと声が聞こえた。

太一は慌ててあたりを見回す。幸い、周囲に彼らの他に人影はない。

「しーっ。黙ってなきゃダメだってば」
それでも小声で言ってみたが、アカネは聞いていないようで、
「あのね、アカネの『お話』、おもしろかった？」
「え？」
ドキリとした。
今朝方に見たあの夢のことを、本当はずっと考えていたから。
「アカネはそのお話、タカハシさんにもしてあげたの」
「え、タカハシさん？」
１７４号室の住人と付喪の少女の取り合わせが、ちょっと不思議だったので、思わず聞き返した。
うん、と嬉しそうな声が背中から返る。
「太一にしたのと同じの、タカハシさんも聞きたいって言ったから」
「いつ？」
「さっき。太一が出かけている時。タカハシさん、おもしろいって言ってたよ。太一もおもしろかった？」
「う、うん」
夢のことをお露さんたちに言おうかどうしようか迷ったけど、結局言い出せなかった。

口に出そうとすると、急に自分がなんだかひどくバカげたことを言おうとしているような気持ちになる。

だってやっぱりあれは、ただの夢だと思う。関係なんてあるわけない。アカネから「お話」を聞いたせいで見た夢で、そもそもアカネはそれを、大家に教えてもらったと言っていたのだから。

それでも、どうしても気になってしまうのは、

――会いたい。

夢の中で太一が感じた、誰かの、心がちぎれるほどの悲しさ。

それと同じ言葉を、レンやお露さんが彼岸花から聞いているからだ。

太一は、一足ごとに踏みしめるように間隔をあけてずっと道の先へとつづいていく、赤い花を見つめた。

――すごく悲しんでいる。ずっと、探していたのに、会いたいのに。

誰を探しているんだろう。誰に会いたいのだろう。

(それにしてもタカハシさんがお話を聞くって……)

アカネがドアの前に座って「お話」をして、タカハシさんがうんとかへえとか、相づちを打ったりするのだろうか。なんか意外だ。

(タカハシさんも、夢を見ることってあるのかな)

ミヨシを追って歩きながら、太一はそんなことをふと思った。

5

異形の住む賽河原町も、町の外れまでくれば家や建物の数はめっきり減って、妖怪たちの姿もあまり見かけなくなった。

代わって、秋草が競うように葉を伸ばす野っ原や、こんもりとした雑木林が出現し、はるか遠くには薄くけぶるような山々の輪郭も見える。異世界のその山に、名前があるのかどうかは知らない。おそらく人間の足ではけしてたどりつくことのできない場所だ。

燃えるような夕焼けに照らされて、まだ紅葉していないはずの樹々の葉も、風が立つたびに赤に金に輝いた。

その夕暮れの風景の中にひときわ鮮やかな紅を見つけて、古都子は足を止めた。

「クロ爺！　ちょっと来て！」

呼べば、すぐにカラスは上空から舞い降りて、彼女の頭上の枝にとまった。

「なんじゃい。もう息がきれたのか？」

「そうじゃなくて、これのことなんだけど」

林の中を縫うようにして、一定の間隔をあけて咲いているその花を指さすと、クロ爺は「彼岸花じゃな」と言った。

「それがどうかしたかね」

「今日になって境界を越えて人間の世界に入り込んだモノがいるんだけど、それが通り過ぎたあとにこの彼岸花が咲くの。……ねえ、沼はこの先にあるのよね？」

「そうじゃよ」

「ヘンね」

古都子はかたちのよい眉を顰めて、考え込む。

「……どうして境界を越えたモノの足跡がここにあるのかしら」

カラスは羽を広げると、彼女の目の高さの枝にひょいと飛び降りた。

「たまたまということはあるぞ。たまたま、そいつがこの場所を横切って行っただけかもしれん」

「町外れのこんな場所を？　町中ならともかく……」

「結論を急ぐでない。まずは沼に行ってみることじゃ。そもそも沼地のよそ者が、この一件に関係しているかどうかもまだハッキリしておらんのだからの」

そうね、と古都子はうなずいた。

「沼まではまだ遠いのかしら？」

「なに、ここまで来ればあと少しじゃよ」
クロ爺はふたたび空に舞い上がった。それを追ってもう一度、古都子も走り出す。
その行く手に彼岸花が咲いている。
どこまでも。かつてそこを通り過ぎて行ったモノの痕跡を示して。
やがて、沼に出た。

沼そのものは、たいした大きさではなかった。その縁を歩いても、時間もかからず一周できてしまう。
樹木に囲まれて、水面は深い緑。夕暮れの空を映してむしろ黒みがかって見える。
そして、沼のほとりに咲き乱れる赤。
水際まで地面を覆い尽くした、一面の彼岸花。
「いやはや、これは驚いた」
足を止めた古都子のすぐ近くの枝に降りてきて、クロ爺は呆れたように言った。
「ここにある花も、今日になって咲いたのかしら」
「少なくともわしが以前に見た時には、ここには何もなかったのぅ」
ほれ、とカラスは片方の翼で沼の反対側を示した。
「ヤツはあそこに住んでおったよ」

なるほどそこに、粗末な小屋がある。どこかの廃屋から木材でも拾ってきて作ったらしい、隙間だらけのあばら屋だ。

「誰もいないみたいね」

古都子が言うとおり、小屋はしんと静まりかえっていた。中に動く者の気配はなく、まるっきりの空き屋のようだ。

古都子は頭部を覆っていたバンダナをするりと取ると、困ったなという顔で髪をかきあげた。

「うーん、と。これはつまり、柊さんに取り憑いた妖怪を探していたら、境界を越えた妖かしのほうにたどりついちゃったってことかな」

「彼岸花がその証だというのならな」

しかし、とクロ爺は疑わしげに頭を傾けた。

「さっきも言うたように、妖力などほとんどなさそうなヤツじゃ。いくら柊二郎が眠り込んだせいで結界が弱まったとはいえ、境界を越えて無事ですむかのぅ」

「この時期だけパワーアップしている可能性だってあるわよ」

「ふむ。月に縁のあるモノということか。……確かに正体まではわからんから、まったく可能性がないとは言わん。が、月から得られる妖力にもかぎりはあるぞ」

古都子は残念、というように肩をすくめた。

「どっちにしても、柊さんを眠らせた妖怪とは関係ないでしょうね。この妖かしのことは、あ

ちらの世界でミヨシたちが何とかすると思うし。……よそをあたったほうがよさそう」
「まあ、まるきり無駄骨でなかっただけ、マシじゃて」
クロ爺が慰めるように言った時、少し離れたところで林の下生えががさりと音をたてた。
「おや、水虎じゃないか」
木立をぬけて沼のほとりに姿をあらわしたのは、二メートルほども丈のある、でっぷり太った妖怪だった。体毛はなく、全身がカエルの肌のように青くぬめっている。カッパの遠い親戚なので、頭の上には皿、手足の指には水かきがついていた。
釣り竿と魚籠を持っているところを見れば、沼に釣りに来たらしい。
「あー、クロ爺」
水際にむかってのっそりと歩き出してから、初めて気づいたらしい。水虎はカラスを見て、大きな目を瞬かせると、まのびした声を発した。
「おまえさん、よくここに釣りに来るのかね？」
「来るぅ」
「だったらほれ、そこの小屋に住んでおったヤツのことを知っているか？」
水虎はぐるりと身体ごと回して小屋を見ると、もう一度顔を戻してうなずいた。
「知ってるぅ」
「話をしたことはあるのか」

「ある。ちょっとだけぇ」
クロ爺と古都子は顔を見合わせた。
「そいつは自分の名前を言っておったかね？」
「言ってなかったぁ」
「じゃあ、どんな話をしたんじゃ」
水虎はのへーっと顔を空にむけた。記憶をたどっているらしい。しばらく背中を反らせて空を見上げてから、
「遠くから来た」
「遠く？　どこから？」
魚籠を持った手で、あっち、と妖怪ははるかに霞む山々の方角を示した。
「あの山かね」
「あの山のむこうの山のむこうの山のずーっとむこうの山ぁ」
ほう、とクロ爺は早くも疲れた声で応じた。
水虎はまあ、よく言えばおっとりのんびりした性格の妖怪だ。年に一度、人間を襲って生き血を吸う以外はこれといった悪さはしない。古都子を見ても反応しないところを見ると、幸い今日はその「年に一度」ではないらしい。
「他には？」

水虎はまた目を瞬かせると、今度は魚籠を持った手を空にむけた。
「夢。夕焼けの夢」
え、と古都子は身を乗り出した。
「なあに、それ？」
「前にここで釣りをしてたら急に夕焼けになってぇ、あいつが小屋から出てきてどうしてって訊かれたから、夢だって言ったぁ。空栗荘の主が夕焼けの夢を見てるからってぇ」
おそらく柊二郎がうたた寝でもして、今と同じ夢を見てしまったのだろう。ほんの数分ばかりの出来事だろうが、事情を知っている賽河原町の住人たちはともかく、よそ者の妖かしにはさぞかし奇妙なことに思えたに違いない。
「それで、何か言っていた？」
古都子に目をやって、水虎はこっくりとうなずいた。
「言ってたぁ。悲しい夢だなあって」
「悲しい……？」
そう、と古都子は呟く。
「それからぁ」
水虎は一生懸命に思い出そうとするように、何度も首を振った
「こんなに大きな夢だと、一晩で喰いきれないなあって、言ってたぁ」

「喰う？」
　またも妖怪はこっくりとする。
「話したの、それだけぇ」
　古都子はニコリと笑った。
「いろいろ教えてくれてありがとう。……あ、そうだ。お礼にこれあげる」
　手提げから『一銭玩具屋』で買ったキャラメルを取り出すと、水虎に近寄ってその水かきのついた手に一粒、のせた。
「お菓子ぃ」
　水虎は器用にキャラメルの包み紙をむくと、嬉しそうに口に入れた。そうしてのっそりと身体のむきを変え、水際まで行って彼岸花を押し潰すように座り込んだ。釣り糸を垂れる頃には、古都子やクロ爺のことなどすっかり忘れてしまった様子である。
「ううーむ」
　クロ爺が枝の上で幾度も羽ばたきしながら、妙な声で唸った。
「喰う喰う喰う……、夢を喰うとな。ううむ、ひょっとするとこれは……」
「ええ。ここにいた妖かしは、無関係どころじゃなかったみたいね」
　古都子はしばらく頬に手をあてて考え込んでから、顔をあげた。
「あ、おい。待たんか」



いきなり駆けだした彼女を、クロ爺が慌てて追う。

沼を縁取る彼岸花をかきわけるようにして、古都子は妖かしが住んでいた小屋に走った。入り口には戸の代わりにムシロが下がっている。それをめくりあげるように、中に飛び込んだ。

小屋の中は薄暗かった。土間と狭い板の間があるだけで、家財道具はほとんどない。壁板を四角く切り取っただけの窓から、夕暮れの光が射し込んでいる。その淡い明かりを頼りに、古都子は内部をぐるりと見回した。

まず、土間にあった壺や鍋を逆さにして何も入っていないのを確かめると、靴を脱いで板の間に上がった。部屋の隅に行李がひとつ、置いてある。近づいて、蓋を持ち上げてのぞき込んだが、中は空っぽだ。——いや。

竹で編んだ行李の底に、何かが落ちていた。

小さな丸薬のようなものが、ころころと幾つも。

指で一粒つまみあげて窓からの明かりにかざすと、それは真珠のように白く艶をおびて光った。

「……やっぱり、そうだったのね」

古都子は小さく息をつく。その粒を手の中に握り込んで立ち上がった。

「何かわかったかね？」

屋根にとまっていたクロ爺が、小屋から出てきた彼女に声をかけた。

「うん。私たち、ふたつの思い違いをしていたの。まず、柊さんが目を覚まさないことと、今朝になって境界を越えたモノを切り離して考えていたこと。――何者かはまだはっきりしないけど、クロ爺が言うように妖力のない妖かしならなおのこと、空栗荘の主をどうにかしてでも結界を弱めないと、自力で境界を越えるなんてことはできなかったんだわ」

「なんとな。つまり柊二郎が眠ったせいで結界が緩んだのではなく、その逆だったわけか」

クロ爺は感心したように言った。

「ここにいた妖かしが憑き物を使って柊さんを眠らせ、人間の世界に入り込んだ。力はなくても知恵は働いたようね」

「で、もうひとつの思い違いとは何じゃ？」

「柊さんに取り憑いたのは月に関わる妖怪だと、思いこんでいたことよ。空栗荘の主に取り憑くことのできるモノなんて滅多にいるものじゃないし、でも今は中秋の月の満ちる時だから、その影響で妖力を増したモノの仕業に違いないってきめつけていたの。……だから、一番簡単な答に行きつかなかった。ちょっと考えればわかったはずなのに、まさか月とは全然関係のない妖怪だとは、思いもしなかったわけ」

古都子はほら、と手を開く。クロ爺は屋根から跳ねるようにして、彼女の肩に爪を立てずに降りると、その掌の上の白い丸薬のようなものをしげしげとのぞき込んだ。

「やっぱりか。こんなモノを手に入れておったとはな」

古都子は携帯電話を摑んだ。ぱちんと開いて、大きくため息をついた。
「ダメだわ。また圏外になってる。早く十遠見さんに知らせなきゃいけないのに」
困ったなと呟いたとたんに思いついたように、肩の上のカラスを見た。
「ごめん、頼まれてクロ爺。先に行って空栗荘に伝えてほしいの。柊さんに取り憑いているモノがわかったって」
クロ爺はやれやれと唸ると、翼を広げた。
「まったく手間のかかることよ。――ふん、これを見せればよいかの」
嘴の先で、古都子の手の上の粒をくわえ取った。
ええ、と古都子はうなずく。
「憑き物の正体は夢を喰う妖怪。獏よ」

「さて、と。こっからが問題や」
金網の外から、彼岸花で埋め尽くされたグラウンドを眺めて、ミヨシは顔をしかめた。
「ああ、やっぱりおるな」
「え、見えるんですか？」
太一は思わず金網のむこうに目をこらした。もちろん、彼には何も見えない。燃えるような赤い色に目が眩むばかりだ。

「今のところはまだ、気配を感じるだけや。話しかけてみて、相手が応じれば姿も見えるようになるやろけど」

いかにも面倒くさそうに、ミヨシは言う。

「とにかく、迷っとるんやから正しい道を探して誘導してやるしかないやろ。けど、どこへ行きたいんかくらいはわからへんと、こっちも教えてやりようがない」

ミヨシはずかずかとグラウンドの入り口に近寄ると、中に入ろうとした。——とたん、緑色の金網を張った扉がついっと動いて、その目の前でがしゃんと閉まった。

「……ええ？」

太一はぽかんとした。

まるで、目に見えない手が乱暴に扉を閉ざしてしまったみたいに見えた。

（なんで……）

「くそっ」

ミヨシは呻くと、取っ手を摑んで力いっぱい扉を揺さぶった。が、押しても引いてもビクともしない。

「ミヨシさん、あの……？」

「抵抗しとるんや」

「て、抵抗⁉」

「入ってくるなてことやろ」
ミヨシは険悪な目で扉を睨んだ。こうなったら、と呟いて、金網に手をかける。網を乗り越えてグラウンドに入るつもりらしい。
しかしよじ登ろうとしたとたん、「うっ」と声をあげてミヨシはたじろいだように後ろに身体を退いた。ぶすっとして、自分の両手を見つめる。
「あかん。ビリっときよった」
「もしかして電流が流れているとか⁉」
「アホ。俺は畑を荒らすイノシシか。農家の害獣よけならともかく、町中で誰がそんな危険なことをすんねん。——そうやのうて、典型的な妖かしの拒否反応や。何がなんでも、中に入れんつもりなんやろ」
「どうしてですか？」
「知るかい！」
ざあぁっ。
ふいに風もないのに、グラウンドの彼岸花がいっせいに揺れた。荒々しい波が幾つも重なってこちらに押し寄せてくる、そんな揺れ方だ。
背中がひやりとする。
近づくな、近づくな。——まるで花がそう叫んでいるかのようだ。

「猫がシャーって言ってるみたいですね」
「……おまえの喩えて、まるきり外れでもないけどもうちょっと他に言いようないんかっちゅうのばっかりやな」
と、太一が背負っていたリュックサックが、いきなり空気が抜けたようにしぼんだ。
同時にぽんと軽く弾けるような音がして、空中から飛び出したアカネが太一の隣に降り立った。
「あのね、アカネは知ってるよ。あそこにいる人、ミヨシのことが怖いんだよ」
ぴょんぴょんと足を踏みかえるように跳ねながら、そんなことを言う。
「こら、勝手に出てきたらあかんやろ。――って、なんやおまえ、あそこにおるヤツのことが見えとるんか？」
「うん。男の人の格好をしてるの。雨合羽を着てるよ」
「雨合羽!?　それから？」
「知らない」
ミヨシは力が抜けたように肩を落とした。
「それで、なんで俺が怖いんや？」
「ミヨシが怒った顔、してるから」
それを聞いたとたん、ミヨシはムカついたように金網にがしゃんと蹴りを入れた。

「言うとくけど俺は、生まれた時からこういう顔なんや！　人を見た目で判断すな!!」
よけい怖がらせてどうする。
しかしレンが中に入れたのにミヨシは閉めだしをくらうということは、やはり見た目の判断なのだろう。
（人間でないものにまで怖いって言われるミヨシさんて、ちょっとスゴイ）
太一は感心した。
「どないせいていうんや。道もわからんと、このままここにおるつもりか」
彼岸花に埋もれたグラウンドを睨みつけて、ミヨシは舌打ちした。
「霊道ってここから遠いんですか？」
太一が訊ねると、いや、と不機嫌な声が返った。
「ここまで来たらすぐや」
だったらあと少しなのに。太一は思った。
霊道というのがどんなふうになっている道で、どうやってそれのある場所を教えるのかは、太一にはわからない。でも、今このグラウンドにいる何者かは、ずっとその道を探していたはずなのだ。
このままでは、どこにも行けないのに。
会いたいはずの相手にも、会えないのに。

——誰を探しているんだろう。誰に会いたいのだろう。
ふと、心にひっかかるものがあった。さっきは何気なく聞き流してしまった言葉。
横にいるアカネを見ると、付喪の少女も大きな目で彼を見上げた。
「ねえ、アカネ。……あそこにいるの、男の人って言っただろ？」
「うん」
「雨合羽を着ているの？」
「うん」
アカネは大きくうなずいた。
太一の心臓が、また音をたてはじめた。息が苦しくなる。
（雨が、降ってた）
激しい雨。紅葉した山が灰色に見えるほどの。その人は出稼ぎ先から家に戻る途中で、でも。
（帰れなかった）
土砂崩れに巻き込まれたせいで。
——会いたい。
「太一？」
アカネの声で、ハッと我に返った。
「あ、うん。なんでもない」

（やっぱり関係ないよな。夢なんだし）

自分に言い聞かせるようにしながら、太一はぼうっと目の前の金網に手を伸ばす。ほとんど無意識だった。金網に触れる手前で、空気が急に粘るようになって掌が柔らかく押し戻されるような、奇妙な感触があった。

ただの夢だ。関係なんかないはず。でも。

小さな小さな、誰にも聞こえない声で、太一は呟いた。

「もしかして、自分の娘に会いたいのかな……」

その瞬間。

掌を押し戻す感触が消えて、太一の指は何の抵抗もなく金網を摑んでいた。

「おい？」

ミヨシが不審げな声をあげる。

奇妙な静けさが訪れた。あれほど揺れていた彼岸花が、ひたりと、いっせいに動きを止めたせいだ。

太一は目を瞠る。

キイィ、と軋むような音を響かせて、グラウンドの扉が突然、開いた。

「どうなっとるんや」

しばらく黙り込んでから、ミヨシは大きく開いた扉と太一を見比べて、怪訝に顔をしかめた。
「んーとね、太一は行き先を知ってるから、太一に連れて行ってほしいんだと思う」
アカネが太一の腕にぶら下がるようにしながら、言った。
「行き先を知っとる？　なんでおまえが？」
当然の疑問をぶつけられて、太一は困った。
「それはあの……、夢で」
「夢⁉」
結局太一は自分が見た夢のことを、ここで口ごもりながら説明することになった。といっても、「出稼ぎに行った男の人が」から「最期まで娘に会いたがっていた」まで、かいつまんで話せばたいして長い話ではない。
「なんでもっとはよ、その話をせえへんかってん」
ミヨシは呆れたように言った。
「だって……夢だし。関係があると思わなかったから」
おそるおそる、太一は訊ねた。
「あの、それともやっぱり関係あるんですか？」
困ったように、ミヨシはがしがしと頭をかく。
「知らんわ。けど、符合があいすぎとるな。なんでおまえが、そんな夢を見たんやろ」

「それって、アカネの『お話』だよね、ね、太一？」
アカネが嬉しそうに太一を見上げた。
「お話？」
はあ、と太一はうなずく。
「アカネからその夢と同じような話を聞いて、だからそのせいかなと」
「あのね、アカネはね、柊二郎からその『お話』を聞いたんだよ」
「大家から？　なんで大家がそんな話……」
言いかけて、ミヨシはふと黙った。その表情が、見る見るうんざりとしたものになってゆく。
「……もしかしてあいつ」
「ミヨシさん？」
ま、ええわ、とミヨシは投げ出すように言った。
「ええことないけど、今は言うてもはじまらん。――それより問題は、このあとどうするかや」
「このあとって、正しい道を教えるんじゃないんですか？」
「教えてやるには、誰かが誘導して霊道に入らなあかん。で、そいつは俺のことを嫌っとって、おまえに連れて行ってほしいて言うとるわけやな？」
ミヨシが苦虫を噛み潰したような顔をしているので、太一は首を傾げた。

「俺でいいんだったら、行きます。……あ、でも行き方がわからないし、俺じゃその霊道に入れないとか？」

そうなのかもしれない。霊の通る道だというから、ミヨシのように幽霊や妖かしが見える人間じゃないと、入れない場所ということだろうか。

しかし、ミヨシは首を振った。

「おまえでも入れるやろ。けど、入ったあとでどうなるか……」

「どうなるんですか？」

「俺にもわからんから困っとるんやっ」

くそ、と呟いて、ミヨシは自分の髪の毛をひっかき回す。

「あかんな。俺が入るつもりやったけど、それがでけへんのやったらここまでや。なんぼなんでも素人のおまえにやらせるわけにはいかへん」

「そんなに危険なところなんですか？」

「危険かどうかもわからへんのや。大方はなんもないやろけど、万が一てゆうこともある。何かおかしなことにでもなったら、おまえには対処でけへんやろ。――せやからな、あかんねん。妖かしのために、おまえを危ない場所にやらすわけにはいかん」

俺は人間やから、妖かしか人間かていうんやったら人間を優先させる。ミヨシのその言葉は、ひどくきっぱりとしたものだった。

太一はグラウンドに咲いている彼岸花を見た。レンが座っていたベンチを見て、そうしてまたミヨシを見た。

「ここまでってことは、もう道を教えることはできないってことですか？」

「ああ」

「じゃあ、ここにいる男の人は迷ったままになるんですか？　自分の娘に会いたいのに、もう会えないんですか？」

言ってから太一は、すでに自分があの夢は本当にあったことなのだと確信していることに気づいた。さっきまでただの夢だと思っていたのが、嘘みたいに。

ここにいるのは、あの男の人だ。

娘に会いたくて、会えずに死んでしまった人だ。

きゅっと胸が音をたてて痛んだ。

――可哀想だ。このままじゃ。

「俺……、あの俺、行っちゃダメですか？　この人がこのままなのは、イヤだから」

ミヨシは冷ややかに目を細めた。

「アホか。何もわからんくせに、お人好しもたいがいにせいよ」

お人好し。こういうのを、お人好しというのか。

（この人のためじゃないと思う）

自分がイヤだからだ。自分が、いつまでも胸が痛いままなのが、イヤだからだ。
太一は歯を食いしばった。
ミヨシの冷たい目を跳ね返すように、顔をあげて言った。
「俺の部屋番号、『０１４４』ですから」
これでお人好しと言われるのなら、もうずっとその番号でかまわない。
ミヨシは太一をしばらく睨みつけてから、げっそりと息を吐いた。
「なんでうちの連中はこうなんやろ」
その時アカネが、太一の腕から手を放して、ミヨシの足にぱふっと抱きついた。彼を見上げて、ニッコリした。
「大丈夫だよ。アカネも行くの。太一と一緒に行くから大丈夫なの。あのね、アカネは太一が大好きだから、太一を守るんだよ。初緒(はつお)みたいに」
ミヨシはアカネを見下ろして、ひどく迷う顔をしてから、そのおかっぱの頭に手をおいた。
「ほんまか？　ほんまにちゃんと、太一のことを守れるんやな？」
「うん！」
ミヨシはもう一度ため息をつくと、太一を見た。
つっけんどんに、
「これから俺が言うことをよう聞いておけ。絶対に忘れるなよ」

口調とは裏腹の、ひどく真剣な表情だったので、太一は「はい」と力を入れてうなずいた。
「霊道は一本道や。入ったら、そこを出るまで後戻りはできん」
「はい」
「歩き出したら、後ろは振り返るな。何があっても後ろを見たらあかん。もしかしたら別の道と交差して、誰(だれ)かが目の前を横切るかもしれへん。その時は、知らんふりしとけ。たとえ、話しかけられても、絶対に返事すんな」
「はい」
「もし、それでも万が一危ないことになりそうやったら――」
ミヨシが差し出したのは、薄紙に包まれた小さな木の板だった。よく見ると人のかたちをしている。
トイレの表示みたいだ、とはさすがに思っても太一は口にしなかった。
「これはヒトガタや。これに一回自分の息を吹きかけて、後ろにむかって振り返らずに投げろ。そうして走れ。それで少しは時間稼ぎにはなる」
ぐいと手に押しつけられたそれを受け取って、太一は急いでポケットにしまった。
「帰る時は、出て来たところからもういっぺん霊道に入れ。おまえには帰る場所がちゃんとあるんやから、道は消えんと残っとるはずや」
「帰る場所？」

「空栗荘にきまっとるやろ」
ミヨシは怒ったように言った。
「ええな、空栗荘に帰ることだけ考えて歩け。そうすれば必ず、空栗荘の近くに道が繋がるから」
「――はい」
太一が帰る場所は、空栗荘。他のどこでもなくて。
「しくじんなよ。もしいつまで経ってもおまえが戻ってけえへんかったら、迎えに行く」
素っ気なく、やっぱり怒った顔と声でミヨシは言う。
ああそうかと、太一は思った。やっとわかった。
(怒っているんじゃなくて……)
レンの時もそうだった。こういう口調の時、この人はものすごく心配しているんだ。
「グラウンドに入って、彼岸花を一本取ってこい。相手はそれを目印にしてついてくる。あとはどっちにむかってもええから、歩いて行け」
「歩いて行くだけでいいんですか?」
「ああ」
とにかく、言われたとおりにした。金網の扉を通り抜けて、足下に生えている彼岸花を一本、できるだけ長く折り取った。それを手にして外へ出る前に、太一はふと立ち止まってグラウン

ドの中を見回した。
遅い午後の日射しを浴びながら、赤い花たちは炎の波のようにちらちらと小さく花弁を揺らしている。
（本当についてくるのかな）
そこにいるはずのモノの気配さえ、太一にはわからない。
隣にくっついてきていたアカネが、きゅっと太一の手を握った。
「行こ、太一」
「うん」
彼岸花を片手に持ち、ミヨシに見送られて太一は歩き出した。

6

「……というわけで、大家に取り憑いているのは獏だそうだよ」
空栗荘の柊二郎の部屋である。
縁側にクロ爺が舞い降りたのを見てガラス戸を開けたのは、たまたまその時部屋にいたお露さんだった。

クロ爺はくわえてきた例の白い粒をお露さんに渡すと、「わしを何だと思っとるんじゃ、伝書鳩か⁉」と一応文句を言ってから、事の経緯と古都子からの伝言を伝えた。

話を聞き終えたお露さんは、手の上の丸薬のような粒をしげしげと眺めていたが、やがて

「なるほど獏だねぇ、これは」とうなずいて、縁側から部屋の中を振り返った。

「聞いているのかい、十遠見。……あんた一体、そこで何をしているんだね？」

十遠見は大家の布団の傍らで、力が抜けたように畳に突っ伏していた。

「獏……獏だったとは。なんてベタなオチだ……」

放心したように呟いている。

「何をぶつぶつ言っているんだろうねえ。まさか獏を祓えないなんてことはないんだろ？」

「難易度は、子供の疳の虫を落とすレベルだ」

「というと？」

「五分もあれば事足りる」

「だったらどうしてあんた、そんな格好で潰れているんだい」

国家公認術者は、ようやく身体を起こした。ずり落ちかけていたメガネの縁を指で押し上げると、暗い声で言った。

「最初にわかってさえいれば。……おおいなる時間と気力体力の無駄遣いだ。私は無駄遣いが大嫌いなんだ」

「そうかい。金の無駄遣いでないだけよかったじゃないか。つまらないことで落ち込んでいないで、さっさと大家を叩き起こしとくれ」

まっとうかつ容赦のないことを言って、お露さんはまたクロ爺のほうに顔をむけた。

「世話をかけたね。おかげで助かったよ。……それにしても考えたものさ。獏を使うとは」

「ふむ。獏の糧は人間が眠った間に見る夢じゃからな。普通は夢をひとつかふたつも喰えば、獏も満足して、放っておいても取り憑いた相手の身体から離れるものだが」

カラスは夕焼けの空を見上げた。

「さすがにこの夢は、喰いきれんかったようじゃの」

そうだね、とお露さんはぽつりと応じた。

「でもこれで大家も起きるだろうし、境界越えをしたモノのことはミヨシが解決するだろうから、今晩は予定どおりに月見ができるよ」

「……まあ、柊二郎さえ目を覚ませば問題はなかろうが」

クロ爺は肩をすくめるのとそっくりな仕草を見せた。少々歯切れが悪く、言う。

「なんだい」

「どうもな、ひっかかるんじゃ。その、境界を越えた妖かしのことがな」

「ふん？」

「彼岸花はそやつが残していった『念』じゃと、古都子は言っておった。確かに、強い想いや

気があとにこびりついて残るというのは、あることじゃよ。……だがな、今日になってそれが花となってあらわれたというのは、どういうことか。誰の目にも見えるほど、その念が強くなった、すなわち本人の力がこの日に突然強くなったということじゃろ」

クロ爺は落ち着かなげに、翼を広げたりたたんだりした。

「わしらの町でも、彼岸花を見かけるようになったのは今日じゃ。そやつが通ったはずの場所に、昨日までは何もなかった。だが、なぜ今日なんじゃ？」

「満月で秋分だからじゃないのかい？」

「月に縁がある可能性は否めんの。この時期でなければ、そやつは空栗荘に近づくこともできんかったはずよ。柊二郎が目を覚まさなくなった四日五日ばかり前に、そやつはここに来ておったということになる。そうじゃろ？」

「そりゃまあ、漠はその頃から大家に取り憑いていたってことだからね」

「だがな、本来はほとんど妖力を持たぬヤツが、満ちてゆく月から力を得るにしてもたかが知れておる。トカゲは大きくなったところで所詮トカゲ、龍に化けることはできんという喩えのとおり。――そやつが策を弄して結界を弱めることに成功したのだとしても、果たしてそれだけで境界を越えることができるものかの」

「そこまで妖力がないというのも、逆に珍しいんじゃないかね」

「自分の姿もちゃんと保てぬくらいじゃ。あの様子ではこれまで、盆や彼岸といったあちらと

こちらが繋がりやすくなった時でさえ、人間の世界に行くことなど叶わんかったじゃろ」

ふぅん、とお露さんは唸った。

「とすれば、他にもその妖かしが力を持つ要因があったってことかい」

クロ爺はうなずいた。

「どうにもすっきりせんな。そやつに関しては、まだ何か見落としていることがあるような気がしてならん。……そもそも」

何だね、というようにお露さんが顎をしゃくると、カラスは顔をしかめたように見えた。片方の翼でお露さんの掌の上を示すと、

「そやつは一体どうやって、柊二郎に獏を取り憑かせたんじゃ？　この状態になっている獏は、それこそ薬のように口から飲み込むか、鼻の穴に押し込むかせにゃならんのだぞ⁉」

歩き出すとほどなく、光が沈んであたりは薄ねず色になった。

夜が訪れる一瞬前の淡い闇の暗さだ。

太一は思わず来た方向を振り返りそうになったが、ミヨシに言われたことを思い出して、ぐっと我慢した。

（これが霊道なのかな……？）

確かに妙な風景ではあるけれども、想像していたほど何もかもが違っているというわけでは

ない。

さっきまで見えていた家やコンクリートの塀が途切れて、まばらに樹木の生えた平地に出た。その樹々の間をぬって、仄かに白い道が緩やかにうねって先へと伸びている。木立の幹も枝葉も、少し離れれば薄闇に呑まれて、灰色に輪郭をぼかしていた。

色彩のない、淡やかな闇の空間。まるで墨絵かモノクロの写真の中にいるみたいだと、太一は思う。

片手に持っている彼岸花だけが、灯火のようにぼうっと赤い光をおびて、薄闇の中で光っていた。

アカネと手を繋いだまま、太一は黙って歩きつづけた。しゃべってはいけないとは言われなかったけれども、ここはずいぶん静かなので、声を出すのがためらわれる。

そうしてどれくらい経った頃か――。

ひた。ひた。ひた。

背後から足音が聞こえた。

誰かが、太一たちのあとをついて来ているのだ。

（振り返っちゃダメだ。振り返っちゃ……）

自分に言い聞かせて、太一は力をこめて前方を凝視した。

ひた。ひた。

足音がさっきよりも近くなった気がした。
アカネが、きゅっと太一の手を引っ張った。太一を見上げてニコっと笑うと。
「ね、太一。歌をうたったげる。アカネの歌は好き？」
その明るい声と屈託のない表情に、ちょっとホッとした。
「うん」
「じゃあ、お月さまの歌」
もう何度か聞いたことのあるその歌を、アカネは嬉々として歌いだす。
「お月さんいくつ、十三ななつ、まだ年ゃ若いな、ねんねを生んで誰に抱かしょ、お万に抱かしょ、お万はどこ行った」
ひた。ひた。
足音はさらに近い。もう、すぐ後ろだ。
「油屋の縁で氷が張って、油一升こぼした、その油どうした、白どんの犬と黒どんの犬がみんななめてしもうた」
太一の手を摑んで、軽く跳ねるように歩きながら、アカネは繰り返し歌いつづけた。
「その犬どうした、太鼓になって、あっち行っちゃドンドコドン、こっち行っちゃドンドコドン……」
アカネの声が、ふいにぴたりと途切れた。

「あっ」
太一は思わず声をあげた。
道の先に、光が見えた。まるでトンネルの出口みたいに、霊道に眩い陽の光が射し込んでいる。
その時だった。
ふわり。
何かが太一の傍らをかすめて、追い抜いていった。一瞬の、柔らかな風のように。
（え……？）
目をこらしたが、誰の姿も見えない。
けれどもその気配が、前方の光の中にあっという間に吸い込まれていったのは、わかった。

霊道を出たとたん、空間がぽかんと広がった。日射しが眩しくて、くらくらする。太一は何度も瞬きして、それからようやくあたりを見回した。
（ここって）
墓地だ。
山肌につくられた広い墓地。段々状になった斜面に、灰色や黒の墓石が並んでいる。線香の煙の臭いが、かすかに漂っていた。

（どうしてこんなところに……？）

「太一、こっち！」

アカネがおかっぱの髪とエプロンの紐を揺らして、斜面につけられた階段をぱたぱたと登ってゆく。慌てて、太一も持っていた花を放ってそのあとにつづいた。

墓地の斜面にも彼岸花の赤い色が見えた。でもそれは帯のように連なって、周囲の草花の緑に溶け込むように咲いている。妖かしの足跡ではなく、きっともとからそこに生えていた花なのだろう。

（どこにいるんだろう）

ここが目的地なら、この墓地のどこかにいるはずだ。

どうしてその人を探しているのか、太一は自分でもよくわからなかった。

ただ、気になった。

――会いたい。

会うことが本当にできるのだろうか。

アカネがいきなり立ち止まった。その場に追いついた太一も、小さく息をつめた。

そこには何の変哲もない、灰色の御影石でつくられた墓があった。彼岸の墓参りもすでに終わっているのか、菊の花が供えられている。

その墓の前に一人の男が立っていた。

夏の名残をとどめた明るい日射しの下で、男はゴム引きの黒い雨合羽を着ている。その下はよく見えないけど着物らしい。黒い股引をはいて、素足に草履。髪は短く刈り上げていて、まだ二十代くらいに見えた。

そんなふうに細かいところまでハッキリわかるので、一瞬、生きている普通の人間なのかと思った。

だから、男が顔をあげてゆるりとこちらを見た時も、太一はどうしていいのかわからなくて動けずにいた。

「ありがとうよ」

それが男の最初の言葉だった。

「世話になったな。道がわからなくて、あのまま迷っちまうところだった。だけど、おかげさまでこうしてここへ……」

男はまた、墓に視線を戻す。そうしてしゃがみ込んで、手を合わせた。つづくはずの言葉は、途切れたままだ。

しばらくの沈黙のあと、男は手をおろすとふたたび口を開いた。

「他人様をおとしいれるような真似をして、あんたらにずいぶん迷惑をかけた。妖怪連中も、いつまでも夕焼けのまんまじゃ、さぞ困ったことだろう。ずっと、申し訳ないと思っていたんだけどよ」

「あの」
ようやく太一は声を出すことができた。
「……そのお墓……まさか、娘さんの……」
娘に会うためにここまで来たはずだ。たどりついたこの場所で、会えるはずだった。
「来るのが遅すぎたなぁ」
座ったままで墓を見上げ、男はなんだか笑っているような声で言った。
「マヌケな話さ。会いたいってことしか頭になくて、人間の命にゃかぎりがあるってことを、すっかり忘れちまってたよ」
太一は口の中に急に苦いものを感じて、唾を飲み込んだ。
(死んじゃってたんだ……)
会えなかった。相手はもう、この世のどこにもいない。
「そんな……」
どうして。こんなふうに、願いが叶わないなんて。
心臓のあたりがずくずくとした。
「……ここまで、来たのに……」
「仕方がないさ。あれから九十九年も経っちまっているんじゃな」
男は、やっぱり笑っているみたいに言った。

「え？」
太一は目を丸くした。
（九十……九、ねんっ？）
「そんな昔の話なんですか⁉」
ほぼ百年、というか一世紀だ。
墓石の横に刻まれた字を見ると、『享年八十二歳』とあった。
（これって、普通に寿命なんじゃ）
「ど、どうしてもっと早くに、来なかったんですかっ？」
男は今度ははっきりと笑って、太一を見た。
「オレは半端モノだったから。大願成就を迎える今日この日まで、こっちの世界へ来られるほどの力はなかったのさ」
（大願成就……？）
意味がわからなくて太一が首を傾げていると、それまでじっと男を見ていたアカネが、とことことそばに寄って、相手と同じように隣にしゃがみ込んだ。自分の膝を両手で摑んで、男をのぞき込む。
男は怪訝にアカネを見返したが、ふと目を細めた。
「お嬢ちゃん、付喪かい？」

こっくりとアカネはうなずいてから、口を開いた。

「むかしむかし、山の中の村に住む男の人と、きれいな女の人がいました。男の人は女の人のことがとても好きでした。女の人も男の人のことが好きだったので、二人はけっこんしました。かわいい娘が生まれて二人は幸せでした。でも男の人は貧乏だったので、よその山に仕事をさがしに行かなければなりませんでした。それで男の人は、女の人と生まれたばかりの娘を残して出かけていきました」

例の『お話』だ。

男は戸惑った顔をした。

「それで？」

「一年たって、男の人は女の人と娘のためにおみやげを買って、よその山から帰ってきたの」

「そいつは娘に会えたかい？」

ううん、とアカネは首を振る。

「会えなかった。山崩れにあって、男の人は死んじゃったの」

男はしばらく付喪の少女を凝視していた。そうして不思議そうに、

「誰にその話を聞いたんだ？」

「柊二郎」

男がちらと太一に目をやる。「空栗荘の大家さんです」と太一は急いで答えた。

「境界守が？　だが、どうして空栗荘の主がそんなことを……？　オレは、あの人には何も言っちゃいない」
「柊二郎と会った？」
アカネが訊くと、男はためらうようにうなずいた。
「ああ、まあ」
「だからだよ。柊二郎はわかるよ。お話ししなくてもおじさんのこと、わかるんだよ」
「わかる？」
男はなんともいえない顔をした。どうしていいかわからず、困惑しきったみたいな。
「でも、それならなぜオレを……」
言いかけて、ハッとしたように言葉を呑むと、男は地面に目を落とした。
「わかってたってのか？　だったらオレは、……オレはあの人にとんでもなく悪いことをしちまった」
（悪いこと？）
その言葉にひっかかってから、太一は、あっと思った。
（もしかして）
みんなに迷惑をかけたと言っていた。いつまでもつづく夕焼けに、妖怪たちが困っていることも知っていた。

——ずっと、申し訳ないと思っていたんだけどよ。
それはつまり。
「あなたのせいなんですか？　大家さんが目を覚まさないのって」
ああ、と男は言った。
「オレが眠らせた。オレがやったんだよ」
「どうしてそんなことを⁉」
「境界守が結界を守っているかぎり、オレには境界は越えられないと思ったからなぁ」
男は立ち上がると、太一と向き合った。束の間視線をさまよわせ、ここにはない何かを見ているように、遠い目をする。
そうしてひとつうなずくと、言った。
「ああ、でも憑き物はもう境界守から離れたようだな」
「え、本当に？」
「気配でわかる。心配しなくても、あの人はじきに何事もなく目を覚ますだろうよ」
「……よかった」
太一のホッとした様子に、男は本気で申し訳なさそうに「すまなかったな」と言った。
「他の連中にも、オレが詫びていたと伝えといてくれ。本当ならちゃんと頭を下げて謝るのが筋だが、オレにはそれはもう無理だから」

太一の心臓が、どうしてだか急にまた、ずくっと痛んだ。
そういえばと思う。
この人は、このあとどうするのだろう。長い、長い間望んでいたことが叶わなくて、「会いたい」という想いもそのままになってしまって。
どこへ行くつもりなのだろう……？
「あの、しばらく賽河原町にいたらいいんじゃないですか？」
太一はとっさにそう言った。
「俺、今年の盆に死んだ祖母に会ったんです。それだけじゃなくて、夏の盆の祭りの時には、死んだ人がたくさん賽河原町に帰ってきていました。だから来年の盆までいれば、もしかしたら娘さんもこの世に来るかもしれないし、そしたら今度こそ会えるんじゃないかって思うんですけど」
思いつきで口にしたのだが、案外いい考えのような気がする。
目を瞠って聞いていた男は、しかしきっぱりと首を振った。
「来ないだろうよ。少なくとも、オレに会いには来ない」
「なぜですか⁉」
太一を見つめて、男は微笑んだ。
「あんた、間違えているね。――オレは、あの男じゃないよ」

「え……」

「あんたの言う娘の、父親じゃない」

太一はぽかんとした。

ではここにいるこの男は、誰だというのか。

「本当ならオレは、妖かしにだってなれやしなかったのさ。ここにいる人形のお嬢ちゃんみたいに丹誠こめてつくられたわけじゃないし、他人様に褒められるような名品でも価値のある美術品でもない。二束三文のガラクタにすぎなくて、分相応にあのまま地面に埋もれて消えちまうはずだったんだ。でも最後の最後に、あの男の心を受け取っちまった。一目でいいから娘に会いたい、会いたい、会いたいってね。——だから、あちらとこちらの境界を越える方法を考えながら、ずっとあの男の娘を探していた」

心を受け取った？

会いたいという想いはまだこぼれつづけて、気がつけば男のまわりに彼岸花が咲きだしていた。すうっと地面から茎が伸びて、瞬くうちにふわりふわりと花が広がる。

——会いたい、会いたい、会いたい。一目でいいから。

受け取った心の分だけ、その想いはこの妖かしも同じだろうに。

男は足下の花弁をひとつ、摘み取って掌にのせた。いきなりそれを、くしゃっと握り潰して、言った。

「あの時、死んだあの男のそばにもこの花が咲いていてね。オレが妖かしになって初めて目にしたのが、この赤い色だった。……ああ死人花だって思ったら、無性に悲しくて、恨めしくて。なのにこうして咲かせちまう。半端モノはどこまでいっても半端モノで、験が悪いったらないよなぁ」

男はやはり笑顔だった。

悲しいと泣きもせず、辛いと嘆きもせずに、笑っている。

「悪くないよ。彼岸花はいい花だって、初緒が言っていたもん」

その時、アカネが声をあげた。

「彼岸花は天界に咲く花なんだって。仏さまの一番近くに咲く、とってもめでたいきれいな花なの」

男はアカネを見て、それから掌に残った赤い花びらを見た。

「仏さまの近くに咲く花？」

「うん」

そうか、と男は呟いた。きれいな花だったんだなと言って、今度はそっと花弁を手の中に握り込んだ。

「それならいい。それなら、きっとあの男も救われただろうさ。……あの世で、もうとっくに娘にも会えただろうから」

男はふたたび墓に目をやった。

「なあ、立派な墓じゃないか。こんな墓をたててもらえて、死んだあともちゃんと花を供えてお参りしてもらえるんだ。子供も孫もたくさんいて、幸せだったに違いないや。だったらそれで十分だよ、なあ」

晴れ晴れと言って、男は笑った。

初めて心の底から笑ったように見えた。

「だから、もう、いい。オレは、これでもういいや」

ことん。その瞬間、何かが地面に落ちる音がした。

「あ……？」

太一は目を見開く。

男の姿が消えていた。たった今まで話をしていたのが嘘みたいな、呆気ない消え方だった。

妖かしが立っていた場所に近寄って、太一はそこに落ちていたものを拾い上げた。

掌にのるくらいの、小さな太鼓だ。両脇に色糸で繋いだ鈴がついている。木でつくった柄があって、それを持ってくるりと回すと、鈴がころんころんと太鼓の面にぶつかって音をたてた。

太鼓に張られた和紙の柄は、月に跳ねる兎。

しかし見るからに古びてボロボロだ。和紙は汚れて破れかけ、柄も半分腐っている。鈴には赤い錆が浮いていた。

「これって……」
「アカネ、知ってるよ。これ『でんでん太鼓』っていうの。子供が遊ぶオモチャだよ」
太一の手にあるそれをしげしげと見て、アカネが言う。
「うん」
ああそうだ、と太一は思う。
思い出した。夢の中であの男が持っていた、妻と娘へのおみやげ。妻には櫛を、幼い娘にはこの『でんでん太鼓』を、雨に濡れないようにしっかりと懐に抱いて。
（これが）
妖かしの、正体だった。

ころん、ころん。
振るたび、錆びた鈴が太鼓を打って、小さな音が響く。
「あのおじさんは、付喪だったの」
「アカネと同じ？」
「うん。でもね、アカネは初緒から魂をもらったから生まれてすぐに付喪になれたけど、本当はお皿でも壺でも下駄でも、物や器は九十九年待たないと付喪にはなれないんだって」
「……そっか」

ころん、ころん、ころん。

そのための、九十九年。今日が大願成就だと、妖かしは言っていた。

付喪になってようやく今日、望みを叶えるためにあちらとこちらの境界を越えてきたのか。

アカネが小さく「あっ」と言った。

太一の手の中で、『でんでん太鼓』がふわりと崩れた。すでにボロボロであったそれは、まるで灰が風に吹き散らされるように、太鼓も柄も輪郭をなくしてあっという間に跡形もなく消え失せた。

最後に響かせた、ころんという音ひとつを残して。

「消えちゃったね」

アカネが言う。

太一は空になった手を見た。

「こんなふうにいなくなるんだ……」

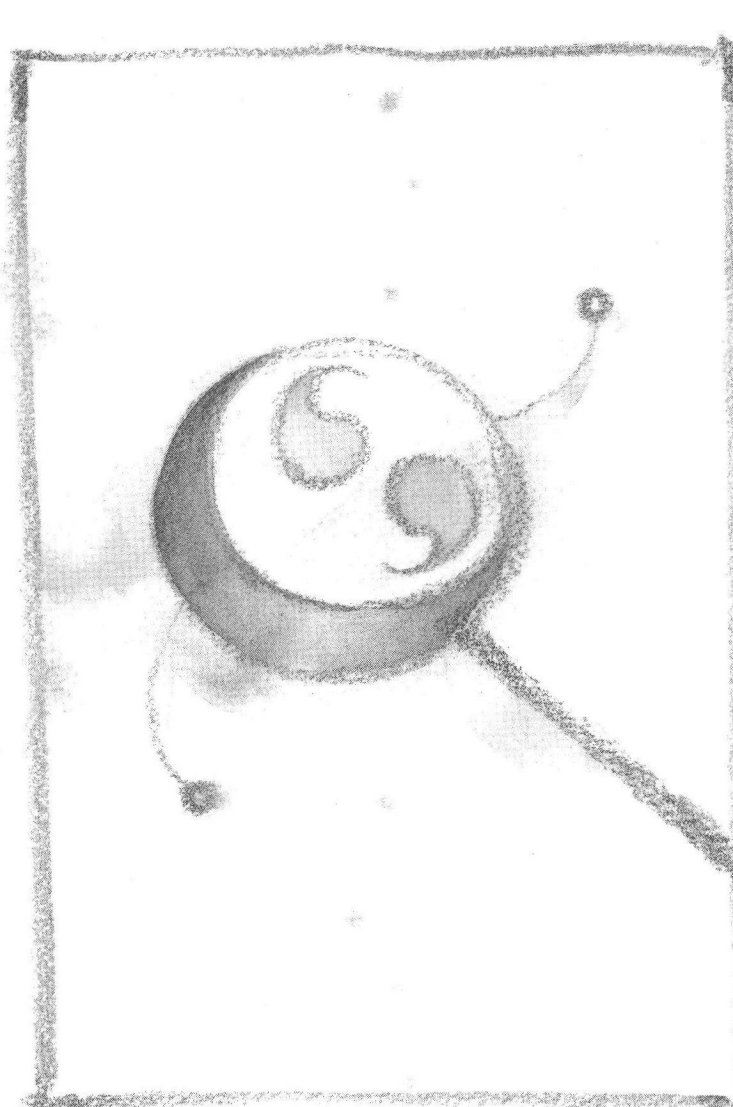
こんなに呆気なく。まるで最初から何もなかったみたいに。

——もういいや。

その言葉を、悲しいとか寂しいとか言ってはいけないのかもしれないけど。

痛みはまだ胸の奥底に、確かにあって。

つん、と彼のそばに寄り添ったアカネが、シャツの裾を引っ張った。大きな目が、じっと見



上げている。
「帰ろう、太一」
「……うん」
気がつくと、あたりに咲いていた彼岸花も消えている。
妖かしの想いとともに、あれほど咲き誇っていた赤い色は透き通るように儚くなって、もうどこにも残ってはいなかった。

7

歩き出してしばらくすると、また薄闇の中にいた。どうやらちゃんと霊道に入れたようだ。
（空栗荘、空栗荘っと）
風景は来た時と同じだ。薄ねず色の空間に灰色の樹々が浮かび上がって、その合間を緩やかに曲がりくねった白い道がつづく。
空栗荘に帰ることだけを考えろとミヨシに言われたから、太一は一生懸命にそうした。他のことはなるべく考えないようにして、空栗荘の古い旅館みたいな建物や自分の部屋のことを、何度も頭に思い描いた。

そのうち時間も距離もわからなくなった。
（どこまで行くんだろう）
もうずいぶん歩いたような気がする。行きは緊張していたせいか、それほど時間がかかったようには思わなかったのに、今はどこまで行っても出口であるはずの光が見えない。道ははるか先まで薄闇に呑まれたままだ。
（本当に出られるのかな）
もしこのまま出口が見つからなかったら、どうしよう。アカネと一緒に歩きながら、そんな不安が次第に太一の胸の中でふくらんでゆく。
クスっと後ろで笑い声がした。
「え？」
振り返りそうになり、太一はとっさに腹に力をこめた。
（後ろを見たらヤバい）
クスクス、クス……。
背後でふたたび誰かが笑った。一人ではない。数人の笑い声が、それに重なった。
ひひひ。ケケケ。アハハハハ……。
「もしかして、誰かついてきてるのかな」
太一は息をころすように、アカネに話しかけた。

うん、とアカネはうなずく。口をへの字に曲げて、顔をしかめた。
「さっきからずうっと、いっぱい後ろからついてきてるよ」
「い、いっぱい⁉」
そのとたん、ざわっと後方の空気が揺れた。大人数がそこにいる気配。ドスっと地面を踏みならす音、バタバタと駆け回る足音まで聞こえてきた。
(これってもしかすると、すごくまずい状況なんじゃ……?)
「後ろ見ちゃダメ。絶対絶対、ダメだからね」
アカネは太一の手を摑むと、引っ張るようにして足早に歩き出した。
一緒に足を速めて道を急ぎながら、
(結局、振り返ったらどうなるんだろう)
この期に及んで太一は疑問に思う。
そういえば後ろを見てはいけないとは言われたけど、見てしまったらどうなるかは聞いていなかった。
もっとも、どうなるかはすぐにわかったが。
背後から声が追ってきた。
——その腕をくれ
——その足をくれ

――その目玉をくれ　肝をくれ
――肉をくれ　骨をくれ
――美味そうだ、美味そうだ、美味そうだ……
（あ、そういうことか）
なんだか今にも、がりがりと頭から喰われそうである。
「太一、早く早く！」
アカネとともに走りながら、太一は必死に前方に目をこらした。
（空栗荘、空栗荘、空栗荘）
あそこへ帰るのだと、呪文のように心の中で繰り返す。――と、その太一の目に、遠く、はるか遠く道の先に、針の先でつついたほどの小さな光が映った。
（あそこ……！）
その時だ。
背負っていたリュックサックをぐいっと引っ張られた。
「うわ」
（奪られる!?）
アカネを運んできたリュックサックだから中は空だが、太一はとっさに肩にかけた紐を摑んで、後ろを振り返った。

しまったと思った時は遅かった。

ヒヒヒ……。

けっけっけ……。

笑い声が押し寄せた。

それは最初、たちふさがる真っ黒な大きな岩のように見えた。すぐに人や獣やそれ以外の奇妙なかたちをした黒い影が、団子のように群れて蠢いているのだとわかった。腕や触手やごつごつした頭部らしきものが、あちこちから突き出して揺れている。

見た瞬間、全身にぞっと震えが走った。

太一が振り返ったのを知って、影たちはカッと目を開いた。無数の冷たい火がいっせいに薄闇に灯ったかのようだ。

アカネが太一の前に飛び出した。

「バカ！　あっちへ行っちゃえ！　太一に何かしたら許さないんだからね、アカネはあんたたちなんかへっちゃらなんだから!!」

付喪の少女は地団駄を踏むように足をバタバタさせて、叫ぶ。

「あっち行かないと、怒るよ！　アカネは怒るとこわいんだよ！　すごくすごくこわいんだからねっ！」

もちろんそんな脅しが効く相手ではない。

黒い影たちがあきらかに自分の言葉を無視したのを見て、アカネは「むぅっ」と唸った。

（やばい。キレそう）

太一がぎょっとした瞬間、ぴしっと空気が音をたてた。アカネの髪がふわりと逆立つ。その小さな身体から、熱い陽炎のようなものが揺らぎあがった。

「バカバカ知らないんだからもうアカネは怒った――！」

カンカンに怒って、少女は叫んだ。

「ちょ、ちょっと待って、アカネ……」

守ってくれようとしたのはありがたいが、こんなところでどっかんと暴走だか暴発されてはたまらない。とにかくキレたアカネは見境がなくなるらしいのだ。

（ていうか、俺までとばっちりをくうしっ）

太一は慌ててひょいと後ろからアカネを持ち上げると、しっかりと脇に抱えた。もともと人形の重さしかないので、とても軽い。子猫がフーフー怒るみたいにジタバタするアカネを横抱きにしたまま、踵を返して全速力で駆け出した。

すかさず黒い群れが追ってきた。

（た、確かこれ）

光にむかって走りながら、太一はジーパンのポケットからミヨシにもらったヒトガタを取り出した。リュックに入れておかなくてよかった。言われたとおり、ふっと息を吹きかけて、背

後に放った。

——肉をくれ　骨をくれ

——美味そうだ、美味そうだ、美味そう……

太一の身代わりとなったヒトガタに、黒い影がいっせいに襲いかかる。

ばりばりと貪り食うような気味の悪い音が聞こえて、追ってくる気配が一瞬、途切れた。どんな状況なのかは、想像したくない。

（今のうちに）

ヒトガタはこれだけだ。次に襲われたら逃げられない。そうならないうちに。

太一は必死で走った。息がきれて、心臓がドクンドクンとすごい音をたてている。

霊道の外に繋がる光は、次第に大きく、眩しくなっていった。

（あとちょっと）

突然、背後でぞわっと空気が揺れた。

——その腕をくれ

——その足をくれ

まるで耳元で言われたかと思うほど近くから、声が響いた。

（追いつかれた!?）

黒い影たちの凍るような気配が、後ろから押し寄せてくるのがわかる。

出口まで、あと少し。あと、ほんの少しの距離なのに……！

と、その時。

目の前の光の中から、その声が聞こえた。

「神火清明、神水清明、神風清明！」

（え……？）

言葉とともに、暖かな風のようなものが、太一の傍らを駆け抜けていった。

その瞬間に追ってきたモノたちの気配がふつっと消えた。

「こっちですよー、早く早く」

光の中からふたたび声がした。思い切り力がぬけるような、呑気な声だ。

太一は歯を食いしばると、アカネを横抱きにしたまま、霊道の外へと飛び出した。

「はい、お帰りなさい」

そのまま転がるように地面にへたりこんで、息が切れてしゃべることもできないでいる太一を見下ろして、時国杉二郎はニッコリと笑った。

「昔は『夢祓い』っていって、各地を巡っては人の見る悪い夢を祓うのを生業としていた連中がいたんだけどね。そいつらが薬だと言って売っていたのが、この獏さ。なんでも目の玉が飛び出るほどの値がついていたらしいよ」

空栗荘の食堂で、お露さんは茶を飲みながら、テーブルの上に置かれた白い粒に顎をしゃくった。

獏は二粒、ひとつはクロ爺が運んできたもの、もうひとつは十遠見の祓いが成功した結果、柊二郎の口から出てきたものである。

「ま、人間がおいそれと手に入れられるシロモノじゃないから、当然さね」

「ふむ。しかしそういう職業にいる者は当然、獏をこの状態で確保するルートを持っていたはずだから、これが高額で取引されたとなるとボロ儲けだな」

すでに服を着替えてくつろいでいた十遠見が、獏をじっと見つめて言った。頭の中で、薬の価値について怪しい計算でもしているようだ。

「この薬でたちどころにあなたの悪夢を消してごらんにいれましょうってわけ？　獏が食べるのはいい夢でも悪い夢でも、どうってことない夢でも関係ないのにね」

古都子がテーブルの上にぐったりと頭と腕を投げ出した格好で、そんなことを言う。彼女は先ほど裏の賽河原町から戻ったばかりだったが、さすがに駆けずり回ってくたびれたようだ。

お露さんは肩をすくめると、

「どうせ喰われちまえば、夢の中身をおぼえている人間なんていやしないんだから、文句をつけるヤツはいないさ」

「ところでこうなっている獏って、冬眠状態と考えていいのかしら？」

「簡単に言えばそんなところだ」と十遠見。
「活動停止期に入った獏は、このように粒状になって眠りにつく。この形態でなら数百年でも眠っていることが可能らしい。活動期になれば、夢を喰うために人から人へと次々に取り憑いていくが、その時にどんな姿をしているかは、実はわかっていない」
「身体が熊で顔が象で、足は虎、尾は牛、とか言われていなかったかねえ」
「そういった様々な動物の寄せ集めのように言われている妖怪は、たとえば鵺もそうだが、えてして人間が勝手に姿を想像して伝えたものが多い。本当は誰一人その姿を見たことがないから、既存の生物にあてはめて表現するしかなかったわけだ」
蘊蓄を傾ける術者に、なるほどねと気のない返事をして、お露さんは食堂の入り口のほうに顔をむけた。
いかにも胡散臭そうに、
「――で、あんたはまた、デカい図体で何をうろうろ歩き回っているんだい。それこそ檻の中の熊か虎じゃあるまいし」
というのは、やはり少し前に空栗荘に戻ってきていたミヨシが、さっきから苛立ったような足取りで、食堂の中を行ったり来たりしているからだ。
「そういえば、レンは大丈夫なの？」
古都子が訊く。

「部屋をのぞいたら、もう起きとった。一応、夕飯まで休めて言うといたけど」
唸るように言って、ミヨシは舌打ちした。
「それより問題は太一や。まだ帰ってけえへん」
他の三人は顔を見合わせた。
「少し落ち着いたらどうだい。何時間も経ったわけじゃないんだから」
「俺はしくじったかもしれへん。こっちに戻らんと、あのままあそこにおったらよかったやろか。……いや、無理矢理でもあいつと一緒に霊道に入るべきやったかも」
「太一がもとの場所に戻ってこないのはわかっていたんだから、ここで待っているしかないだろ」
しかしお露さんの言葉はまったく耳に入っていないらしく、ミヨシは「くそっ」とまた唸った。
「あかん。――俺やっぱり、迎えに行ってくるわ」
「今から霊道の入り口を探すってのかい？　だったらせめて、大家が目を覚ましてからにしな。そのほうが結局のところ、手っ取り早いだろうよ」
とたん、ぴたっとミヨシの足が止まる。思い切り険悪な目で、じろりと他の三人を見た。
「そんなら訊くけど、大家はいつ目を覚ますんや？　ていうか、獏を祓い落としたのに、なんであいつはまだ寝とるんや――っ!?」

その言葉どおり、実は大家はまだ目を覚ましていない。本来、獏が口から出てきた時点で起きてもいいはずなのに、いまだに自分の部屋で気持ちよく眠っているのである。
「どういうことや、十遠見！　おまえまさか、ミスしたんとちゃうか⁉」
「失敬な。私のやることにぬかりはない」
「おまえがぬかりないのは、金が絡むことだけやんか！」
「……でも確かにヘンよね」
それまでくたっとなっていた古都子が、身体を起こして首を傾げた。
「獏が離れたのだから、柊さんが眠りつづけている理由はないはずなのに」
「アタシが思うに、単なる寝坊だね」
寝起きが悪いったらありゃしない。まあいつものことだけどさ、と呟いて、お露さんはずずっと茶をすする。
そうして、古都子に目配せした。
「だからね、そろそろあの場所に姿を見せるんじゃないかねえ」

8

「お、大家さん……」

やっと口がきけるようになって、それでもまだ肩で息をしながら太一は立ち上がった。

（よかった。目が覚めたんだ）

四日ぶりだ。それ以前も時々しか見かけなかったし、柊二郎と顔をあわせるのはなんだかすごく久しぶりな気がする。

いつもと同じ藍色の作務衣。ひょろりと痩せていて、色が白くて、目尻と眉が下がったへらりと呑気な顔をして。

大家はしばらくニコニコしながら太一を眺めていたが、ふいに言った。

「じゃあ、一緒に行きましょうか」

「え、どこへ？」

聞き返した太一に答えず、踵を返してすたすたと歩き出す。

太一の横でアカネが、黙り込んだまま柊二郎の背中と太一を交互に見て、神妙な顔で首を傾げた。

その時になって太一は、空が赤いことに気づいた。
――夕焼けだ。
（あれ、ここってまさか、妖怪の町のほうなのか……？）
そうではない。どう見ても、賽河原町の表側のほうの町並みだ。なんとなく見覚えがあるから、空栗荘の近くであることは間違いない。
慌てて時間を確認すると、もう夕暮れの時刻だった。
なんだ、と太一は納得する。
（そっか。こっちも夕焼けの時間なんだ）
昼間の熱を吸い込んだ空気は、まだもったりとぬるい。どこかでヒグラシが鳴いている。
のろのろと歩き出して、しかし太一は、ふと違和感におそわれた。
（なんだろう……？）
何もヘンじゃない。なのに、何かがおかしいような。そわそわと落ち着かなくて、ちょっとだけ不安な気分になる。
「太一くーん、おいてっちゃいますよー」
「あ、はい」
先に行ってしまった柊二郎に、足を速めて追いついた。アカネも黙ってついてくる。大家と肩を並べて歩きながら、太一は相手の顔を横目で見た。

「んー、僕の顔に何かついてます？」
「い、いえ」
（本物の大家さん、だよな？）
さっき太一が襲われかけたところを助けてくれたのだし。そんなことをボンヤリと考えていたものだから、
「彼、どうしました？」
いきなり訊かれて、太一は意味がわからずに目を瞬かせた。
「彼？」
「でんでん太鼓」
呆気にとられて、太一は相手を見る。
「……消えました」
そうですかと柊二郎は呟いた。
「月に跳ねる兎だったでしょう？」
「え……」
「太鼓に描かれた柄ですよ。あの絵のおかげで、一応は月に縁のある妖かしってことで、彼はささやかながら月の満ちる時期には力を得ることができたわけです」
「……」

柊二郎の横顔を見ながら、太一は小さく息をつめた。
——柊二郎はわかるよ。お話ししなくてもおじさんのこと、わかるんだよ。
どうしてだろう、と思った。
あの付喪の正体を知っていて。境界を越えようとしていることも、その理由もわかっていて。
どうしてこの人は、何もしないで放っておいたんだろう。
カナカナというヒグラシの声が、いっそう高くなった。
陽は大きく傾いて空は赤く、燃えるようにさらに赤くなって、妖怪の町で見た夕焼けにそっくりだ。なんだかこのまま、こちらの世界もこの夕暮れに閉じこめられてしまいそうな、そんな違和感に太一はまた、とらわれる。
柊二郎の足が止まった。
「はい、着きました」
空がいきなり広くなって、子供たちの笑い声が聞こえる。
そこは、公園だった。
(でも、どうしてこんなところに……？)
太一が不思議に思っていると、柊二郎はさっさと公園の敷地に入って、植え込みの近くにあるベンチに腰を下ろした。
おいでおいで、と手招きされて、太一もその隣に座る。アカネがさらにその横に腰かけて、

太一に寄り添うようにシャツの裾を摑んだ。

たいして広くはない公園だ。小さな子供たちの姿があちこちにある。駆け回ったり土をこねたり、ジャングルジムやブランコや滑り台で楽しそうに遊んでいる。笑い声が夕空に響いていた。

「アカネも遊んできたら？」

傍らの少女がずっとだんまりなのが気にかかって、太一は話しかけた。

アカネは、ふるふるっと首を横に振った。太一のシャツをさらに強く摑む。

「遊ばない」

「どうして」

「ダメなの。柊二郎のそばにいなきゃいけないんだよ。柊二郎のそばを離れたら、夢に呑み込まれてそれっきり、アカネも太一も帰れなくなっちゃうかもしれないもん」

「帰れなくなるって……」

どういうことだろう。アカネは彼を見上げて、きっぱりと言った。

「ここ、柊二郎の夢の中だから」

「ええ……!?」

太一は呆気にとられて、思わずあたりを見回した。

（大家さんの夢の中？　ここが？）

――柊二郎が見ている夕焼けの夢。

つまり、霊道から出てきたら大家の夢の中にいたということだろうか。……どうしてそんなことに？

（だって俺、空栗荘に帰るつもりだったのに）

ということは、本人はまだ目が覚めていないってことか？　いやその前に、他人の夢に入り込むなんて、そもそもできることなのか⁉

混乱しながら柊二郎を見ると、相変わらずニコニコしながら、子供たちが遊んでいるさまを眺めている。

「あ、あの、大家さん」

口を開いたとたん、

「太一君は、逢魔刻って知ってます？」

先にそんなことを訊ねられた。

「オウマガドキ？」

「境界守があちらとこちらをどれだけ隔てたところで、そのふたつの世界がほんの一瞬、重なりあってしまうことがあるんですよ。たとえば昼と夜が入れ替わるほんのいっとき、道ですれ違った相手が人間ではないモノだとあとで気づくような……。そういう瞬間を、昔の人は逢魔刻と呼んだんですけどね」

「はあ」
「だけど僕は、その一瞬がとても素敵なことのように思えるんです」
「素敵……ですか？」
柊二郎はうなずいた。目を細めて、子供たちを見つめたまま。
「だってね、逢魔刻には人間と妖かしとがまぜこぜになって、分け隔てなく同じ場所で同じことをしていたりするんですよ。ずうっとそのまま一緒にいられるのなら、僕のような境界守なんていりませんよねぇ」
そんなことを言って、空栗荘の大家は「ほら」と指さした。その先に目をむけて、太一はぽかんとした。
いつの間にか、遊んでいる子供たちの傍らに、異形（いぎょう）たちの影があった。あっちこっちで走り回る子供と一緒に走り、一緒に遊具で遊んでいる。木に登って枝を揺らしているのは、小鬼のような妖かしだ。やたら手足の長い毛だらけの妖かしがブランコを押すたび、乗っている子供が歓声をあげる。空中を泳ぐ金魚の妖怪に手を伸ばす子供がいれば、子供がつくるシャボン玉を追い回している人間の格好をした猫がいたりする。
（なんか、すっごい夢だ）
半分呆（あき）れながら、太一は首を傾げた。
「でも、まぜこぜだったらダメなんでしょう？」

以前にミヨシが言っていた。あちらとこちらが交われば、よくないことのほうが多いのだと。

「そうなんですー。ダメなんですー」

気の抜けるような笑顔と口調で、大家は答える。いつものことだが、どこまで本気なのかよくわからない男だ。

会話がそこで途切れ、何を話していいのかわからなくなって、太一は子供たちと妖かしがともに戯れる不思議な光景を、ふたたび眺めた。

（……あれ？）

ふと。公園の片隅の樹の下、ついさっきまで誰もいなかったはずの場所に、人影が佇んでいることに気づいた。あきらかに子供でも妖かしでもない。

大人の女性だ。

淡い色のワンピースと白いニットの薄いカーディガン。細い肩に夕暮れの光が落ちている。

そうしてうっとりと、少女のようなあどけない表情を浮かべて、その人は空を見上げていた。

ほんのりと夕焼けの色を映したその横顔が、清楚で美しい。

誰だろう、と太一は思う。

（どうして大家さんの夢の中に、あの女の人がいるんだろう？）

横目でそっと隣をうかがったが、柊二郎はまるでその人のことには気づいていないみたいに、相変わらず目を細めて、遊んでいる子供と妖かしを見ていた。

「……大家さん、あそこに」
思い切って太一がその女性を指さした時である。
「ああ、やっぱりここにいた」
いきなり聞き覚えのある声がした。
太一が驚いてそちらを見ると、公園の入り口から足早にこちらにむかってくる古都子の姿があった。
一瞬、太一は赤い大気がざわめいたような奇妙な感覚に襲われた。閉ざされた夢の中の止まってしまっていた時間が、彼女の出現で唐突に動きはじめたような。
「あれ、太一君とアカネちゃんもいたんだ?」
古都子はベンチの前までくると、腰に手をあてて、座っている柊二郎を見下ろした。
「柊さん、もうそろそろ本当に起きてくれませんか? みんな困っているわよ」
「あはは。すみません、古都子さん。僕はどれくらい寝ているんでしょーか?」
「四日」
「そうですか、道理で」
大家はへらりと笑って立ち上がった。
「ものすごーくお腹がへりました」
「今夜はお月見だってことも忘れないでね」



子供に言い聞かせるような口調の古都子に、
「はいはい」
調子よく答えた柊二郎の身体が、ふうっと透き通りはじめた。太一が目を瞠った次の瞬間、その姿は煙のように消え失せる。
「大家さん……!?」
空を赤く染めていた夕焼けが、そのとたんに陰った。薄青い黄昏があたりに広がって、夜を予感させる小さな風がひやりと駆け抜けた。どこかで、リーリーと虫の声が響いている。
気がつくと太一は、古都子やアカネと一緒に、誰もいない公園に立っていた。
あれほどいた子供たちも妖かしも、そしてあの女の人の姿も、見回してももうどこにもなかった。

「これで今頃は、妖怪の町のほうも夕焼けは消えたはずよ」
太一に笑いかけてから、古都子はあらためて気づいたように、
「あ、今まで柊さんの夢の中にいたことは知っていた？」
「はい。アカネから聞きました」
「そっか。じゃ、わかると思う。たった今柊さんが目を覚ましたから、彼の見ていた夢もこれで終わりなの」

太一はもう一度、あたりを見回した。

空は金色の光の筋を残してまだ明るいが、公園の周辺の家々にはすでに照明が灯っている。消え残る昼と訪れ来る夜。光と闇が入り交じる、一瞬のあわいの刻。

柊二郎の見ていた夢がなくなって、これがこの時間の現実の風景だ。

「それにしても、どうして太一君がここにいるの？　帰ってこないって、ミヨシがずいぶん心配していたわよ」

言われて、太一はアカネと顔を見合わせた。

「えっとね、黒いのがいっぱい襲ってきて、アカネは太一を守ろうとしたんだよ。でもね、アカネが守るより先に柊二郎が太一を助けたの」

アカネが真剣な顔のわりに端折った説明をする。

「それでこっちに戻ってきたら、柊二郎の夢の中だったの」

「うーん、なんだかよくわからないけど……、霊道で襲われたの？　大丈夫だった？」

声に気遣わしげな響きがあったので、太一は慌てて「大丈夫です」と答えた。

「古都子さんこそ、どうやって大家さんの夢に入れたんですか？」

「前にも柊さんがあの夢を見ている時に、この公園にいるの見かけたことがあるの。たまたま、本当に偶然にね。本人は眠っているはずなのにこんなところにいるから、ビックリしたわ。でも、それでわかったのよ。――柊さんにとって本当の意味で夢が現実になるのは、この場所

だけなんだって」

「この場所だけ？」

こんな、住宅地の隙間にあるような、小さな公園で。

「ここね、いつ見ても誰もいないの。人が無意識に足を踏み入れない場所ってあるでしょう？地形や土地のいわくや、その他にいろいろな力が働いて、自然に人間をよせつけなくなっているような場所。ある意味、そういうところは人間の世界の中にある異界よ。そこでは常識外のことが起こっても不思議ではないし、この公園もそういった場所のひとつなんだと思う。異界っていうにも、すごくちっぽけな場所だけど」

（この場所が異界？）

こちらの世界にある、とてもちっぽけな。

「でも俺、ここに入っても平気でしたけど」

「だって太一君は、妖かしにももう慣れているし、妖怪の町にも行って異界慣れしちゃってるから」

「はあ」

異界慣れって、なんだかすごい言葉だ。

（……でも、だったら）

太一は思う。

この公園で、柊二郎はいつもさっきの光景を見ていたのだろうか。いつもいつも、同じ光景を見ていたのか。

一緒に遊ぶ妖かしと人間の子供たち。そして――。

「……あそこに、女の人がいたんですけど」

太一は公園の片隅にある樹を指さした。

「あそこに立っていて、でも大家さんは気がついていなかったみたいで」

気がついていなかったはずなどない。だってあれは、彼の夢の中のことなのだから。

古都子はちょっと困った顔をして、「ああ、うん」と呟くように言った。

「あの人は、私も見たわ」

「あれ、誰なんですか？」

訊かないほうがよかっただろうか。古都子が、言うのをためらっているのがわかった。

「――座ろ」

やがて、考え込む短い間のあとに、太一を促して古都子はベンチに腰を下ろした。

「こういうことは柊さんが話すべきかなと思っていたけど、こうなったら誰が言っても同じかもね。柊さんだって、わかっていて太一君をここに連れて来たんでしょうし」

太一がベンチに座ると、アカネももう一度ちょこんと隣に腰かけた。

「あの女の人は、だいぶ前に別れた柊さんの奥さんなんだって」

「……え」

古都子がさらりと何事でもないように言ったものだから、逆に意味がよくわからなかった。太一はぽかんと口をあける。

（奥さん……て）

「大家さん、結婚、していたんですか？」

やっと訊ね返した。

「私もお露さんから聞いたの。柊さんが二十代の時の話だから、もう十何年か前のことみたいよ。だから夢に出てくるのは若い頃の奥さんの姿なんでしょうね」

「どうして……」

太一は口ごもった。なぜ奥さんと別れたのかと、質問するのをためらった。だが古都子にはわかったらしい。

「多分、柊さんが空栗荘の主で境界守だから、かな」

「だって、でも」

「境界守は今いる場所からずっと動くことはできないから、そういう人の奥さんになるのはすごく覚悟のいることだと思うわ」

でも結婚するくらいなら、その人にだって空栗荘の事情はわかっていたはずだし、覚悟くらいあるんじゃないだろうかと太一は思った。……それとも、違うのか。そんな簡単なものじゃ

ないのだろうか。
　人は何がきっかけかわからないまま、壊れてしまうことがある。太一の母親のように。
「……それで奥さんが出て行った、とか」
「ううん。言い出したのは柊さんのほうだったって。それで奥さんは、今は別の男性と結婚して幸せに暮らしているらしいわよ。お露さんが言うには」
「え、別れるって言い出したのは大家さんのほうなんですか⁉」
「うん」
　古都子はベンチに座ったまま、空を見上げた。今はもう、空の縁がほんのわずか金色を残しているだけだ。地上の黄昏はいっそう青い。
「こんなのは全部憶測だけど……。もしかしたらね、柊さんのほうが耐えられなかったんじゃないかと思う」
「何がですか？」
「愛する人を、自分の理由だけであの場所に縛りつけておくこと。妖怪や霊や、その他の人間ではないモノたちと一生関わらせて、見なくてもいいものまで見せてしまうこと。だって、それが平気じゃない人間のほうが、世の中には多いから」
　でも、と太一は言いかける。軽く唇を噛んでから、
「大家さんは、それでいいんですか？」

「よくはないから、あんな夢を見てるんじゃない？」
未練てことよねと言って、古都子はふうっとため息をついた。
（あの夢……）
大家がたびたび見るという、夕焼けの夢。その風景の中にだけいる女の人。
「でも、どうして夕焼けなんだろう」
「柊さんは何か言っていなかった？」
「べつに……」
太一はそこで黙り込んだ。
逢魔刻（おうまがどき）。昼と夜の入れ替わるほんの一瞬、あちらとこちらが重なりあう時刻。
空が夕焼けに彩られる時間。
――僕は、その一瞬がとても素敵なことのように思えるんです。
「そういえば大家さん、言ってました。逢魔刻には人間と妖かしとが同じ場所で同じことをしていて、そんなふうにずっと一緒にいられるのなら、自分みたいな境界守はいらないって」
「そう」
「……もしかして、大家さんは本当は、境界守にはなりたくはなかったってことなのかな」
人間と妖かしを隔てる必要さえなければと、望んでいるのだろうか。だからさっきのような光景を、夢に見ているのだろうか。

どうかしら、と古都子は首を傾げた。

「もし自分が境界守じゃなかったら、というのは柊さんも考えたことはあると思う。でも、そうであったらと憧れるのと、それを現実にしたいと願うのとは、少しだけ違う場合もあるから。本気で境界守をやめたいと願っていたら、柊さんは今頃あそこにはいなかったと思うわよ」

「そう、なんですか？」

古都子は微笑んだ。

「諦めてあそこにいるわけではないんじゃない？　そういう人じゃないもの。――なにしろ、部屋番号が自分でつけた７８３７４の『悩みなし』なんだから」

「……」

こういう場合、部屋番号でその人物のすべてが判断されてしまうのは、いかがなものか。

（やっぱり俺、０１４４は変えてもらいたいかも）

でも、古都子の言うとおりであれば、いいと思う。７８３７４の番号が、柊二郎にとって本当のことだというほうが、ずっといい。

だって、今なら太一にもわかるような気がするのだ。

なぜ柊二郎が『でんでん太鼓』を、境界を越えようとしているのを知っていたのに、止めなかったのか。

（もしかしたら、大家さんは）

自分は他人の嬉しいとか悲しいとかいう感情がちっともわからない人間だから、こんなのはただの思い込みなのかもしれない。本当の理由は全然違っているのかもしれない。それでも、と太一は思う。

——会いたい。

きっと柊二郎は止められなかったのだ。あの妖かしの想いがわかってしまったから。

同じ想いが、自分の中にもあったから。

そう考えたら心臓のあたりがまた、ずくっと痛くなる。『悩みなし』が本当ならいい。そのほうが、少し安心できる気がする。

ふと見ると、傍らのアカネが太一にもたれかかってウトウトしていた。

「アカネちゃん、疲れたのね。——そろそろ帰ろうか、太一君」

「あ、はい」

アカネの身体を揺さぶったら、よほど眠いのか唇を尖らせてぐずりだした。

「おんぶしてくれなきゃ、やだ」

「自分で歩けるだろ?」

「やだやだやだ」

仕方がない。太一はため息をつく。

ほら、と背中をむけたら、アカネはたちまち機嫌をなおして、太一の首に両腕を回しておぶ

さった。少女のおかっぱの髪が首筋に触れて、ちょっとくすぐったい。
誰かをおんぶするなんて、ちょっと前までは太一には考えられなかったことだ。
（まあ、人形だけど）
アカネを背負って立ち上がってから、まだ訊いていないことがあったのを、太一は思い出した。
「そういえば、大家さんの憑き物って何だったんですか？」
「獏よ。夢を食べる妖怪」
「バク？」
そのあとの古都子の説明だと、獏という妖怪はひとつの夢を食べ尽くすまで、その夢が消えてしまわないように取り憑いた相手を眠らせておくのだという。
「ところが柊さんの夢ときたら、妖怪の町を丸々夕焼けにしちゃうくらいの規模というか量というか、でしょう？　さすがに食べきれなくて、獏も柊さんから離れるに離れられなくなっちゃったってわけ。正体がわかれば、祓うのは簡単だったみたいだけど」
「四日かかっても食べきれなかったって、すごいですね」
ほんとにね、と古都子は肩をすくめた。
「でも柊さんの一番すごいところは、そもそも夢を実体化させるような力があることと、しかもその力がカケラも役に立たないってことだわ」

「……」

確かに、夢が現実にあらわれてそれが何の意味があるかといえば、多分、意味は何もない。特に今回は、あちら側の賽河原町の住人たちがひたすら迷惑だっただけだ。

「ちょっと待ってね。空栗荘に電話するから」

公園を出て少し歩いたところで、古都子は携帯電話を取り出した。

「あ、お露さん？　古都子です。柊さん、やっぱり公園にいました。……うん。……え、寝起きが悪い？　でももうそっちに戻ったから、すぐに起きると思う。……ええ。あ、それと太一君もここにいるわ。柊さんと一緒に公園にいたの。……うん。うん、そう。今から帰るから。……え？」

急に古都子は呆れた声を出した。

「ミヨシが？　……そんな、いいわよ。遠くにいるわけじゃないんだし。……え、もう出た!?　あーあ」

通話を切ったあと、古都子は太一を見てクスっと笑った。

「ミヨシが迎えに来るって」

「ここに？」

「よっぽど心配だったのね。太一君が一緒にいるって聞いたとたんに、飛び出して行っちゃったんですって。……歩いていたら途中で会うわよ。行きましょ」

ミヨシの怒った顔が目に浮かぶ。太一は背中から聞こえてくる、くう、すう、という寝息に耳をすませた。

「あの……俺」

言いかけて、口ごもった。でも思い切って、また言葉をつづけた。

「初めて空栗荘に来た時に、妖怪の町で見た夕焼けがとても綺麗で、俺はあっちの世界はずっと夕焼けのままのほうがいいなって思っていたんです。異世界なんだから、それだってべつにおかしくないだろうって。……大家さんのこと、何も知らなかったから」

あの夕焼けが柊二郎の夢であることも、なぜそんな夢を見ているのかも、何も知らなくて。

（綺麗だなんて）

並んで歩いている古都子が、彼を見る。その視線を感じながら、太一は自分の足下を見つめた。

「レンさんのことも……植物と話ができるんだ、へえすごいやって、最初は思っていただけなんですけど、最近俺にもそんな力があったらよかったのにって思うようになって。レンさんだけじゃなくて、ミヨシさんや十遠見さんや古都子さんのことも、みんなちゃんと理由があって空栗荘にいるからうらやましいって、思ってたんです」

そうなんだ、と古都子は言って笑う。

「うらやましいなんて、初めて言われちゃった。——うん、それで？」

「だけど今日レンさんを見ていて、あの人は本当はすごく大変だったんだなって……なのに俺、うらやましいなんて、もしかしてレンさんに対してすごく無神経で悪いことを思っていたのかな……」

レンがいつも笑っているのは、性格が穏やかで優しい人だからだと思っていた。でも、空栗荘に来る前は、彼はあんなふうに笑っていたのだろうか。

黙り込んだ太一に、古都子は朗らかに言った。

「いいんじゃない？　うんとうらやましがってやりなさいよ」

「え？」

太一は顔をあげて、古都子を見た。

「レンは植物と話ができることをイヤがっているわけじゃないから。だって本当にすごい力だもの。私だってうらやましい。草や花や樹と言葉が交わせるなんて素敵だなって、レンを見ていていつも思うの」

「……でも」

「大変だとか気の毒だとか、悪いことをしたとか、そんなことで気を遣われるより、いいなって言ってもらったほうがレンだって嬉しいと思う」

古都子は微笑む。そうして、唐突に言った。

「太一君は、空栗荘で暮らすのは楽しい？」

「え、……はい。楽しいっていうか、なんか居心地がいいっていうのかな。家や学校で今までうまくいかなかったことも空栗荘だと全然気にならないし、みんないい人たちだし、すごく気が楽な感じで」
「そう。よかった」
「俺、あそこにずっといたいです」
このまま、高校を卒業するまで。できればもっと長く。ずっと。
ああそういうこと、と古都子は呟く。
「太一君が私たちのことをうらやましいって言ったのは、あそこのみんなが他の人間と少し違っているように見えて、それが空栗荘にいられる理由だと思うから。そういうことね？」
「えっと……そう、です」
古都子は足を止めると、太一を振り向く。
正面から彼を見て、きっぱりと言った。
「あそこが好きなら、いる理由なんてそれで十分よ。でも、ひとつだけ忘れないで。――あそこは逃げ込む場所じゃないわ」
（……え？）
一瞬、息がつまった。
「空栗荘を君の逃げ場にしてはダメよ」

言葉を失っている太一に、古都子はまたニコリと微笑んだ。優しい笑みだ。
そして視線を逸らせると、道の先のほうに「おーい」と手を振る。
長身の人影がこちらにむかって走ってくるのが、見えた。
「ミヨシ、お疲れー」
「うっさいわ！」
街灯の下にあらわれたミヨシは、予想通り、苦虫を嚙み潰したような見事に不機嫌な顔をしていた。
太一はおぶったアカネがくうくうとよく寝ているのを確かめて、ミヨシのほうへと歩き出す。
——逃げ場にしてはダメ
その言葉が、耳の中でいつまでも揺れていて、消えなかった。
見上げればぽっかりと大きな月。すっかり夜の色に閉ざされた空に、中秋の満月が銀の光をたたえて浮かんでいた。

その頃、空栗荘では。
寝間着姿の軟体動物が床を這っていた。
ずるっ。ずるっ。
廊下から玄関を突っ切り、食堂の前で力つきた。

「お露さん～～」
　食堂の戸が開いて、お露さんが顔をのぞかせる。床にへばりついている大家を見て、やれやれと肩をすくめた。
「やっとのお目覚めかい」
「何か食べさせてください～、お腹がへって死にそうです～」
「砂糖水でも飲んでな」
「そんな～」
　いとも情けない声をあげる大家を、お露さんはじろりと見下ろした。
「ふん。誰のせいでこの騒ぎになったと思っているんだい。レンはぶっ倒れるし、ミヨシも古都子も太一も一日駆けずり回るはめになるし、十遠見は憑き物を落とすのにあんたにつきっきりで今は部屋で休んでいるよ。――一応は確認しておくけどね、あんた、今回のことは最初から全部わかっていたんじゃないのかい？　あんたが承知の上だったと考えりゃ、すっかり辻褄があうんだ」
「あは、あはははー」
「笑ってごまかすんじゃない。ミヨシがね、太一を霊道に送り出したあとに、どうもあんたは怪しいって言っていたよ。タカハシさんは、アカネから『お話』ってやつを聞いて、多分あんたは境界を越えていったヤツの正体を知っているだろうってさ。まったく、どういう了見なん

だい。自分が境界守だってことを、忘れているんじゃないだろうね⁉」
「すみません～。どうしても会いたい人がいるようだったんで、つい」
「つい、なんだって？」
「ほだされました」
お露さんは大きなため息をついた。
相変わらず床に張りついている大家の襟首を摑んで、ずるずると食堂に引っ張り込む。見た目は小柄な老婆だが、ヘロヘロになっているとはいえ大の男をけろりとした顔で運ぶのだから、たいした腕力だ。
大家をテーブルの前に放り出すと、お露さんは一度厨房に姿を消した。出てきた時には、握り飯とだし巻き卵をのせた盆を持っていた。ちゃんと用意はしてあったようだ。
「ほら、食べな」
目の前に食べ物を置かれたとたん、軟体動物は人間に戻った。
きちんと座って「いただきます」と手を合わせると、柊二郎は「うほほい」と奇声だか歓声だかをあげて、握り飯に手を伸ばした。
「喉をつまらせて死ぬんじゃないよ」
これ以上の騒ぎはごめんだからね、とお露さんは彼の前に茶を出しながら言う。しばらく餓鬼のごとく貪り食っている大家を眺めてから、

「うまいだろ？」
どうやら人心地ついた頃合いを見計らって、また声をかけた。
「実においしいですねぇ。それにこのやたらデカくて、黒いところがなんとも」
「太一のこさえたおむすびだよ」
ええ、と柊二郎はうなずくと、だし巻き卵に箸を伸ばす余裕を見せた。
「わかりますよ。彼の想いがこもっていますから。ついでに塩加減も上々です」
自分も湯呑みを口に運びながら、お露さんはふんと鼻を鳴らした。
「あの子もだいぶここに慣れてきたみたいだね。最初はどうなることかと思ったけど」
「そうですね。……でも、まだまだです」
「何がだい」
柊二郎は皿の上から握り飯をもうひとつ手に取って、だが齧りつく前にそれを目を細めて見つめた。
「太一君にはまだ、気づかなければならないことがたくさんあります」
「まあ、ここへ来てまだ一月だからね」
お露さんは軽く肩をすくめた。
「あの子はいい子だよ。ここにいる子たちは、みんなそうさ」
「タカハシさんもですか？」

「そりゃ本人に訊きな」
「違うっていわれたら怖いからイヤです」
柊二郎はへらへらと笑った。
「ところでお露さん、お月見の準備はできてます?」
「団子もお供えも、あとは並べるだけだよ。月の宮にはきちんと顔を見せておかないといけないからね」
「ミヨシ君に言わせれば、月にガンをくれるってやつですねー」
さてお腹もいっぱいになったことだし僕はそろそろ……と急にそわそわしだした大家を横目で睨んで、お露さんはこれ以上ないくらい冷ややかに言った。
「話を逸らせてるんじゃないよ。いいかい、あとでみんながそろったら、今回のことはきっちり全部、あんたの口から説明してもらうからね」

9

きっちり全部、と言われて大家がした説明はこうだった。
あの日たまたま、玄関から裏の賽河原町方面に出たら、庭の片隅に『でんでん太鼓』が落

ちていた。おや珍しいと思って、拾って部屋に持って帰った。ところがうっかり、『でんでん太鼓』が獏を持っていたことに気づかなかったので、その夜寝ているうちに取り憑かれてしまった。で、目を覚ましたら今日だった。以上。

「妖怪の町のほうで、地面に『でんでん太鼓』が落ちとって、思うことが『おや珍しい』だけなんかい。しかも、それを持って帰るてどういうことや⁉」

険悪な顔と声で言ったのはミヨシだ。

「はあ、まあ」

「でも相手が妖かしで、付喪になったとたんに境界越えをたくらんでいたことは、アカネちゃんに昔話をして聞かせた時点で、もうわかっていたわけね？」

古都子が呆れたように空を仰ぐ。

「ええ、まあ」

「しかもうっかりミスで、獏に取り憑かれることだけは予想していなかった。それがすべての元凶であったと」

冷え冷えとした十遠見の口調。

「いや、まあ」

さすがに憑き物を使ってくるとわかっていれば自衛手段はとったんですけどね、と大家は肩

をすぼめた。

お露さんが盛大に鼻を鳴らす。

「だから言ってるだろう、あんたはいつだってツメが甘いんだよ。なんだってそいつが四日も前にあんたの前に姿を見せたと思っているんだい。境界守が長い間眠っていれば、それだけ結界の効力も弱まると計算していたからにきまっているじゃないか」

「そうですよねぇ。あはははは！」

お月見の場に、大家の妙に虚ろな笑い声が響く。

空には皓々と輝く月。白く柔らかな光が地上に降り落ち、足下の影は透き通って青い。

空栗荘の庭に置かれた縁台には薄と秋の七草が飾られ、皿に盛った団子やサツマイモ、果物が供えられている。他に住人たちが座るための縁台もあって、そちらには酒と麦茶、お露さんがつくった肴の小鉢が用意されていた。

ところで今夜のお月見は、妖怪たちの住む異界のほうでおこなわれている。なんとなれば大家が場所を設置しようと縁台を抱えて玄関の戸を開けたら、裏側に出たからという、大雑把なのかそれなりに意味があるのかよくわからない理由による。ちなみに去年は人間の世界のほうで月見をしたらしい。べつにどこから月を眺めてもかまわないのだろうが。

時々縁台の下から黒い手がにゅるりと伸びて、お月見団子をかすめ取ってゆく。そういえば団子は勝手に取ってもいいのだと、采奈が言っていたのを太一は思い出す。一度調子にのった

ヤツがサツマイモを盗もうとして、「そっちはお供えが終わってからだよ」とお露さんに怒られていた。

というのは、ともかく――。

「ははははのは……と」

周囲の冷たい視線に、大家はしんと黙り込んだ。そうしてついに観念したように、ぱしんと手を合わせると皆にむかって頭を下げた。

「すみませんでした反省してますごめんなさい～～！」

ミヨシが手酌で自分の杯に酒をつぎながら、はあっと息をついた。

「尻ぬぐいするこっちの身にもなれや。――おいレン、おまえもなんか言うたれ」

いえ、とレンは困った顔をした。

「僕はむしろ、勝手なことをしてミヨシさんたちに迷惑をかけてしまったので……」

「そんなら太一は⁉」

「俺、べつに……危ないところを大家さんに助けてもらったし」

「甘い！　甘いでおまえら！」

「しかし境界の行き来を許可するかどうかは、最終的に境界守の判断だからな」

十遠見が言えば、古都子もそうねとうなずいた。

「事情はこれでわかったし、一件落着でもういいわよ、私は。……そういうわけでお露さん、

私、杯じゃ足りないからコップでお酒をもらっていい？」
「ああ、アホくさ。……って十遠見、その煮っころがしは俺のやんか⁉」
「おや気がつかなかったな」
「嘘つけ、絶対わざとやろ！」
大家が『でんでん太鼓』を黙認した理由を、それ以上は誰も訊かなかった。
彼の見る夕焼けの夢の意味を、皆が知っていたから。
月見の宴が始まった。

「――わからないのは、オーナーを眠らせてから今日までの丸三日間、『でんでん太鼓』がどこに潜んでいたかだが」
お露さんと差しつ差されつで酒を飲みながら、十遠見がそんなことを言う。細かい点まできっちり把握しないと気がすまない性分だ。
「どこか庭の片隅にでも隠れていたんだろ」
お露さんのほうは、どうでもよさげに応じた。干した杯を、ほらと十遠見の前に突き出す。
「こちらがまったく気づかなかったのだから、よほどうまく気配を殺していたか、さもなくば気配を立てるほどの力も持っていなかったということだな」
十遠見が杯にそそいだ酒に、月が映っていた。お露さんは手の中のその月に視線を落とすと、

「考えてみれば、バカな妖かしだよ。獏なんて使う必要はなかったんだ。空栗荘の主（あるじ）が一度家に招き入れたということは、人の世界に渡る許しが出たも同然なんだから」

月と一緒に、酒を口に運ぶ。

「あとはただ大願成就を待って、玄関の戸を開けて出て行けばいいだけだったのさ。九十九年も生きて、そんなことも知らなかったんだろうねえ。――これだからアタシは付喪ってやつが時々苦手だよ。人間につくられてその想いや欲に触れちまうぶん、人間臭くなっちまって、他の妖かしよりもずっとやっかいだ」

この老婆にしては珍しく、しみじみとした口調だった。

「それにしても、どないするつもりやろな、大家のやつ」

ミヨシがひそひそと古都子に話しかけた。横目で柊二郎に聞こえていないのを確認する。

「何が？」

「このまま結婚せえへんかったら、誰がここの境界守を継ぐねん。それでのうても今時はなかなかなり手が見つからんていうて、よその土地でも問題になっとるのに」

「あら、柊さんだって、この先一生結婚しないと決まったわけじゃないでしょ」

「仮に相手が見つかったとしてもや、ヘタしたら前と同じことになるだけやろ」

ミヨシは杯の酒をぐいっとあおった。

古都子はといえば、酒をなみなみとついだガラスのコップを、涼しい顔で傾けている。すでに何杯か空けているのに、顔色はまったく変わっていない。

「そうかしら。普段から妖怪も幽霊も妖かし関係は見慣れていて、一生ここに住むのが苦じゃなくて、しかものらくらと寝てばかりいる四十男に惚れるようないい女が一人いればいいんじゃない？」

「どこにおるんや、そんなオキナワトゲネズミくらい珍しい女が。……しかもいいオンナて」

「ここにいるけど」

ぶーっとその瞬間、ミヨシは口の中の酒を吹き出した。

「……な……ちょ、おま……っ、げほごほ！　……まさか、あ、あいつのこと……げほげほっ、ごほっ！」

盛大にむせかえっているミヨシを尻目に、古都子はコップを月にかざして眺めながら、「あーあ」とため息をついた。

「問題は、柊さんがちっとも気づいてないことなのよね」

「今日はありがとう」

レンが隣に腰かけて、言った。

「あ、いえ……。具合はもういいんですか？」

実は夕食の時に顔をあわせていて、レンがすっかり回復しているのはわかっていたけれども、お礼を言われて太一はちょっと焦った。こういう時はどう反応していいのかわからなくて、訊くまでもないことを訊いてしまった。

「うん。もう大丈夫」

レンは笑った。昼間にも「ありがとう」と言われたことを思い出して、太一はさらに落ち着かない気分になる。

（何か他の話題は……）

「レンさんはお酒を飲まないんですか？」

自分と同じようにレンが麦茶を飲んでいるのを見て、訊いてみた。

「飲めないんだ。未成年だし」

「え、レンさんて幾つなんですか」

「十七」

「ええ⁉」

ミヨシや古都子よりも年下なのはわかっていたが、雰囲気が落ち着いているのでもっとずっと年上だと思っていた。

「四月生まれだから、高校に行っていたら二年生かな。年はたいして違わないんだから敬語なんて使わなくていいよ。むしろ普通にしゃべってくれたほうが嬉しいんだけど」

「でも一学年上なら先輩なんだし、それはちょっと……」
「そっか」
レンが残念そうな顔をしたので、太一は慌てて言った。
「ど、努力します」
何がおかしかったのか、レンはクスクスと笑った。
そして、ぽつりと言う。
「彼岸花(ひがんばな)は全部消えたね」
太一は彼を見た。
「あの妖かしは、会いたい人に会えなかったんだな」
「……はい」
そのあとの言葉は低い、呟(つぶや)きみたいだった。
「会えたらよかったのに……」
本当に。太一は思う。どうしても、やっぱり思ってしまう。
会うことができればよかったのにと。——自分の中に残ってしまった痛みを、どうしたらいいのかわからなくて。
その時、背後から手が伸びてきて、きゅうっと太一の首にしがみついた。
うわっと声をあげてしまったのは、触られた拒絶反応というより、単純に驚いたのと首が締



まって苦しかったせいだ。

「太一！」

耳元で付喪の少女の笑い声が響いた。

「アカネ⁉　寝てたんじゃないのか？」

公園からおんぶして連れて帰ったら、空栗荘に着いたとたんにアカネはことんと人形に戻った。そのままケースの中で眠っていたはずだ。

「起きたー！　もういっぺんおんぶ！」

「こら。お月見してるんだから、ダメだってば」

肩越しにのぞき込むアカネの頭を、くしゃっと撫でてやった。嬉しそうに笑うアカネの顔を見て、少し気分が軽くなる。

おーいおーいと、正面の坂道から声がした。

月影の中、妖怪たちの一団がこちらへむかってやって来るのが見えた。先頭は狢だ。片手に提げた酒徳利を振っている。

「やれやれ。これじゃ肴が足りないよ」

押しかけてきた客を見て、お露さんが杯を置いて立ち上がった。

杉二郎はどんちゃん騒ぎを始めた人間と妖怪たちから少し離れて、一人で月を見上げていた。

ボンヤリしているようにも考え事をしているようにも、祈っているようにも見える。淡く微笑(ほほえ)むみたいな、不思議な表情だ。

しかし太一がそっと近寄っていくと、大家は「ほら」と顔を仰向(あおむ)けたまま空を指さした。

「何だと思います？」

太一が見上げると、濃紺の空に幾筋も、光が月を目指して走ってゆくのが見えた。逆向きになった流れ星みたいだ。

「何ですか、あれ？」

「今夜、月の宮にお参りする妖怪たちですよ」

「月にそんな建物があるんですか？」

「ありますよ。こちらの世界ではね。立派なのがどーんと」

太一は柊二郎と並んで、月を見つめた。

丸い大きな、異界の銀の月。

とても綺麗だと思った。

こんなふうに自分の傍らに誰かがいて、受(う)け容(い)れてくれる場所がある。それが消えてなくなってしまうことが、太一は今、怖かった。

「おーいそこ、何しとんねん！」

いい具合に酔っぱらったミヨシの声が聞こえる。口々に二人を呼ぶ人の声と、人でないモノの声。

「あはは。行きましょうか、太一君」

柊二郎が太一を見て、笑う。

そうして月の宴の夜は、賑(にぎ)やかに更けていった——。

あとがき

突然ですが、道頓堀のくいだおれ人形には弟がいます。「くいだおれ次郎」と言います。従兄弟もいます。「くいだおれ楽太郎」と言います。最初の頃は「くいだおれ親父」もいたそうで、このままいけば「くいだおれの母」とか「くいだおれ六兄弟」も出てくるに違いないと、ひそかに楽しみにしていたんですけど。

「よっしゃ、今度こそくいだおれ人形を出すぞー！」と勢い込んで原稿を書いていたら、そのニュースが飛び込んできました。

「大阪名物　くいだおれ」閉店。

うおぅ、まさか。難波のシンボルくいだおれ人形が路頭に迷う日が来るなんてっ。人類が滅びてもくいだおれ人形は不滅だと思っていたのに！　ってそりゃゴキブリかい！（……とここで、無人の廃墟に佇む太鼓を背負ったチンドン屋の格好の人形を想像すると、かなりシュールな光景だったりしますが）

霜島「……もしかして今これを書くと、ただの時事ネタだったりして……？」

担当氏「思いきり時事ネタですね。ということで、くいだおれ人形は出さないでください」
霜島「じゃ、じゃあ代わりにグリコ（正式名称・グリコランナー）かカニ道楽のカニを出すというのはどうでしょう？」
担当氏「もっと出さないで下さい。ていうか、賽河原町の裏側って道頓堀なんですか！？」
その一言で、阪神タイガース優勝の折に道頓堀川にダイブする妖怪たちの姿が頭に浮かんじまいました。いかんいかん。
というわけで、やっぱり今回もくいだおれ人形を登場させることはできませんでした（涙）。すまん、くいだおれ太郎。君とは所詮、縁がなかったのだな。せめて君の行く末に幸多からんことを祈る。

一巻がお盆の話だったので、二巻は秋っぽくと思ったら、夕焼けだの彼岸花だのとやたら赤い色の多い話になってしまいました。おまけに大家はほぼ全編寝たきりだし、太一はやっぱりズレてるし、采奈にいたっては……前巻より多めに空回っています（笑）。
で、今回も相変わらず妖怪だの付喪だの術者だのと、作者の趣味が全開になっております。書き手としては楽しいのですが、読み手の側からしたらどうなんだろうという不安はもちろんありましたので、一巻が出たあとに「こういう話は好きです」という声をいただいたのは、非常にありがたくもあり嬉しいことでした。

……と言いつつ、前巻との間が一年以上もあくってのはどういうわけなんだ。ごめんなさい。次はもうちょっと早くつづきを出せるよう、頑張ります。

ところで資料を読んでいていつも思うのですが、妖怪というのは結局何がしたいんだかさっぱりわからない連中がけっこう多いです。

例えば「髪切り」とか「枕返し」あたりだと、名前だけで人間の髪を切ったり、寝ている間に枕を動かしたりするヤツらだというのは、だいたいわかります。これが「豆腐小僧」だと、小僧が豆腐を持って歩いていたりするわけですが、その豆腐に何の意味があるのかは謎（一説によると豆腐を食べると身体にカビが生えるそうですが、見ず知らずの小僧の持っている豆腐をいきなり食べる人って、あまりいないんじゃなかろうか）。

さらに「ぬっぺふもふ」やら「でれすけぼーこん」とかになると、もう意味不明。前者は肉の塊に手足が生えている妖怪。見かけたらそりゃビックリしますが、別に悪さはしないそうです。後者は……えー、子供が夜ふかしをすると親に「でれすけぼーこん」が来ると脅かされるそうで。姿を見た者は誰もいないし、出てきたらどうなるかというのも、実は誰も知らなかったりします。

さらにわけがわからないのが「とぼーん」。峠にさしかかると、白く光るモノが「とぼーん！」と叫びながら追いかけてくる。それを捕まえてみると、なんと金に変わったとか。いい

ヤツじゃないか、「とぼーん」。一体何がしたかったんだ。それより何より、「とぼーん」の意味を教えてくれ。

今回も美しいイラストを描いてくださった、ミギーさん。本当にありがとうございます。今回の表紙はイメージしていた通りの彼岸花の絵で、感激です。

それから、なかなか仕上がらない原稿を我慢強く待っていてくださった、担当のMさんにも感謝。例の「白馬に乗ったくいだおれ人形」の一言がなければ、この物語はなかったでしょう（本人は否定）。というわけで、これからもよろしくお願いします。

最後に、この本を手に取ってくださった皆様にも感謝を。

この物語が皆様にとって少しでも楽しめるものであれば、作者としてこれほど幸せなことはありません。

それではまた、お会いできることを祈りつつ。

霜島ケイ

ファンレター、作品の感想を
お待ちしています

〈あて先〉

〒107－0052
東京都港区赤坂4－13－13
ソフトバンク クリエイティブ（株）
GA文庫編集部 気付

「霜島ケイ先生」係
「ミギー先生」係

http://ga.sbcr.jp/

カラクリ荘の異人たち2
～お月さんいくつ、十三ななつ～

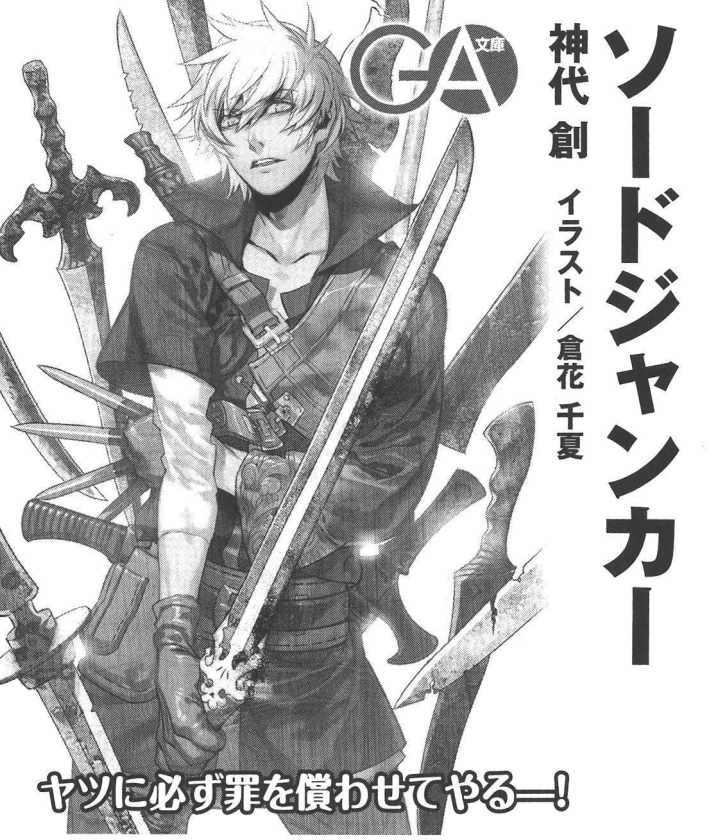
発　行　　2008年8月31日　初版第一刷発行
著　者　　霜島ケイ
発行人　　新田光敏

発行所　　ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107－0052
東京都港区赤坂4－13－13
電話　03－5549－1201
03－5549－1167（編集）

装　丁　　株式会社ケイズ（大橋 勉／彦坂暢章）

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示してあります。
© Kei Shimojima
ISBN978-4-7973-4914-6
Printed in Japan　　GA 文庫



GA 文庫

ソードジャンカー

神代 創

イラスト／倉花 千夏

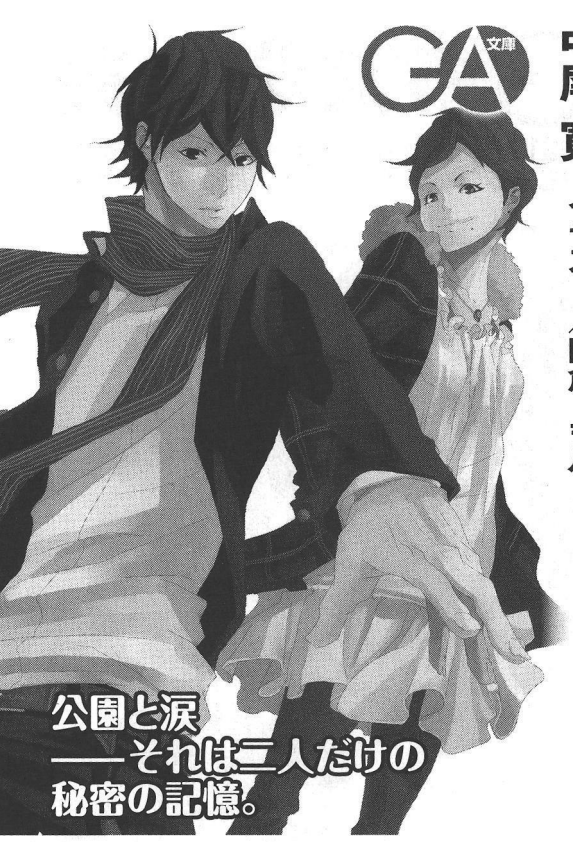
ヤツに必ず罪を償わせてやる―!

そこは、匠の作り出した刀剣が強大な力を得る世界。伝説的な名匠ロンダルの息子ローグは、突然現れた男達に父ロンダルと友人のシュウを殺される。復讐に燃えるローグは、男達の後を追う。――そんなローグの前に現れたのは、死体となっていたはずのシュウ!?　わけのわからない状況を打開すべく、2人は手がかりを追って旅に出るが ―― 神代創が贈るハイ・ファンタジー開幕!

GA 文庫

ストレイジ・オーバー2

中尾寛 イラスト／田倉トヲル



公園と涙
——それは二人だけの
秘密の記憶。

記憶使いである亘たちのチームに、一人の少女を協会本部まで運んで欲しいという依頼が入った。その少女は能力者達にとって重要な記憶を持っているのだという。依頼途中の襲撃に、避難する亘だが、そんな中で昔なじみの女性・ユウと再会した。彼女と秘密の思いでを共有する亘は、再会にしばしの休息を得るが、そのしあわせは長くは続かなかった——。記憶を操る能力者たちの物語第2弾!

第1回 GA文庫大賞

GA文庫では10代～20代のライトノベル読者に向けた
魅力あふれるエンターテインメント作品を募集します!



イラスト／ヤス

大賞賞金100万円+受賞作品刊行

希望者全員に評価シート送付!

■大賞

広義のエンターテインメント小説（ラブコメ、学園モノ、ファンタジー、アドベンチャー、SFなど）で、日本語で書かれた未発表のオリジナル作品を募集します。

※文章量は42文字×34行の書式で80枚以上130枚以下

■テーマ賞

提示された「テーマ」に沿った、日本語で書かれた未発表のオリジナル作品を募集します。テーマ賞の作品には、指定された3つの「キーワード」を作中に盛り込むことが必要です。

※文章量は42文字×34行の書式で30枚以上50枚以下

応募の詳細は弊社Webサイト
GA Graphicホームページにて **http://ga.sbcr.jp/**

9784797349146

ISBN978-4-7973-4914-6

C0193 ¥600E

1920193006001

定価 本体600円 +税

ジーエー文庫
発行：ソフトバンク クリエイティブ

カラクリ荘の異人たち2
～お月さんいくつ、十三ななつ～

十五夜が近いある日、またも〝裏の〟賽河原町が夕焼けに染まってしまった。原因はもちろん、空栗荘の大家が眠ったまま起きてこないせいである。いささか迷惑な事象ではあるが、しばらく経てば終わることと住人達はみな楽観していた。しかし、丸一日以上経っても起きてはこなかったのだ。さすがに問題有りと、大家を起こすためあれこれ一計を案じる住人達だったが、彼はなぜか、いっこうに目覚める気配がない。そんな騒ぎの中、太一のクラスメイト采菜が「弟が薄売りに連れ去られた」と、なぜか大家を頼って空栗荘にやってきたのだが――。

賽河原町奇談第二弾登場!!